

牛津町文化財調査報告書第6集

# 八幡山遺跡 I

1 9 9 5

佐賀県牛津町教育委員会

牛津町文化財調査報告書第6集

# 八幡山遺跡 I

1 9 9 5

佐賀県牛津町教育委員会

## 序 文

牛津町は、有明海沿岸にそそぎ込む嘉瀬川の西部で佐賀平野のほぼ中央部に位置した人口約1万人の小さな町です。佐賀市近郊ということもあって最近ベッドタウンとしても注目されてきており、いろいろな開発がすすめられてきています。

町内に所在する遺跡の範囲内にもさまざまな開発が促進されてきており、それに伴い緊急の埋蔵文化財発掘調査を実施するケースが増える傾向にあります。その成果として、少しずつですが学問的に裏付けされた古代の歴史的事実が明らかになってきています。

今回、ここにまとめた調査報告書は、牛津町内を東西に横断する県南部の主幹線道路である国道34号の4車線拡幅事業に伴って実施した発掘調査の記録です。

国道拡幅事業に伴う発掘調査の報告としては、平成4年度に刊行した「生立ケ里遺跡」がありますが、今回の発掘は丘陵部の調査で、開発対象面積も約10,000㎡と大規模なものになりました。

この調査では、弥生時代に営まれた甕棺墓等の墓地が確認されました。嘉瀬川以西の佐賀平野部において、これだけまとまった形で墓地が検出された例は少ないようです。また今回の調査では、古墳時代の住居の跡なども発見されています。それに加えて、中世期の山城あるいは砦的な施設の跡とみられる遺構も確認されました。こうした成果にふれながら、古代に生きた人々に思いをはせてみてはどうでしょうか。

この報告書が私達のふるさとの歴史と文化を考えるための助けとなり、文化財保護及び佐賀平野における古代史研究を行ううえで、一資料として貢献できれば幸いです。

なお、発掘調査にあたってご協力いただきました地元の方々をはじめ、関係各位の皆様にご心から感謝を申し上げます。

平成7年3月31日

牛津町教育委員会  
教育長 藤瀬豊彦

## 例 言

1. 本書は、牛津町教育委員会が建設省九州地方建設局佐賀国道工事事務所による牛津町大字下砥川寺町地区内を横断する国道34号の拡幅事業に伴い、平成4年4月13日～12月15日にかけて実施した発掘調査の記録をまとめたものであり、牛津町埋蔵文化財調査報告書第6集である。
2. 調査地は佐賀県遺跡地図によると周知の遺跡「八幡山城（砦）跡」の範囲内に位置するため、本来は本報告書名もそれに習うべきだろう。しかし、発掘調査の結果は山城の施設跡の確認にとどまらず、他に弥生時代の墓地や古墳時代の住居跡なども確認しており、複合遺跡の性格を有することが判明した。そのため、今回の報告ではことさらに「山城（砦）跡」という用語を用いて誤解や混乱を生むよりも総称的な名称を用いた方がよいと判断し、「八幡山遺跡」という名称を用いることにした。
3. 発掘調査は、牛津町教育委員会が調査主体として実施し、佐賀県教育委員会の指導を受けた。
4. 基準点測量および10mメッシュ杭設定、並びに遺構実測図の作成は、(有)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
5. 本書に示した方位は、国土調査法第座標系に基づく座標北である。
6. 遺物実測図の作成は、甕棺については(有)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。その他の遺物については主に大橋が行った。
7. 遺構及び遺物実測図の浄書は、個別遺構図及び甕棺については主に(有)埋蔵文化財サポートシステムに委託し、その他の部分については大橋が行った。
8. 遺構の個別写真及び遺物写真の撮影は大橋が行った。
9. 気球による空中写真の撮影は、(有)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
10. 本書の執筆・編集は、大橋が担当した。
11. 遺構の略称・番号は、調査時に溝跡：SD、柱穴：P、土壌あるいは土壌墓：SK、甕棺墓：SJ、石棺墓：SC、掘立柱建物跡：SB、不明土壌：SX、柵列：SAとし、SD・SK・SJ・SC・SX・SAについては各調査区（A～D区）ごとに通して番号を付けた。Pについては単独で01より番号を付けた。本書では、これをそのまま使用した。
12. 弥生時代の甕棺墓から出土した人骨の鑑定については、長崎大学医学部解剖学第二教室にお願いし、玉稿をいただいた。本文のV章に掲載した。

### [調査整理体制]

#### 事務局

	局長 西岡二郎（前任）	牛津町教育委員会	教育長
	藤瀬豊彦	〃	教育長
	次長 大屋克己	〃	教育次長
	庶務 平川武子（前任）	〃	教育総務係長
	〃 香田栄次（〃）	〃	主 事
	北島富美子	〃	主 事
	岸川 斉	〃	主 事
調査員	大橋隆司	〃	主 事

指 導 佐賀県教育委員会文化財課

協 力 建設省九州地方建設局佐賀国道工事事務所

### [発掘調査参加者]

・中村勝・大坪義良・本山祐博・遠江功治・武富太郎・松林勤治・大塚栄作・西村秀昭・田中哲・田添良成  
 ・北原陽介・吉次慶子・辻三栄子・田代朝子・井手美津子・平川幸代・池田初枝・平川富代・田中ツル・江口祐子・陣内良子・三溝恵美子・陣内ミドリ・三溝トラ子・梅崎光子・一ノ瀬フジヨ・井上ツル・古川フヨ・森永ウメノ・古賀カツヨ・森永とめ子・川崎リツ子・森永栄子・西村好枝・森永次子・森永イツ子・岡本キクエ  
 ・吉田清子・百崎智恵子・西村鳴子・江口千寿子・江口千鶴子・北原しとみ・北原悦子・石井和子・百崎マサヨ・江口美代子・平野澄子・江口正子

### [整理作業]

・吉田里美・田端恵子・中島玲子・井手美津子・吉次慶子

# 目 次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
II. 位置と歴史的環境	2
1. 位置と地理的環境	2
2. 周辺遺跡と歴史的環境	2
III. 調査概要	5
1. 調査地の状況と調査区の設定	5
2. 調査の経過と概要	6
IV. 調査の記録	8
1. 弥生時代の遺構と遺物	8
(1) 甕棺墓	8
① S J - 22 (Fig. 5, Fig. 8)	8
② S J - 23 (Fig. 6, Fig. 8)	11
③ S J - 24 (Fig. 7, Fig. 8)	11
④ S J - 25 (Fig. 9, Fig. 11)	12
⑤ S J - 27 (Fig. 10, Fig. 12)	13
⑥ S J - 28 (Fig. 9, Fig. 11)	15
⑦ S J - 33 (Fig. 16, Fig. 22)	16
⑧ S J - 34 (Fig. 9, Fig. 12)	16
⑨ S J - 52 (Fig. 13, Fig. 15)	16
⑩ S J - 54 (Fig. 13, Fig. 15)	16
⑪ S J - 55 (Fig. 16, Fig. 22)	17
⑫ S J - 56 (Fig. 19)	17
⑬ S J - 58 (Fig. 19)	17
⑭ S J - 59 (Fig. 16)	18
⑮ S J - 60 (Fig. 16)	18
⑯ S J - 61 (Fig. 14, Fig. 15)	18
⑰ S J - 62 (Fig. 14, Fig. 17)	18
⑱ S J - 63 (Fig. 16)	19
⑲ S J - 64 (Fig. 16)	21
⑳ S J - 65 (Fig. 16, Fig. 17)	21
㉑ S J - 70 (Fig. 17)	21
㉒ S J - 71	21
㉓ S J - 76 (Fig. 14)	21
㉔ S J - 88 (Fig. 19)	22
㉕ S J - 89 (Fig. 19, Fig. 20)	22
㉖ S J - 90	22
㉗ S J - 93 (Fig. 16)	22
㉘ S J - 101 (Fig. 18, Fig. 20)	24
㉙ S J - 102 (Fig. 18)	24
㉚ S J - 110 (Fig. 19, Fig. 21)	24
㉛ S J - 111 (Fig. 19, Fig. 21)	24

㉜ S J - 112 (Fig. 19, Fig. 22)	25
㉝ S J - 113 (Fig. 19, Fig. 20)	25
㉞ S J - 114 (Fig. 19, Fig. 22)	25
㉟ S J - 118 (Fig. 20)	25
㊱ S J - 119	25
(2) 土壙墓	27
① S K - 21 (Fig. 23)	27
② S K - 29 (Fig. 23)	27
③ S K - 30 (Fig. 23)	27
④ S K - 31 (Fig. 24)	27
⑤ S K - 32 (Fig. 24)	28
⑥ S K - 66 (Fig. 24)	28
⑦ S K - 67	28
⑧ S K - 68 (Fig. 25)	28
⑨ S K - 69 (Fig. 25)	28
⑩ S K - 73 (Fig. 25)	29
⑪ S K - 81 (Fig. 26, Fig. 28)	29
⑫ S K - 85 (Fig. 30)	30
⑬ S K - 86 (Fig. 27, Fig. 29)	30
⑭ S K - 87 (Fig. 30)	31
⑮ S K - 91 (Fig. 30)	31
⑯ S K - 92 (Fig. 31)	31
⑰ S K - 94	31
⑱ S K - 95 (Fig. 31)	32
⑲ S K - 96	32
⑳ S K - 97	32
㉑ S K - 98 (Fig. 31)	32
㉒ S K - 99 (Fig. 32)	33
㉓ S K - 103 (Fig. 32)	33
㉔ S K - 104 (Fig. 32)	33
㉕ S K - 106 (Fig. 32)	34
㉖ S K - 107 (Fig. 33)	34
㉗ S K - 109 (Fig. 33)	35
㉘ S K - 115 (Fig. 33)	35
㉙ S K - 116 (Fig. 34)	35
㉚ S K - 117 (Fig. 34)	35
㉛ S K - 156 (Fig. 34)	36
㉜ S K - 157 (Fig. 34)	37
㉝ S K - 163 (Fig. 34)	37
(3) 石蓋土壙墓	37
① S K - 72 (Fig. 35)	37
② S K - 80	38

## 目 次

③ S K - 120	38
(4) 箱式石棺墓	39
① S C - 26 (Fig. 38)	39
② S C - 51 (Fig. 39)	39
③ S C - 53 (Fig. 40)	40
④ S C - 57	40
⑤ S C - 74	40
⑥ S C - 75 (Fig. 41, Fig. 42, Fig. 43)	40
⑦ S C - 77 (Fig. 44)	42
⑧ S C - 78 (Fig. 45)	43
⑨ S C - 79 (Fig. 46)	43
⑩ S C - 82 (Fig. 47)	44
⑪ S C - 83 (Fig. 49)	45
⑫ S C - 84 (Fig. 50)	46
⑬ S C - 121	47
⑭ S C - 122 (Fig. 48)	47
⑮ S C - 162	47
(5) その他の遺構と出土遺物	48
2. 古墳時代の遺構と遺物	51
(1) 竪穴式住居	51
① S K - 151 (Fig. 53, Fig. 54)	51

② S K - 152	54
③ S K - 153	54
④ S K - 155	54
(2) その他の遺構と出土遺物	55
3. 中世期の遺構と遺物	57
(1) 土壌	57
① S K - 04	57
② S K - 03, 06, 08, 09	58
③ S K - 41	60
(2) 掘立柱建物跡	61
① S B - 01, 02, 03, 04	61
② S B - 05, 06	62
③ S B - 07, 08	68
(3) 柵列	68
① S A - 01, 02, 03	68
(4) 溝跡	69
① S D - 150	69
(5) その他の遺構と出土遺物	73
① 遺物包含層 (整地層)	73
V. 八幡山遺跡出土土人骨について	78
VI. おわりに	81

## 挿 図

付図 1 調査地地形測量図	付録
付図 2 遺構配置図	付録
Fig. 1 調査地周辺地図 (1/8000)	1
Fig. 2 周辺遺跡地図 (1/25000)	4
Fig. 3 調査区の設定	6
Fig. 4 A ~ B 調査区遺構配置図 (1/50)	9
Fig. 5 SJ-22出土状況図 (1/30)	11
Fig. 6 SJ-23出土状況図 (1/30)	11
Fig. 7 SJ-24出土状況図 (1/30)	12
Fig. 8 SJ-22, 23, 24 甕棺実測図 (1/12)	13
Fig. 9 SJ-25, 28, 34 出土状況図 (1/30)	14
Fig. 10 SJ-27 出土状況図 (1/30)	15
Fig. 11 SJ-25, 28 甕棺実測図 (1/12)	15
Fig. 12 SJ-27, 34 甕棺実測図 (1/12)	16
Fig. 13 SJ-52, 54 出土状況図 (1/30)	17
Fig. 14 SJ-61, 62, 76 出土状況図 (1/30)	18

Fig. 15 SJ-52, 54, 61 甕棺実測図 (1/12)	19
Fig. 16 SJ-33, 55, 59, 60, 63, 64, 65, 93 出土状況図 (1/30)	20
Fig. 17 SJ-62, 65, 70 甕棺実測図 (1/12)	21
Fig. 18 SJ-101, 102 出土状況図 (1/30)	22
Fig. 19 SJ-56, 58, 88, 89, 110, 111, 112, 113, 114 出土状況図 (1/30)	23
Fig. 20 SJ-89, 101, 113, 118 甕棺実測図 (1/12)	24
Fig. 21 SJ-110, 111 甕棺実測図 (1/12)	25
Fig. 22 SJ-33, 55, 112, 114 甕棺実測図 (1/6)	26
Fig. 23 SK-21, 29, 30 遺構実測図 (1/40)	27
Fig. 24 SK-31, 32, 66 遺構実測図 (1/40)	28
Fig. 25 SK-68, 69, 73 遺構実測図 (1/40)	29
Fig. 26 SK-81 遺構実測図 (1/40)	30
Fig. 27 SK-86 遺構実測図 (1/30)	30
Fig. 28 SK-81 出土鉄斧実測図 (1/2)	31

## 挿 図

Fig. 29	SK-86出土鉄剣実測図(1/3) ……	31
Fig. 30	SK-85, 87, 91遺構実測図(1/40) ……	32
Fig. 31	SK-92, 95, 98遺構実測図(1/40) ……	33
Fig. 32	SK-99, 103, 104, 106遺構実測図(1/40) ……	34
Fig. 33	SK-107, 109, 115遺構実測図(1/40) ……	35
Fig. 34	SK-116, 117, 156, 157, 163遺構実測図(1/40) ……	36
Fig. 35	SK-72遺構実測図(1/30) ……	37
Fig. 36	SK-80遺構実測図(1/30) ……	37
Fig. 37	SK-120遺構実測図(1/30) ……	38
Fig. 38	SC-26遺構実測図(1/30) ……	39
Fig. 39	SC-51遺構実測図(1/30) ……	39
Fig. 40	SC-53遺構実測図(1/30) ……	40
Fig. 41	SC-75遺構実測図(1/30) ……	41
Fig. 42	SC-75出土管玉実測図 ……	42
Fig. 43	SC-75出土鏃実測図 ……	42
Fig. 44	SC-77遺構実測図(1/30) ……	43
Fig. 45	SC-78遺構実測図(1/30) ……	43
Fig. 46	SC-79遺構実測図(1/30) ……	44
Fig. 47	SC-82遺構実測図(1/30) ……	45
Fig. 48	SC-122遺構実測図(1/30) ……	45
Fig. 49	SC-83遺構実測図(1/30) ……	46
Fig. 50	SC-84遺構実測図(1/30) ……	47
Fig. 51	SX-123, 200, SK-209出土遺物実測図 ……	49

Fig. 52	出土石器実測図 ……	50
Fig. 53	SK-151出土状況図 ……	52
Fig. 54	SE-04, SK-02, 151, 153, 155 出土石器実測図 ……	53
Fig. 55	B-Ⅱ, C-Ⅰ区出土石器実測図 ……	54
Fig. 56	D調査区包含層出土石器実測図 ……	55
Fig. 57	C調査区出土滑石製品実測図 ……	56
Fig. 58	SE-04遺構実測図(1/40) ……	58
Fig. 59	B調査区出土石器実測図 ……	59
Fig. 60	A-Ⅱ, B-Ⅰ区出土陶磁器実測図 ……	60
Fig. 61	SK-41遺構実測図(1/40) ……	61
Fig. 62	B-Ⅱ調査区遺構配置図(1/150) ……	63
Fig. 63	C調査区遺構配置図(1/150) ……	65
Fig. 64	掘立柱建物跡遺構実測図(1/100) ……	67
Fig. 65	B-Ⅱ調査区出土陶磁器実測図 ……	69
Fig. 66	SD-150調査区出土石器実測図 ……	70
Fig. 67	SD-150調査区出土陶磁器実測図 ……	71
Fig. 68	C-Ⅰ調査区出土石器実測図 ……	73
Fig. 69	B-Ⅱ調査区出土陶磁器実測図 ……	74
Fig. 70	C-Ⅰ調査区出土陶磁器実測図 ……	75
Fig. 71	調査地地形断面図 ……	76
Fig. 72	古銭拓本 ……	77

## 図 版

Photo. 1	調査地風景 ……	5
Photo. 2	各調査区作業風景 ……	7
Photo. 3	A-Ⅰ調査区作業風景(上) ……	8
	遺構掘下げ状況(下) ……	8
Photo. 4	C区調査作業風景(上) ……	51
	C区掘下げ完了写真(下) ……	51
Photo. 5	中世期遺構の検出作業と溝跡 ……	57
Photo. 6	A, B調査区遺構完掘状況 ……	図版 1
Photo. 7	B-Ⅱ調査区遺構完掘状況 ……	図版 1
Photo. 8	C調査区遺構完掘状況 ……	図版 2
Photo. 9	A-Ⅰ調査区遺構完掘状況 ……	図版 2
Photo. 10	A-Ⅱ調査区遺構完掘状況 ……	図版 3
Photo. 11	A-ⅡSX-49西側遺構完掘状況 ……	図版 3
Photo. 12	SJ-22検出状況 ……	図版 4

Photo. 13	SJ-23, 24検出状況 ……	図版 4
Photo. 14	SJ-24検出状況 ……	図版 4
Photo. 15	SJ-25検出状況 ……	図版 4
Photo. 16	SJ-25人骨出土状況 ……	図版 4
Photo. 17	SJ-27検出状況 ……	図版 4
Photo. 18	SJ-28検出状況 ……	図版 4
Photo. 19	SJ-33検出状況 ……	図版 4
Photo. 20	SJ-34検出状況 ……	図版 5
Photo. 21	SJ-52検出状況 ……	図版 5
Photo. 22	SJ-54検出状況 ……	図版 5
Photo. 23	SJ-55検出状況 ……	図版 5
Photo. 24	SJ-59, 60検出状況 ……	図版 5
Photo. 25	SJ-61検出状況 ……	図版 5
Photo. 26	SJ-76検出状況 ……	図版 5

# 図 版

Photo.27	S J -88	検出状況	図版 5
Photo.28	S J -89	検出状況	図版 6
Photo.29	S J -111	検出状況	図版 6
Photo.30	S J -111, 113	検出状況	図版 6
Photo.31	S J -112, 114	検出状況	図版 6
Photo.32	S J -110	検出状況	図版 6
Photo.33	S C -26	検出状況	図版 6
Photo.34	S C -26	棺内状況	図版 6
Photo.35	S C -51	検出状況	図版 7
Photo.36	S C -51	棺内状況	図版 7
Photo.37	S C -53	検出状況	図版 7
Photo.38	S C -75	検出状況	図版 7
Photo.39	S C -75	蓋石除去後	図版 7
Photo.40	S C -75	棺内状況	図版 8
Photo.41	S C -75	掘り方状況	図版 8
Photo.42	S C -75	鋤出土状況	図版 8
Photo.43	S C -78, 79	検出状況	図版 8
Photo.44	S C -78	棺内状況	図版 8
Photo.45	S C -79	蓋石除去後	図版 8
Photo.46	S C -82	検出状況	図版 9
Photo.47	S C -83	検出状況	図版 9
Photo.48	S C -83	棺内状況	図版 9
Photo.49	S K -120	検出状況	図版 9
Photo.50	S C -122	検出状況	図版 9
Photo.51	S C -122	蓋石除去後	図版 9
Photo.52	S K -21	検出状況	図版 9
Photo.53	S K -29	検出状況	図版 9
Photo.54	S K -68, 69	検出状況	図版10
Photo.55	S K -86	検出状況	図版10
Photo.56	S K -86	完掘状況	図版10
Photo.57	S K -86	鉄剣出土状況	図版10
Photo.58	S K -87	検出状況	図版10
Photo.59	S K -87	完掘状況	図版11
Photo.60	S K -92	検出状況	図版11
Photo.61	S K -92	検出状況	図版11
Photo.62	S K -92	検出状況	図版11

Photo.63	S K -115	検出状況	図版11
Photo.64	S K -117	検出状況	図版12
Photo.65	S K -156	検出状況	図版12
Photo.66	S K -156, 157	検出状況	図版12
Photo.67	S K -163	検出状況	図版12
Photo.68	S K -151	検出状況	図版12
Photo.69	S K -152	検出状況	図版12
Photo.70	S K -153	検出状況	図版12
Photo.71	S E -04	土層	図版12
Photo.72	B - I	調査区柵列跡	図版13
Photo.73	B - I	調査区柵列跡	図版13
Photo.74	B - II	調査区検出状況	図版13
Photo.75	B - II	調査区南側ピット群	図版13
Photo.76	B - II	調査区SK-41西ピット群	図版13
Photo.77	B - II	調査区S B -05, 06	図版14
Photo.78	B - II	調査区S B -05, 06	図版14
Photo.79	B - II	調査区S X -35	図版14
Photo.80	B - II	調査区S X -35	図版15
Photo.81	C - I	調査区S D -150	図版15
Photo.82	C - III	調査区北側ピット群	図版15
Photo.83	C - I	調査区整地層除去後	図版15
Photo.84	A - II	調査区S X -49土層	図版15
Photo.85	C - I	調査区S D -150土層	図版15
Photo.86	C - II	調査区S D -150	図版15
Photo.87	S J -33	(上下)	図版16
Photo.88	S J -25		図版16
Photo.89	S J -62		図版16
Photo.90	S J -24		図版16
Photo.91	S J -22	(上)	図版17
Photo.92	S J -22	(下)	図版17
Photo.93	S K -86	出土鉄剣	図版17
Photo.94	S C -75	出土鏃	図版17
Photo.95	S K -81	出土鉄斧	図版17
Photo.96		滑石製品	図版17
Photo.97	S C -75, 78	出土管玉	図版17





よる削平を受けている約4,000m<sup>2</sup>を除いた部分を対象に確認調査を実施したところ、ほぼ全域から弥生、古墳、中世期の各遺構や遺物が検出された。この調査結果に基づいて佐賀国道工事事務所と協議を重ね、平成4年中に本調査を実施し完了するという方向で対応することになった。当教育委員会ではこの合意事項に基づき、平成4年度当初より本調査の準備を開始した。そして、ゴールデンウィーク明けの5月11日より表土剥ぎのための掘削機を導入して調査を開始した。佐賀国道工事事務所との協議では、平成6年4月の牛津町内全面4車線開通を実現するためには発掘調査と同時に工事を進めていく方法しかないということで、設定した調査区ごとに完了した時点で工事側に引き渡すという手段を取らざるを得なかった。そして、最終的にD調査区を引き渡したのが12月16日であり、工事側との基本合意事項である「12月中の調査完了」が達成できたことは幸いであった。

## Ⅱ. 位置と歴史的環境

### 1. 位置と地理的環境

今回調査を実施した八幡山遺跡が所在する牛津町は佐賀県中南部、有明海に注ぎ込む嘉瀬川以西の沖積平野部に位置する。当町は小城郡に属しており、北は小城町と三日月町、東は久保田町、西は多久市、江北町、南は芦刈町と接しており、県庁所在地の佐賀市からは西方約10kmの地点にあたる。町のほぼ中央部には、天山山系に源を発して有明海に注ぎ込んでいる牛津川が蛇行しながら南北に流れている。この牛津川を境にして西側が旧砥川村、東側が旧牛津町であるが、昭和31年の町村合併によって牛津町となった。

町の面積は13.26平方キロで佐賀県内で6番目に小さい町である。しかし、人口は平成6年末で約10,200人であり、人口密度は高い。

この町の地形は、標高2～5mの範囲の平坦な沖積地が全体の8割を占めている。これは、有明海沿岸に潮汐作用などによって堆積し生成されたいわゆる「有明粘土層」と呼ばれる海成粘土層が数m～10数m形成されたもので、有明海沿岸地方特有の軟弱地盤帯である。

山地帯は、町の西部に形成されている。大平山(269.5m)と御嶽山(243.4m)の山地帯、そしてそこから東方向に形成された標高50m以下の山麓部と江北町境の東南方向に舌状に伸びた標高50m以下の低位丘陵部がある。

八幡山遺跡は、この低位丘陵部の最南端部で独立丘陵状の地形となる一帯に位置する。

### 2. 周辺遺跡と歴史的環境

八幡山遺跡の周辺には、これまで本格的な発掘調査を実施された遺跡は数少ないが、町内では最近になって八幡山遺跡の西側丘陵上に位置する丸石塚遺跡<sup>(注1)</sup>が発掘調査されている。この遺跡は国道34号によって分断された江北町境の東西に伸びる低丘陵上にあり、もともとは同一の遺跡と

して捉えていいと考えられる。丸石塚遺跡からは、弥生時代の円形住居跡や倉庫跡とみられる大型掘立柱建物の柱穴等が確認されている。前面には有明海が広がり、後背には山地帯が迫っているという自然環境から考えても、弥生時代に集落を営むに適した場所であったといえるだろう。

その他、弥生時代の遺跡としては町東部の三日月町境に生立ケ里遺跡<sup>注2)</sup>、練ケ里遺跡<sup>注3)</sup>がある。両遺跡ともに弥生時代中期前半期、古墳時代前期の集落跡であり、また平安時代の建物跡なども確認されている複合遺跡である。

低湿地遺跡である生立ケ里遺跡では、赤漆で幾何学文様を線描した木製槽をはじめ木製剣等の儀器や、杵・臼の農耕具など弥生・古墳時代の木製品が多量に出土している。また、古墳時代の井戸跡からは遺存状態の良い布留式土器が多数出土している。

平安期の遺物としては、ごく小数であるが輸入陶磁器（越州窯系の青磁碗）や墨書土器なども出土した。また、遺構としては火事にあつたとみられる比較的大型の掘立柱建物跡も検出している。この時期は全国的に土地の私有化が進み貴族や寺院の荘園化が進むことになるが、乙柳、生立ケ里、練ケ里など牛津町の北東部一帯も奈良時代に施行された条理制によって徐々に開田されていく。そして「宇佐大鏡」によれば、11世紀になると宇佐八幡宮の寺領とされたとあり、生立ケ里遺跡の調査は寺領に関連する施設<sup>注4)</sup>の存在を伺わせる結果となった。

その他、古墳・中世の遺跡として柿樋瀬遺跡<sup>注4)</sup>がある。中世期の遺物としては、同安窯系の青磁碗や瓦器碗などが出土し、周辺に寺院あるいは館跡<sup>注5)</sup>が所在していた可能性が考えられる。

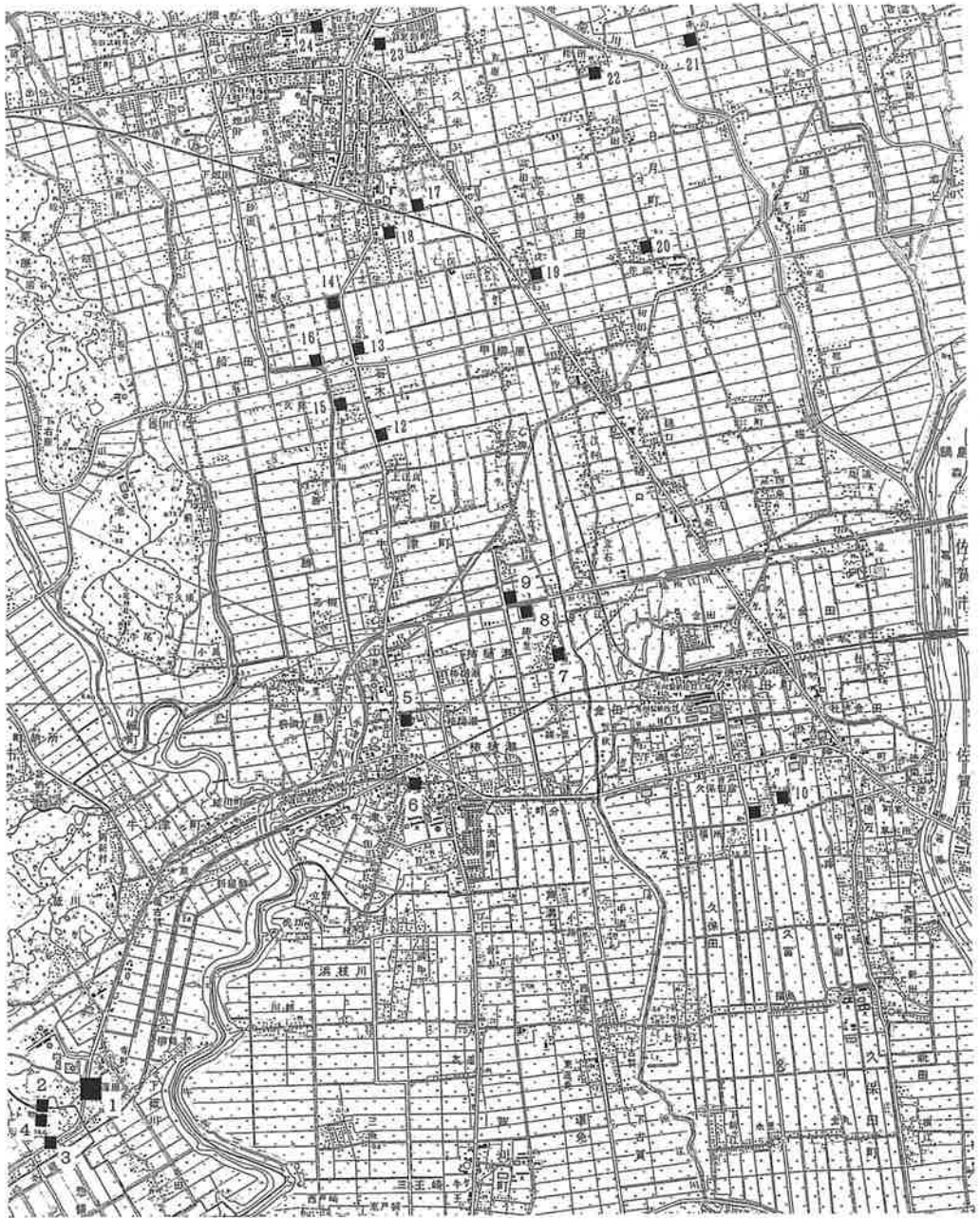
町外に目を向ければ、まず八幡山遺跡周辺には町境の低丘陵部上の南斜面に宿浦遺跡<sup>注5)</sup>が所在する。この遺跡についても最近になって発掘調査が実施され、弥生時代の住居跡等が確認された。また、三日月町では土生遺跡から南へ約500m下った地点で、牛津町上江良遺跡と境をなす石木中高遺跡<sup>注6)</sup>の発掘調査が実施されている。この遺跡では縄文晩期の自然流路が確認され、土器片に混じって土偶の脚～尻部<sup>注6)</sup>にかけた部分<sup>注6)</sup>が出土して注目された。

#### (参考文献)

1. 牛津町史(昭和33年12月発行、伊東祐治著、牛津町史編纂委員会編)
2. 牛津町史(平成2年3月発行、牛津町史編さん委員会編)

#### (注)

- 1) 牛津町教育委員会(1993)「柿樋瀬遺跡Ⅰ・丸石塚遺跡Ⅰ」
- 2) 牛津町教育委員会(1993)「生立ケ里遺跡Ⅰ」「生立ケ里遺跡Ⅱ」
- 3) 牛津町教育委員会(1992)「練ケ里遺跡Ⅰ」
- 4) 牛津町教育委員会(1993)「柿樋瀬遺跡Ⅰ・丸石塚遺跡Ⅰ」
- 5) 平成5年度に牛津町と江北町の合同プロジェクトに伴う発掘調査を実施しており、牛津町は「丸石塚遺跡Ⅱ、Ⅲ」江北町では「宿浦遺跡Ⅱ」で報告書をまとめる予定である。
- 6) 平成6年度に発掘調査が実施されており、現在整理中。



1 八幡山遺跡	7 線ヶ里遺跡 I	13 土生遺跡	19 戌遺跡
2 丸石塚遺跡 I, II	8 線ヶ里遺跡 II	14 土生B遺跡	20 佐織遺跡
3 宿浦遺跡 I	9 生立ヶ里遺跡 I, II	15 石木遺跡	21 杉町遺跡
4 宿浦遺跡 II	10 上恒安遺跡	16 久蘇遺跡	22 袴田遺跡
5 柿橋瀬遺跡 I	11 後藤館跡	17 久米遺跡	23 本告遺跡
6 柿橋瀬遺跡 II	12 石木高中遺跡	18 下久米遺跡	24 天神軒遺跡

■ Fig 2. 遺跡地図 (1/25000)

### Ⅲ. 調査概要

#### 1. 調査地の状況と調査区の設定

八幡山遺跡は標高10m～28mの丘陵上に位置し、遺跡の大半は八幡神社の社領である。丘陵の頂上は社が建立され、平坦な境内が形作られている。この遺跡の西側は丸石塚遺跡が所在する低丘陵へと緩やかに続く鞍部状になっており、その部分を切り通して国道34号が建設されている。そのため道路際は急斜面となっており、頂上に至る間に八幡社境内を取り巻く形で大きな平坦が形作られ、畑として開墾されていた。

遺跡の東側及び南側部分は断崖斜面となっており、北側は神社への参道が取り付けられている。国道の拡幅部分はこの遺跡の西側部分が大半であった。一部は道路反対側の丸石塚遺跡の部分が拡幅されることになったが、調査当初より八幡山遺跡として包括して考えることにした。



■ Photo.1 調査地風景

遺跡西側の開発対象地の中央部分は、数年前から土取りによって大きく削平されていた。このことが調査を進めていくに従って、面的な遺構の連続性を欠く大きな要因となったことは言うまでもない。埋蔵文化財に対する無理解な開発者の行為が良好な歴史資料を消滅させていくことを改めて感じさせられた。

約10,000㎡の調査対象地のなかで、道路際の急斜面部分は交通車両などの安全確保のため発掘調査の対象から外すことにした。これは、すでに国道建設時に切り通し工事により形成された斜面であると判断した結果である。従って、この道路際の斜面部分及び土取りにより削平された部分を除いた約5,000㎡について発掘調査を実施することになった。

また、調査開始前に工事担当者との協議を行った結果、工事工程上調査が完了した部分から随時工事側に引き渡して欲しいという要望があったため、これに対応してA～D調査区を設定し、各調査区が終了したところで調査区ごとに引き渡すことにした。

調査区の設定は、国道34号東側拡幅部分を現況の地形を利用してA～C区の3区に分け、西側江北町境の小区画をD区とした。A区は江北町境より東西に入る切通しまでとし、それから土取りによる削平部分までをB区、土取り部分北側の調査区をC区として設定し調査を開始した。

## 2. 調査の経過と概要

発掘調査は平成4年4月16日より事前の準備を開始した。工事側による交通車両安全確保のための擁護壁の設置を要請し、その一方で(有)埋蔵文化財サポートシステムによる調査地の現況測量を依頼した。そして、これらの作業が完了するのを待ってゴールデンウィーク後の5月11日より掘削機を導入して表土剥ぎを開始した。

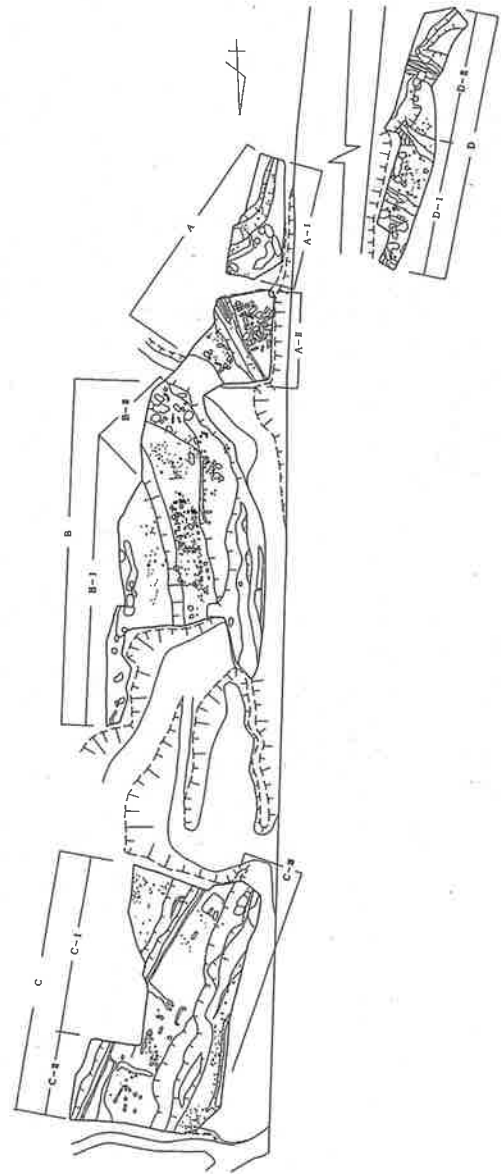
開発側との事前協議の結果、B調査区から発掘調査を開始して引き渡した方が工事工程上は最善であるということになり、掘削機による表土剥ぎはB区より開始した。その後、調査はA区→C区→D区という順序で進めていった。

今回の調査については時間的な制約があったため、できる限り多くの作業員を募集して効率的に活用する必要があった。そのため、遺跡の周辺に点在する集落に協力を呼びかけ、30人以上の作業員が常時調査に参加するような体制を確保した。

B調査区は丘陵頂部の八幡神社境内の西隣部分にあたる。標高的には調査地の中でもっとも高い部分にやや幅の狭い平坦面があり、その下段には南北方向に幅広い帯状の平坦面が作られている。山城的施設でいえば帯曲輪として捉えられる平坦面から国道に向けては急斜面となっており、その途中に小規模な平坦面がいくつか作られていた。

表土剥ぎは上段の平坦面(B-I区)から始めた。この調査区の平坦面は従来畑として開墾されていたため、遺構検出面は表土直下で確認できた。地山は礫混じりの赤褐色風化粘質土で、その中に暗赤褐色の覆土を有する遺構が掘り込まれていた。

検出した遺構は性格不明の土壇及び井



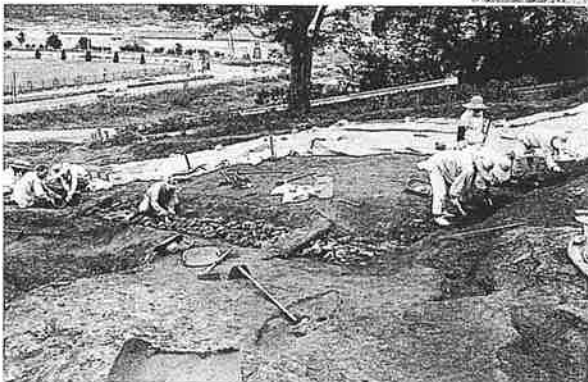
■ Fig. 3 調査区の設定



に埋葬された人々の生活跡は確認できなかった。

また、B～C区の調査では現況として平坦面を形成している部分が少なくとも中世期に土木整地された施設に関連するものであることが分かった。

C区では平坦面と削り出された斜面の間に空濠とみられる南北に走る溝跡を検



の遺物包含層も検出しており、この八幡山遺跡そして西側に隣接する丸石塚遺跡が弥生時代～古墳時代の生活址であることが明らかになった。

戸跡などであり、井戸跡からは宗銭が出土している。

B-Ⅱ区はこの調査地のなかで最大の規模の平坦面である。この調査区の南側では甕棺墓や石棺墓など、弥生時代の墓が検出された。この墓地は後世の切り通しによりA-Ⅱ区で検出された墓地と分断されていることが分かったが、ここ

出した。この遺構からは鎌倉時代の様相を示す遺物が出土しており、この遺跡が中世の戦略拠点、言い換えれば山城または砦的施設であった可能性を示す結果となった。また、この平坦面には古墳時代の住居跡が僅かだが痕跡を残していた。

またA-I区やD区では、古墳時代



■ Photo. 2 調査作業風景 (A～D区)

## IV. 調査の記録

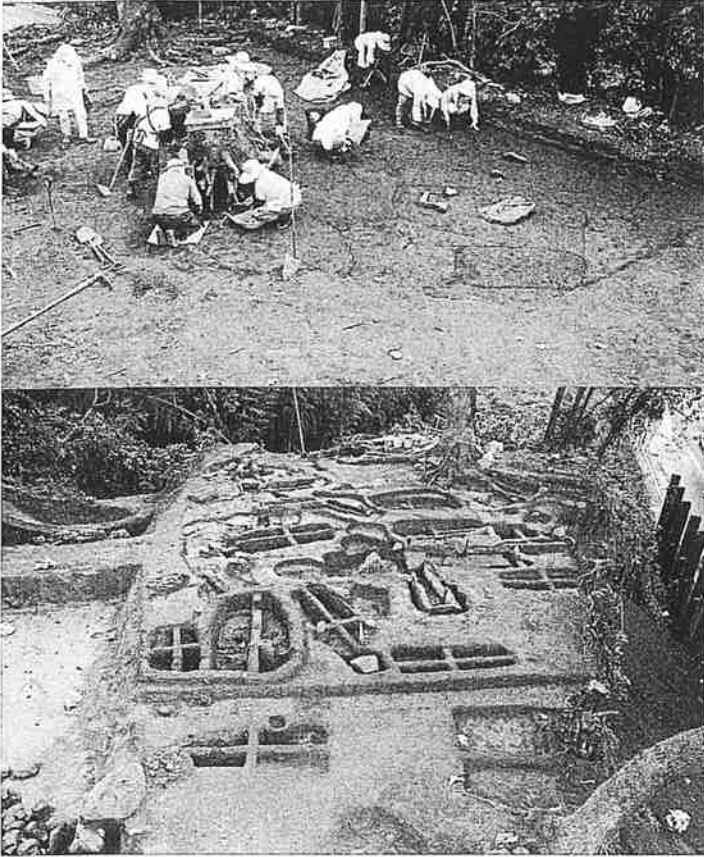
### 1. 弥生時代の遺構と遺物

A～D調査区の中で、弥生時代の遺構として中核をなすものは墓地である。検出された墓群の範囲はA-II区からB-II区にかけてで、これは遺跡が所在する低丘陵部の南側斜面にあたる。

A, B調査区の間は、後世に作られた切り通しによって大きく削平されている。また、A-II区についても戦国時代の山城的施設の一つとみられる縦堀及び横堀により分断されている。従って、これらの部分では多くの墳墓が消失しているといえる。

検出された埋葬形態は甕棺墓(36基)、石棺墓(15基)及び土壙墓(37基)である。また、土壙墓のなかでは石蓋土壙墓(3基)も確認されている。しかし、土壙墓のなかで土層観察から木棺墓を確認したものはない。

これらの墳墓のうち、A-II区で検出したものは非常に狭い範囲に密集して埋葬されており、また覆土についてもほとんど区別できず、明確な切り合い関係を把握することができなかった。以下、各遺構及び出土遺物について概説する。



■ Photo. 3 A-I調査区の作業風景(上)、遺構掘り下げ作業状況(下)

#### (1) 甕棺墓

##### ① S J-22 (Fig.5, Fig.8)

B-II調査区の平坦面南東部、調査区隅で検出した覆口式の甕棺墓である。その他の遺構との切り合い関係はなく、比較的出土状況は良好であった。しかし遺物そのものはかなり脆く、水洗の段階で接合面が溶けて復元が思うようにいかなかった。

甕棺の主軸はほぼ西に頭位を置くS-86°-Wの方向で、甕の埋置傾斜角度はほぼ水平の-3°を計る。棺の組み合わせは上棺が鉢、下棺が甕の成人用甕棺墓である。

上棺の鉢は、外口径80.0cm、底径12.0cm、器高50.0cmを測る。口縁部は外傾したT字形を呈し、



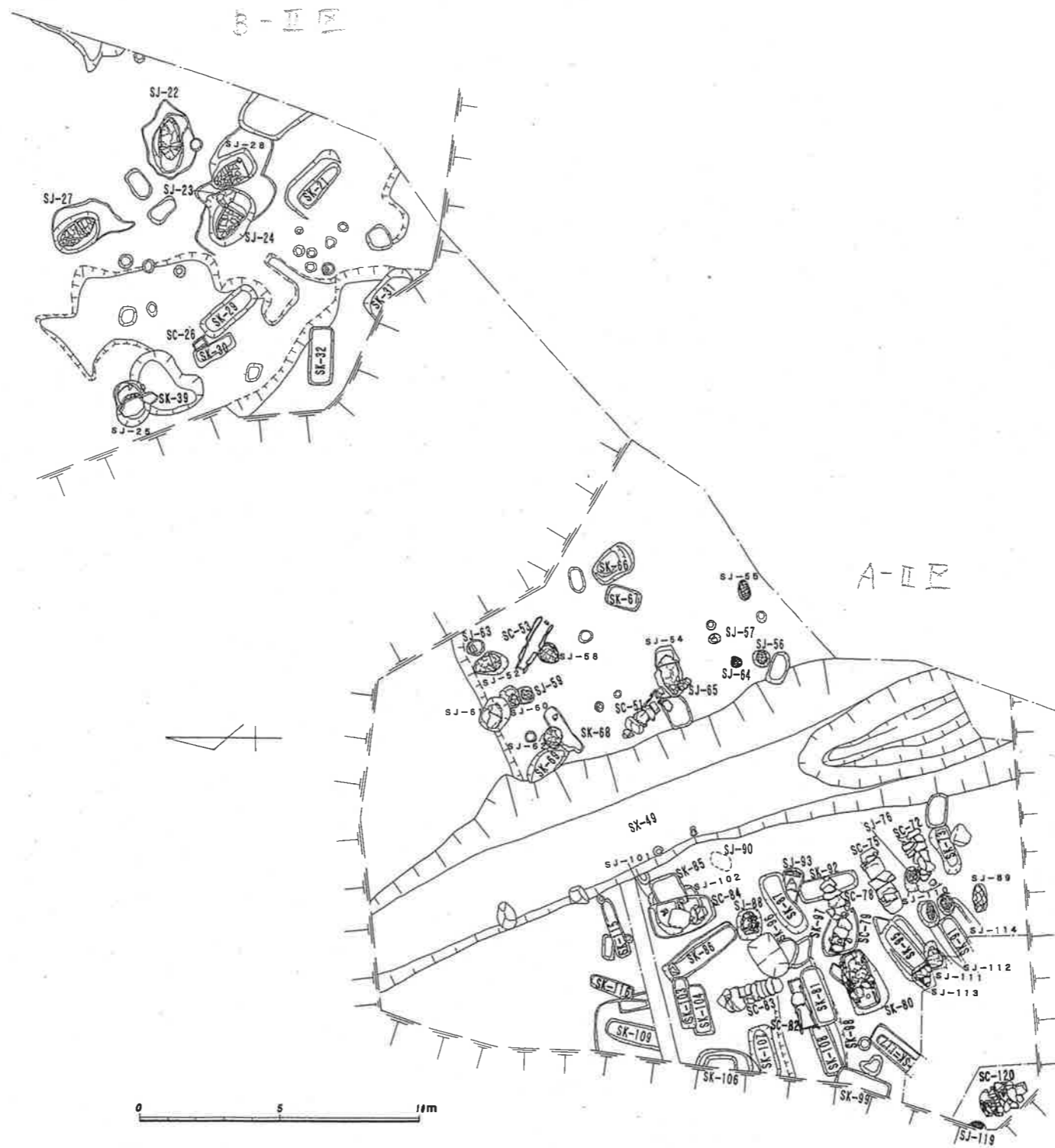
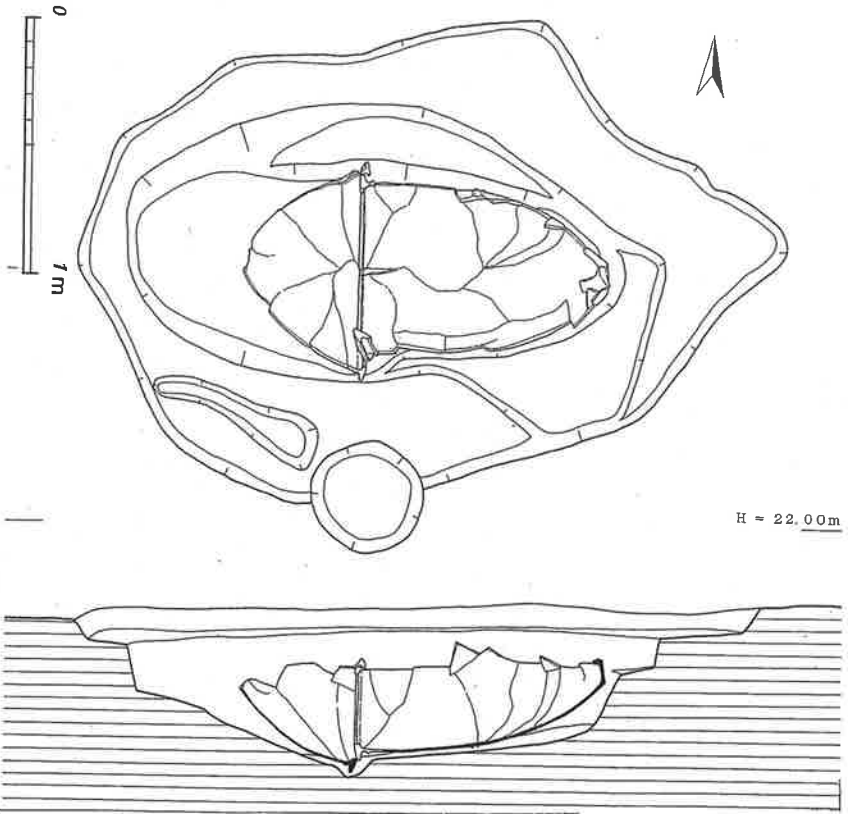


Fig. 4 A～B調査遺構配置図(1/50)

口縁下に1条の断面が三角形の突帯を巡らせる。胴部はやや脹らみをもち、底部に向けて急にすぼまる。

下棺は発達したT字形を呈する口縁を持つ。外口径69.5、底径10.3、復元器高95.5cmを測る。口縁下に1条、胴部中位に2条の三角突帯を巡らせる。口縁部から胴部中位にむけてやや脹らみ、すぼまりながら底部へ移行する。



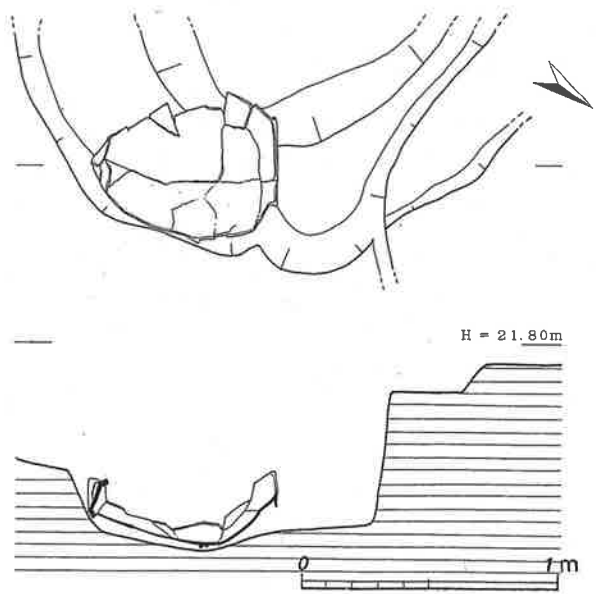
■ Fig. 5 S J-22出土状況図(1/30)

②S J-23(Fig.6, Fig.8)

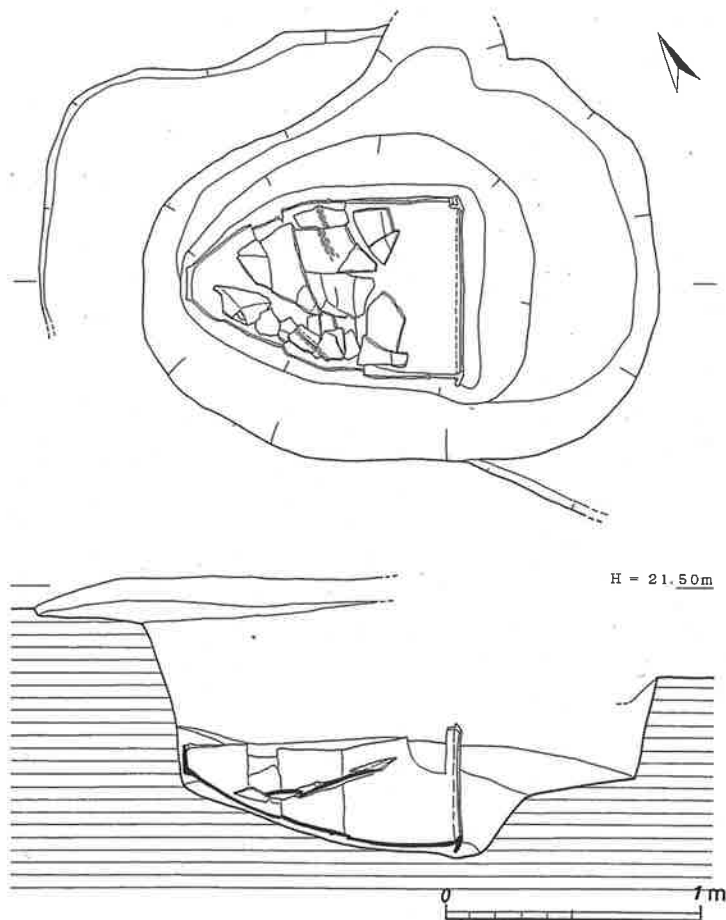
SJ-22の西側で検出した3基の甕棺墓のひとつである。SJ-23はSJ-24とSJ-28と切り合い関係をもつが、遺構覆土による観察では確認できなかった。しかし、土器の形式的観察からいえばSJ-23が他の2つの甕棺の墓壙を切っていると考えていいだろう。

単式の甕棺墓とみられる。主軸方位はN-37.5°-Wで、ほぼ水平かやや上向きの埋置状況である。

甕棺は卵頭形の胴部をもち、外傾したT字形口縁がつく。外口径66.0、底径11.5、最大胴径63.0、復元器高75.0cmを測る。胴部中位に2条の三角突帯を巡らせる。



■ Fig. 6 S J-23出土状況図(1/30)



■ Fig.7 S J-24出土状況図(1/30)

④ S J-25 (Fig.9, Fig.11)

SJ-25は、SJ-24から西側の段落ち際で検出した石蓋の単棺式甕棺墓である。当初は遺構覆土と地山の区別がほとんどつかなかったが、丁寧な遺構検出作業を重ねることで微妙な差を見つけることができた。

この甕棺墓は遺存状況は良好で、石板と甕棺の接合部には白粘土で目張りを行っているのが残っていた。甕棺自体は一片の破片が破損して内部に落ち込んでいたのみである。そこから内部を観察して人骨が残っていることも分かったが、わずかに大腿部等が遺存していたに過ぎない。

甕棺の主軸方向はN-53°-Wで、埋置傾斜角度はかなり急で37°を測る。蓋として利用された石板材は縦横90×90cmの不整多角形を呈し、厚さ10~15cm。甕棺と接合する面はほぼ平坦である。

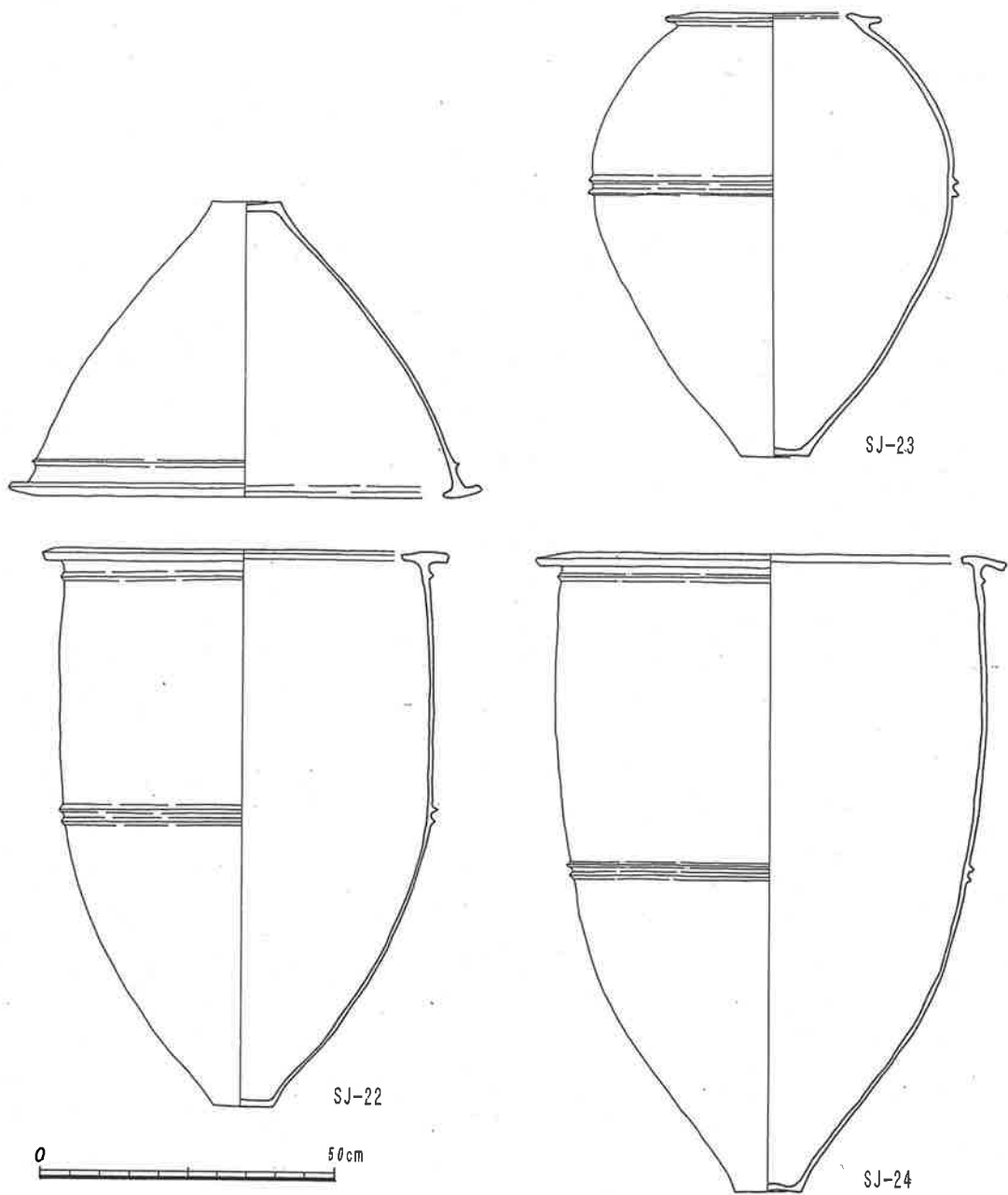
甕棺はややいびつだが張りのある胴部をもつ。「く」の字状の口縁を呈し、その直下に1条の三角突帯が巡る。また、胴部中位には「コ」の字状の突帯が2条貼付される。外面には明瞭なハケ目調整痕が残り、胴部中位の対象方向には2カ所黒斑がある。外口径64.2、器高106.6、底径11.5、最大胴径は胴部中位にあり83.6cmを測る。

③ S J-24 (Fig.7, Fig.8)

SJ-23の西側で検出した単式の甕棺墓である。墓壇の上面は削平されているが、甕棺自体は上面が棺内に落ち込んでいるものの遺存状況は良好であった。墓壇の掘り方状況を見ると複式の甕棺墓ではなく、木蓋を利用した可能性が考えられる。主軸はS-61°-Eで、埋置傾斜角度はほぼ水平。

口縁は外傾したT字形を呈し、口縁下に1条の三角突帯を巡らせる。やや張りのある胴部上位から底部にむけて緩やかにすばまる。ほぼ胴部中位に2条の三角突帯を貼付している。

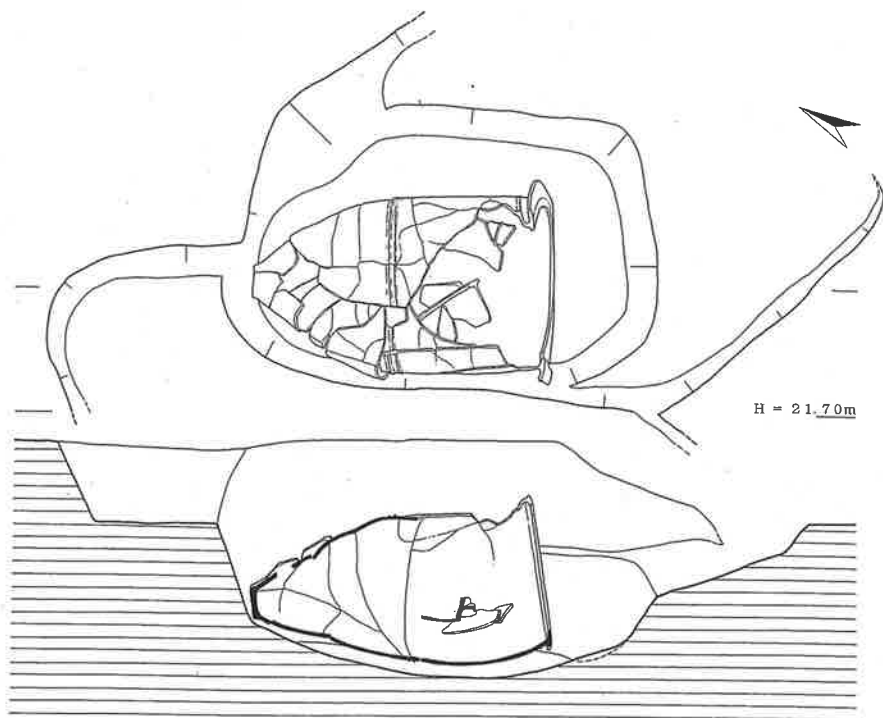
甕棺の量量は外口径79.0、器高109.0、底径11.0、最大胴径75.2cmで、胴部下位に黒斑が残る。



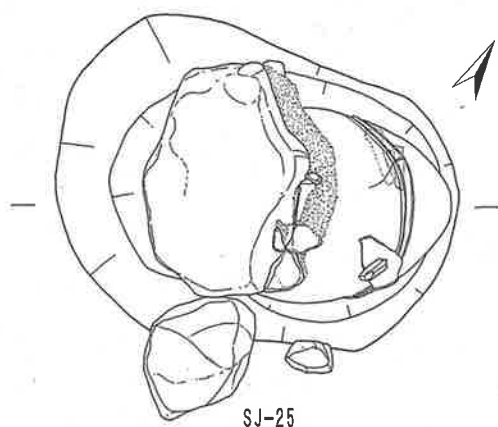
■ Fig.8 S J-22, 23, 24甕棺実測図(1/12)

⑤ S J-27 (Fig.10, Fig.12)

SJ-22の西側で検出した呑口式の甕棺墓で、標高的には最も高い地点に埋葬されたものである。主軸はS-36° -Eの方位を示し、埋葬した甕棺の傾斜角度は若干上棺が上がる4.5°である。甕の上部の一部が削平されており、遺存状態は悪く水洗作業で接合面が溶けて復元できなかった。上棺は下棺と同様の甕を2条の胴部突帯の上で打ち欠いて用いたもの。下棺は外傾したT字状の口

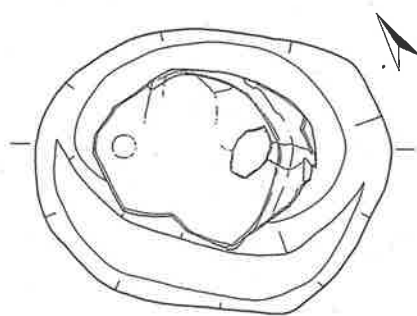


SJ-28



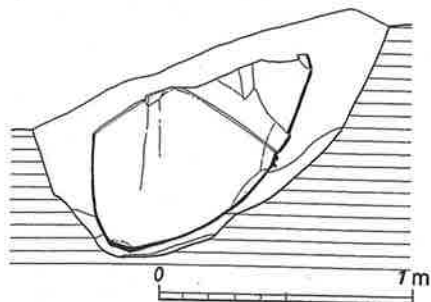
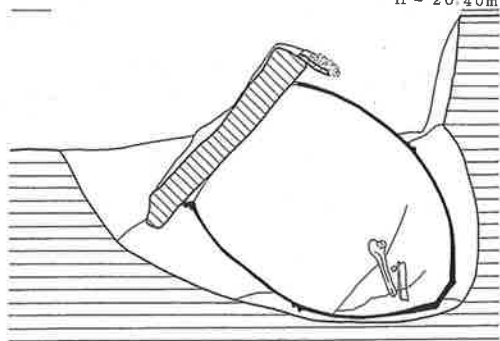
SJ-25

H = 20.40m



SJ-34

H = 19.50m

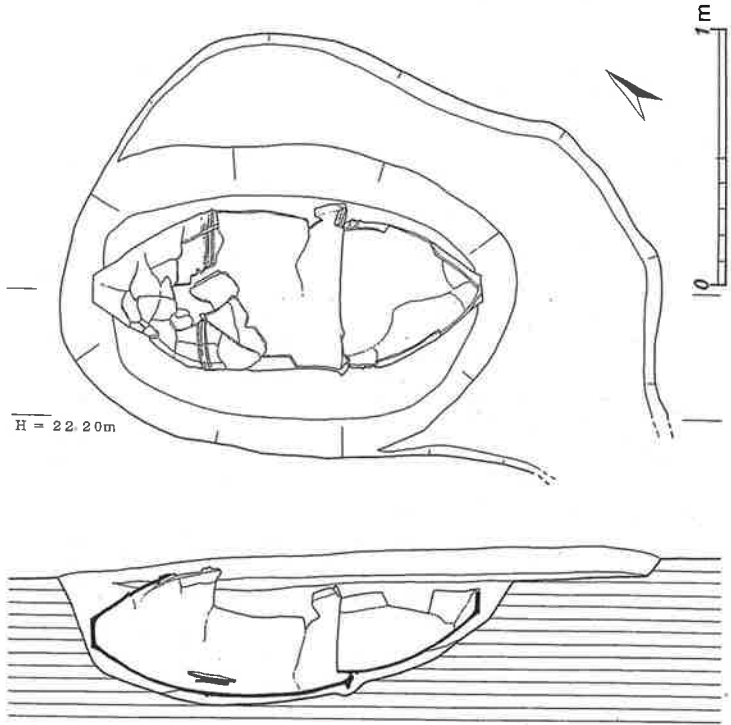


■ Fig.9 S J -25, 28, 34出土状況図(1/30)

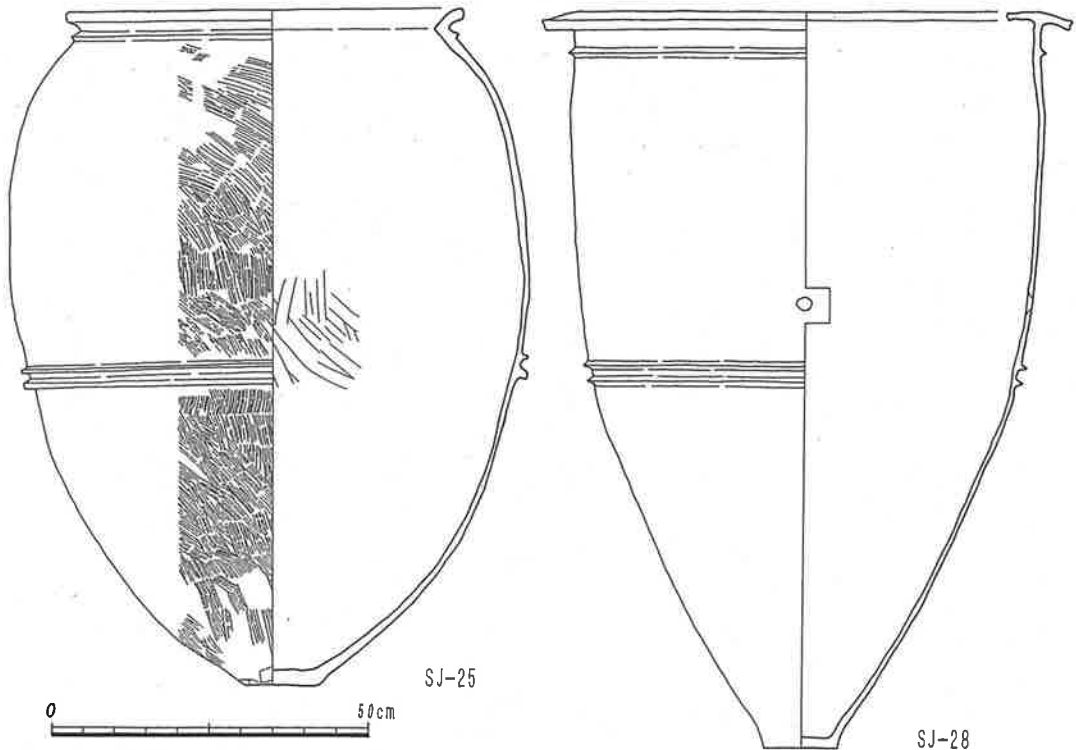
縁を有し、直下に1条の三角突帯を施し、胴部下位には三角突帯を2条巡らせる。

⑥S J-28 (Fig. 9, Fig. 11)

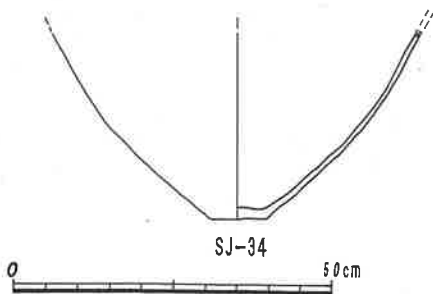
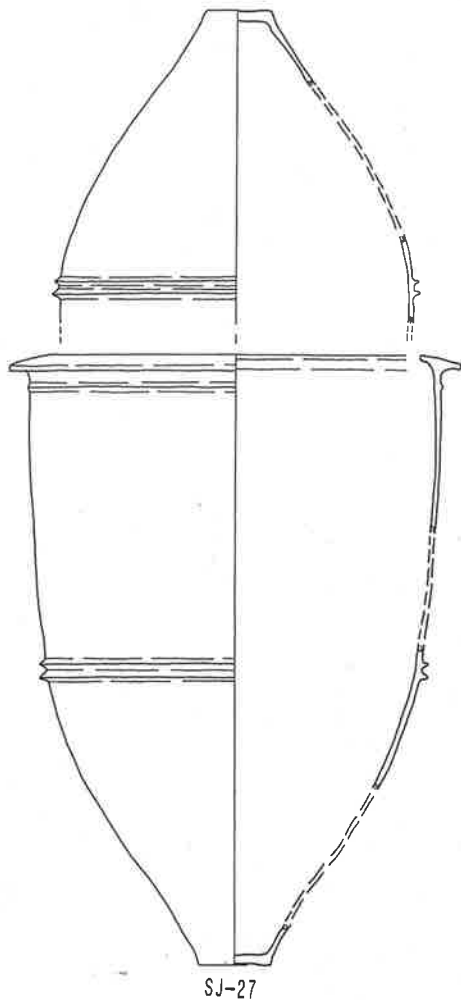
SJ-22の南側で検出した単棺式甕棺墓でS-27°-Eに主軸を取り、7°の埋置傾斜角度をもつ。甕は発達したT字状の口縁を呈し、やや外傾させる。胴部上位にやや張りをもつ。口縁直下に鋭い三角突帯を1条巡らせ、胴部のほぼ中位には三角突帯が2条巡る。また、出土時に底面となっていた胴部中位ほどに径2.5cmの穿孔が施されている。法量は外口径83.2、器高115.0、底径12.0cm。



■ Fig. 10 S J-27出土状況図(1/30)



■ Fig. 11 S J-25, 28甕棺実測図(1/12)



■ Fig. 12 S J-27, 34 甕棺実測図(1/12)

⑦ S J-33 (Fig. 16, Fig. 22)

この甕棺墓は B-II 調査区南東隅の甕棺墓群からやや離れた西側段落ちの途中斜面で検出された覆口式の小児棺である。主軸は S-70.5° -E の方位で、43° というかなりの急傾斜で埋葬される。

甕と甕の組み合わせで、下棺は口縁部を打ち欠き、上棺は胴部中位で打ち欠いて用いる。下棺は遺存状況から「く」の字状口縁を呈すると考えられる。また、上下棺共に胴部中位が張る逆卵頭形を呈し、上棺は現存器高 24.2、底径 9.8、最大胴径 33.5cm で、下棺は現存器高 37.9、底径 9.4、最大胴径 32.2cm を測る。

⑧ S J-34 (Fig. 9, Fig. 12)

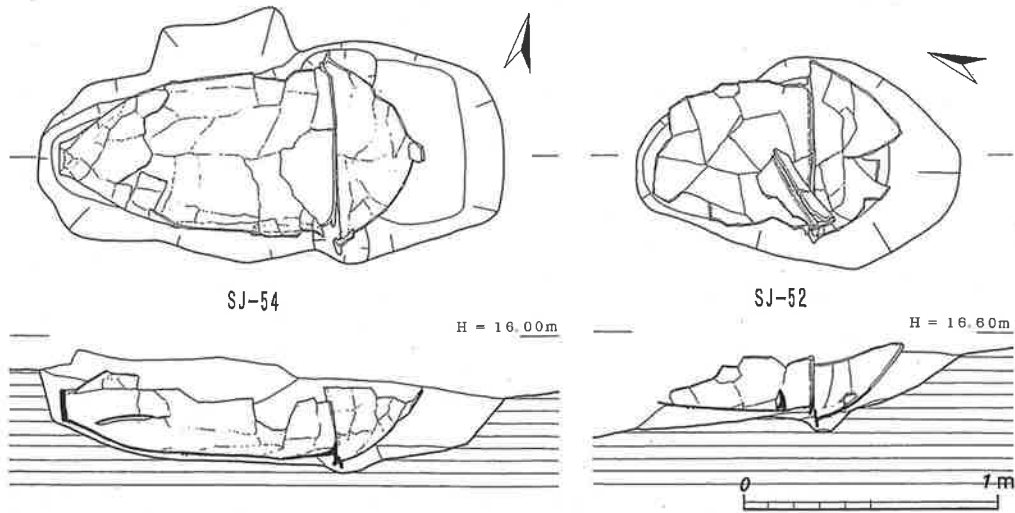
SJ-33 から北側に続く段落ち斜面で検出された。N-53° -W の主軸方位を取り、埋置傾斜は 54° を測る。墓壙の上面は大きく削平を受けており、甕棺の上面も欠失する。遺物は脆く、整理作業の過程で接着面が摩滅し復元不可能。出土状況をみると、口縁は「く」の字状を呈し、胴部中位に「コ」の字状の突帯が 2 条施される。

⑨ S J-52 (Fig. 13, Fig. 15)

A-II 調査区の北端部で検出した接口式甕棺墓で、上面が大きく削平されている。S-17.5° -E の主軸方向を取り、ほぼ水平に埋置されている。鉢と甕の組み合わせで、上棺の鉢はやや内傾した T 字状の口縁を有し、口縁下に 1 条の M 字状突帯を施す。下棺の甕は、外傾した T 字状の口縁で直下に三角突帯、胴部中位には 2 条の三角突帯を巡らせる。

⑩ S J-54 (Fig. 13, Fig. 15)

SJ-52 の南東で検出した接口式甕棺墓でその南側で検出した石棺墓 SC-51 に墓壙の南端を切られる。棺の主軸の方位は N-77.5° -E で、ほぼ水平に埋葬されている。上棺が鉢、下棺が甕という組み合わせで、上棺の口縁の上端部は大きく外傾し



■ Fig.13 S J-52, 54出土状況図(1/30)

たT字状を呈し、口縁直下に1条の三角突帯を巡らせる。胴部はやや張りながら底部に向けてすぼまる。復元口径74.4、器高40.2、底径12.4cmを測る。下甕はやや外傾する発達したT字状の口縁部を有し、口縁直下にM字状の突帯を1条施す。胴部上位から緩やかにすぼまり、中位下に三角突帯と「コ」の字状突帯を1条ずつ巡らせる。突帯部よりさらにすぼまりながら底部へと続く。口径72.3、器高103.5、底径13.6cmの法量を測る。

⑪ S J-55 (Fig.16, Fig.22)

SJ-54の東側調査区の隅で検出した小型の甕棺墓である。上面が大きく削平されており、また、遺存状況も悪かったため復元がうまくできなかった。主軸はS-74°-Wで埋置傾斜はほぼ水平である。上下棺共に甕の組み合わせで接口式である。うまく図化し得なかったが、T字状の口縁をもち、上下甕共に口縁下の三角突帯を1条巡らせる。下甕の胴部は底部から直線的にひろがる。

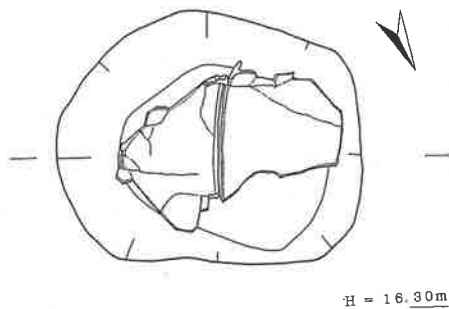
⑫ S J-56 (Fig.19)

SJ-55の南西部で、戦国時代の山城施設である横堀により削平されている段落ち際で検出した。調査時は小児棺として考えて遺構番号をつけたが、大部分が削平されているためよく分からない。主軸方向はN-86°-Eでほぼ水平に埋葬されていると考えられる。破片による遺物実測は行ったが、それによるとT字状の口縁を呈し、その下にM字状の突帯が1条施されている。出土状況図によると、胴部中位ほどにもMの字状の突帯が1条巡る。

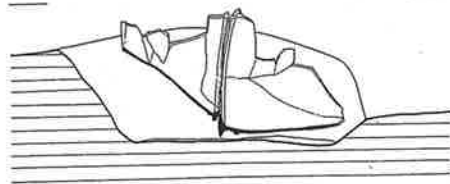
⑬ S J-58 (Fig. 9)

SJ-52の南側でSC-53に切られた形で検出した小児棺とみられる甕棺墓で、これもやはり大きく削平を受けている。主軸はS-31°-W。上棺の存在は確認できない。この調査区で出土した遺物はひどく遺存状態が悪く、大部分が満足のいく復元は実現できなかったが、このSJ-58も同様で遺物実測はできなかった。出土状況図によると胴部中位に「コ」字形の突帯を巡らせている。

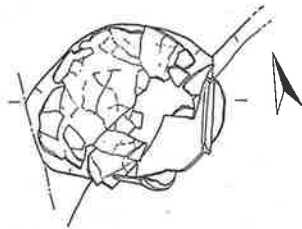




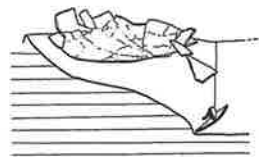
H = 16.30m



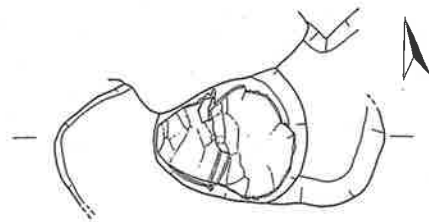
SJ-61



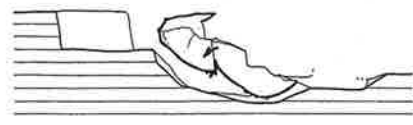
H = 16.50m



SJ-62



H = 14.50m



SJ-76



⑭ S J-59 (Fig. 16)

この小型の甕棺墓はSJ-52及びSC-53の南側、楠の木根の際で検出した。削平を受けているため全体像は不明。S-47° -Wに主軸をとり、埋置傾斜は口縁部がやや上方に傾くと考えられる。甕の全体像は不明だが、口縁部は逆L字形を呈し、口縁の外面端部はやや外傾する。胴部上位には1条の三角突帯を施す。

⑮ S J-60 (Fig. 16)

SJ-60はSJ-59のすぐ西側で検出した覆口式の小児棺で、主軸方向はS-72.5° -Wを取る。楠の木根がすぐ際にあり、攪乱されている。上棺とみられる甕は逆L字形の口縁部を呈し、底径は9.5cmを測る。下棺は逆卵頭形で口縁部を打ち欠いて使用している。底部は欠失している。口縁下及び胴部中位に三角突帯を巡らす。

⑯ S J-61 (Fig. 14, Fig. 15)

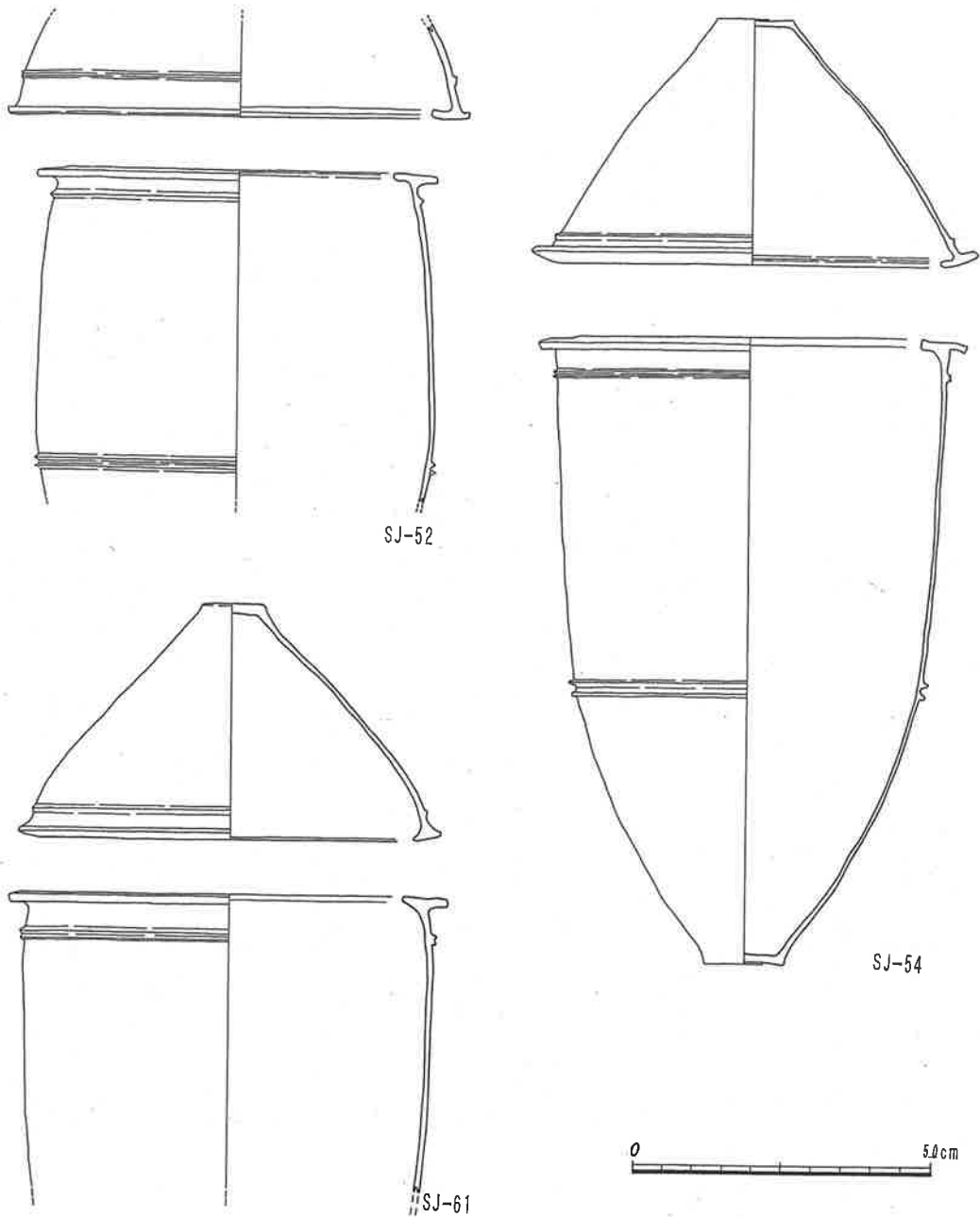
SJ-60の北西側で検出した接口式の甕棺墓。上棺が鉢、下棺が甕の組み合わせで、上下棺共に上面に削平を受けており底部が欠失している。主軸はS-63° -Wの方向。上棺は口縁端部が外傾するT字形で、その下に1条の三角突帯を施す。胴部上位はやや張りをもち底部に向けてすぼまる。口径71.4、器高40.1、底径10.6cmを測る。

下棺の甕はやや外傾するT字状口縁を呈し、その下にM字形の突帯が1条巡る。復元口径は73.8、現存器高50.2cmを測る。

⑰ S J-62 (Fig. 14, Fig. 17)

SJ-61の南側でSK-68と切り合い関係を持つ形で検出した小児棺である。出土状況から判断するとSJ-62の口縁部破片がSK-68の棺底に落ち込んでおり、SK-68がSJ-62を切っているといえる。単棺のみの出土であったが、SK-68に攪乱された部分に下棺が存在した可能性もある。主軸はS-74.5° -Eの方向で、ほぼ水平に埋葬されている。

■ Fig. 14 S J-61, 62, 76出土状況図(1/30)

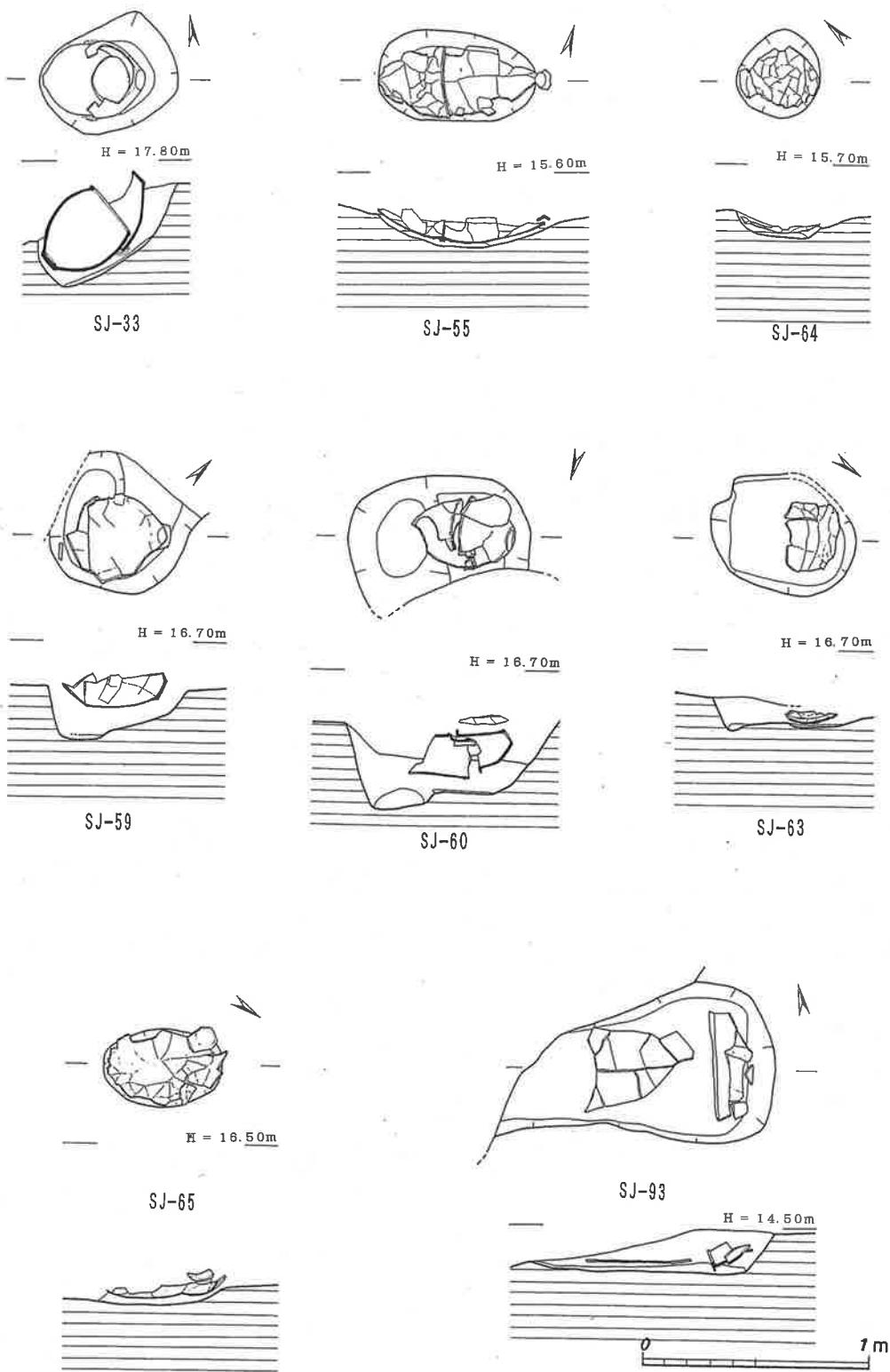


■ Fig. 15 S J—52, 54, 61甕棺実測図(1/12)

逆卵頭形でT字状の口縁は内側端部が大きく内傾する。胴部中位に最大胴径を持ち、M字状の突帯が施されている。復元口径33.6、器高68.5、底径12.4、最大胴径57.5cmを測る。

⑩ S J—63 (Fig. 16)

SJ-52の北東部で出土した小型の甕棺で、大部分が削平を受けていて、遺存部分は胴部の突帯部分のみであった。突帯はM字状を呈する。



■ Fig. 16 S J -33, 55, 59, 60, 63, 64, 65, 93出土状況図(1/30)

①9 S J-64 (Fig.16)

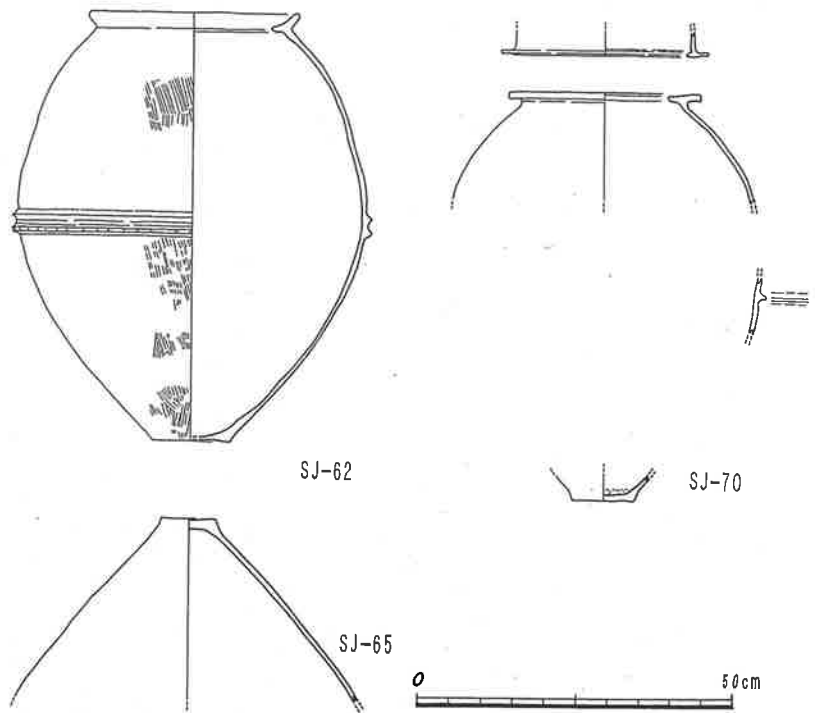
SJ-56の北側でSC-57の際で検出した小型の甕で墓壇の底面部分しか遺存していなかった。

②0 S J-65

(Fig.16, Fig.17)

SJ-54の南側、SC-51の墓壇内東側で検出した。小型の甕で上面は大きく削平されおり、全体像は不明である。

主軸の方向はS-32°-Eで、甕棺の口縁部は遺存していなかった。底部から胴部中位に向けて直線的に開いている。底径は8.9cmを測る。



■ Fig. 17 S J-62, 65, 70甕棺実測図(1/12)

②1 S J-70 (Fig.17)

A-I 調査区の墓域を2分する戦国時代の横堀であるとみられるSX-49の西側北部のSK-115の側で検出した小型の甕棺墓である。遺存状況は悪く、SK-115の掘り下げに伴って破片が出土したため、出土状況図は作成しなかった。

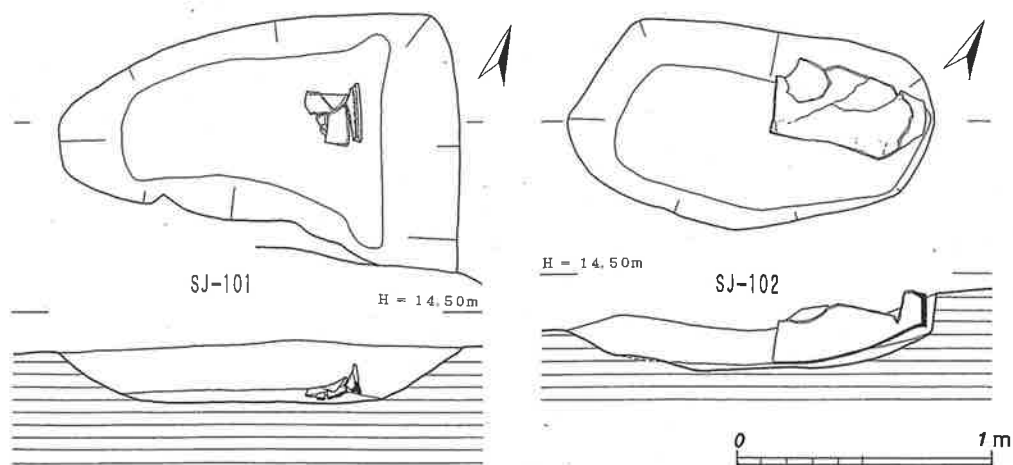
接口式の小児棺とみられ、上棺は端部がやや外傾するT字状の口縁を呈する。下棺は逆卵頭形のプロポーシオンでT字形の口縁でやや端部が内傾している。胴部に「コ」の字状の突帯が巡っている。上棺は復元口径33.4、残存高4.0cm。下棺は口径31.0、残存高17.3cmを測る。

②2 S J-71

この甕棺は、掘削機による表土剝の段階で検出されたもので、遺物は順次取り上げてしまっていたので出土状況図は作成しなかった。また整理・復元の結果、遺物実測もできなかった。土器観察によると、胴部に「コ」の字状の突帯を施している。

②3 S J-76 (Fig.14)

A-I 調査区の南側の石棺墓SC-72の北側で検出した小型の甕棺墓。下棺がSC-72に削平を受けているが底面はかろうじて遺存していた。接口式で甕と甕の組み合わせである。主軸はN-78°-Wの方向で、15.5°の傾斜で埋葬されている。遺物の劣化が激しく、整理・復元作業の段階で実測不可能となった。出土状況図からみると甕と甕の組み合わせで、上下棺共にT字状の口縁をもち、上棺は口縁下に三角突帯を有し、下棺は胴部中位にM字状とみられる突帯が3条巡る。



■ Fig. 18 S J-101, 102出土状況図(1/30)

⑭ S J-88 (Fig. 19)

SX-49西側の調査区のほぼ中央にある攪乱土壌に削平を受ける形で検出された。調査時点では墓壙より遺存している甕棺以外の土器片を検出していないこともあり単式棺と判断した。

主軸方向はS-85°-Wで、埋置傾斜角度はほぼ水平と考えられる。この甕棺も非常に脆い状態で整理・復元作業を行っていく過程で摩滅が進み、遺物の実測は断念した。出土状況図の観察からも分かるように「く」の字状の口縁を呈し、その下に1状の三角突帯、そして胴部中位には2条の三角突帯を施している。

⑮ S J-89 (Fig. 19, Fig. 20)

SX-49西側調査区の南端部分で検出した甕棺墓。墓壙のプランは確認できず、段落ち部分の掘り下げ作業中に出土したものである。上棺の存在は確認できなかったが、合口式の甕棺と考えた。主軸はS-71°-Wの方位を取り、ほぼ水平に埋葬されている。

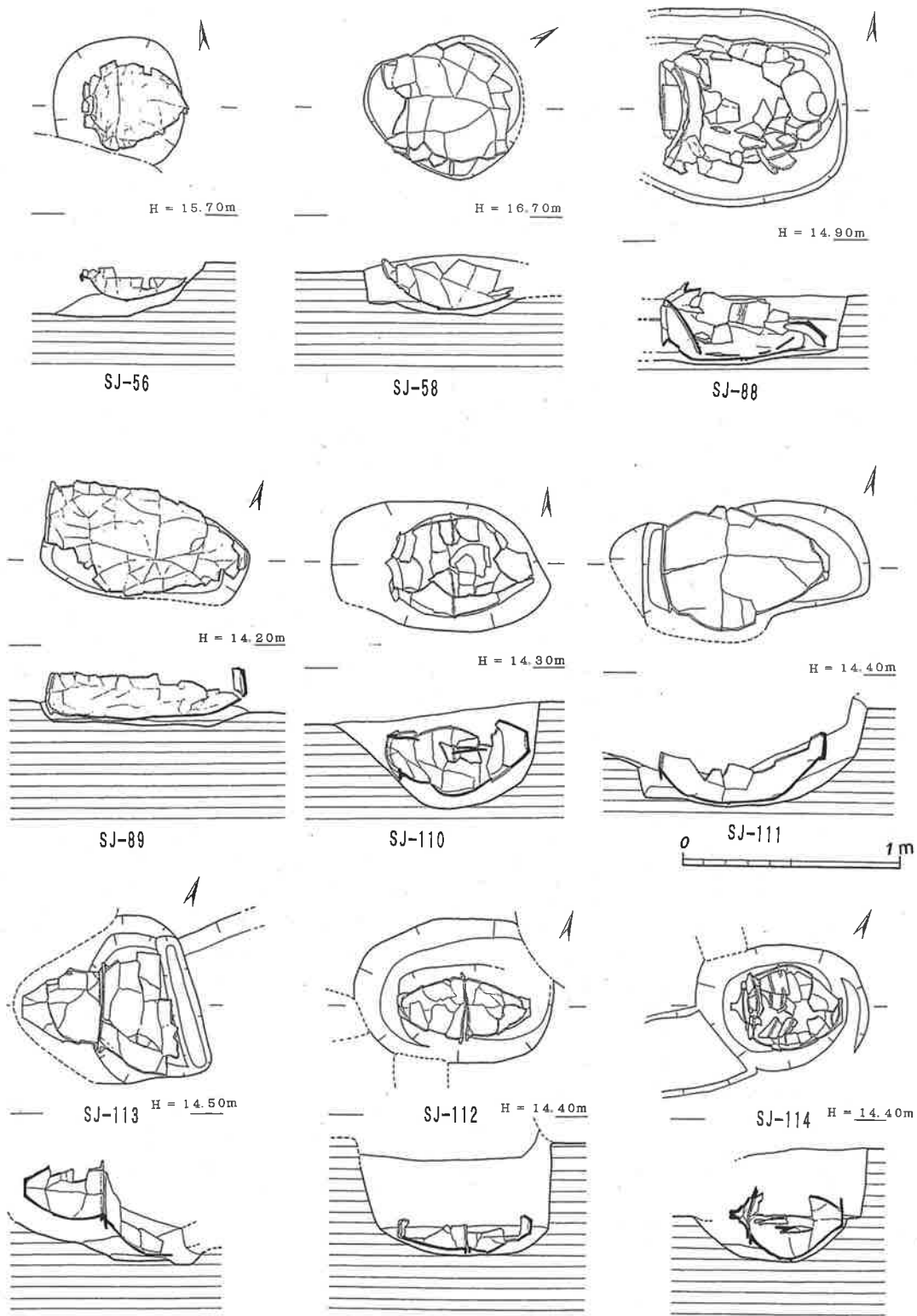
この土器も非常に脆く細かい破片に割れていたため復元作業は容易ではなく、部分的な接合・復元しかできなかった。口縁部はやや外傾するT字形を有し、胴部には三角突帯が2条巡る。復元口径68.0、残存器高29.6、底径11.0cmの法量を測る。

⑯ S J-90

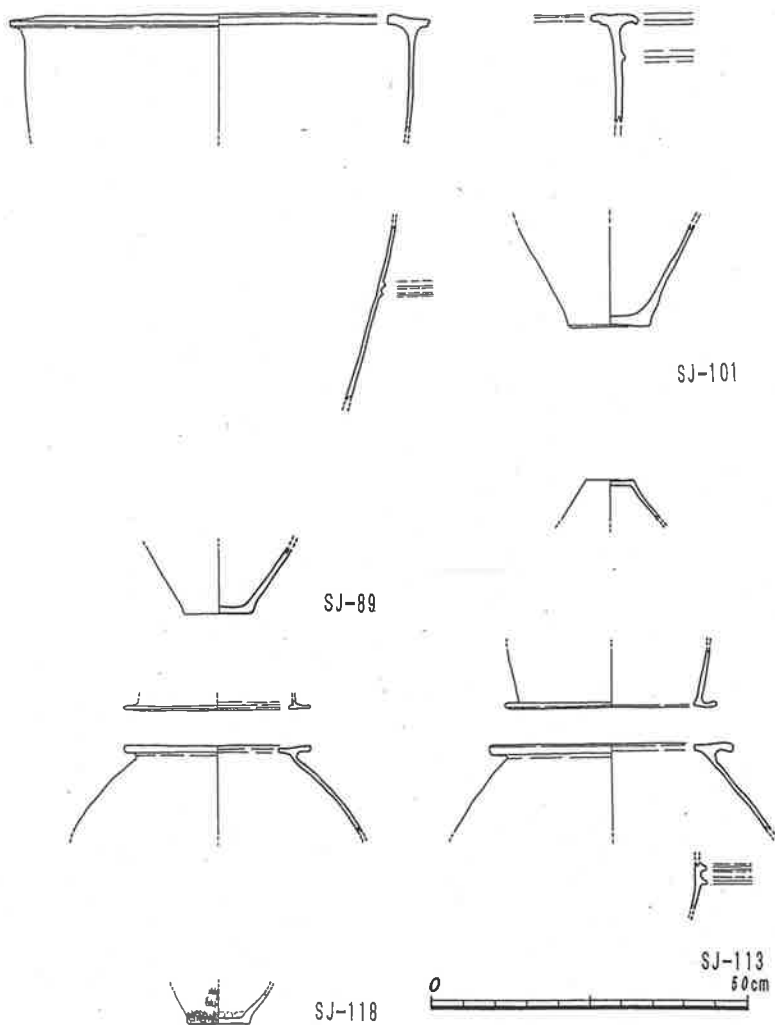
SX-49西側調査区でSX-49の段落ち際で出土した。この甕棺墓も墓壙プランは不明で表土剥ぎの段階で検出されたものである。部分的な遺存で全体の器形は図化できなかったが、口縁部は「く」の字形でその下には1条の三角突帯、胴部には「コ」の字突帯が3条巡る。

⑰ S J-93 (Fig. 16)

SJ-90の南側で、SK-87及びSK-92に切られる形で検出した甕棺墓で、大部分が攪乱されている。遺存していたのは上棺とみられる鉢の一部で、口縁外端部が外傾するT字形を呈し、その下にM字状の突帯が施されている。



■ Fig. 19 S J -56, 58, 88, 89, 110, 111, 112, 113, 114出土状況図(1/30)



■ Fig. 20 S J-89, 101, 113, 118 甕棺実測図(1/12)

⑩ S J-110 (Fig. 19, Fig. 21)

SJ-76及びSK-94に切られる形で出土した単棺式の小児棺墓である。主軸はS-86.5°-Wの方向でほぼ西に向く。およそ水平に埋葬されている。甕棺は逆卵頭形のプロポーションを持ち、口縁部は外端部がやや下がるT字形を呈している。張りのある胴部の中位上には1条の三角突帯が施される。法量は口径31.0、器高64.3、底径11.8、最大胴径48.7cmを測る。

⑪ S J-111 (Fig. 19, Fig. 21)

この甕棺墓は、SX-49西側調査区南西の楠の木根付近で検出した。SK-95に切られているが、甕棺の下面は遺存していた。単棺式の甕棺墓で、主軸方向はS-76°-W。ほぼ水平に埋葬される。逆卵頭形で、やや外傾したT字形の口縁部を有する。胴部は張って中位上に1条の三角突帯が巡り、底部に向けて強くすぼまる。口径40.2、復元器高76.8、底径12.7、最大胴径62.0cmを測る。

⑫ S J-101

(Fig. 18, Fig. 20)

SC-84及びSK-85に切られる形で出土したもので、接口式の甕棺墓である。遺存していたのは下棺の口縁部周辺のみで、主軸はN-70°-Eの方向である。

下棺は口縁部が発達したT字形を呈し、その下位には1条の三角突帯を巡らせる。

⑬ S J-102 (Fig. 18)

SJ-101と同じくSC-84に切られる形で出土した甕棺墓。SJ-101の南側で頭位を逆にしてほぼ平行のS-62°-Wに主軸方位を持つ。

遺存していたのは下棺とみられ、胴部上位は欠失している。若干上げ底の底部から胴部へはやや脹らみをもって直線的に立ち上がる。

⑳ S J-112 (Fig. 19, Fig. 22)

SJ-111の東側でSK-91、SK-94、及びSC-75に切られた形で出土した接口式の甕棺墓である。ほぼ同じ形態の甕と甕を組み合わせた小児棺で、頭位は明確ではない。やや小さい甕を上棺とすると主軸はS-76°-Wの方位を取る。

上下棺共に非常に脆く、復元はうまくできなかった。共にやや外傾するT字形の口縁を有する。上棺は口径29.1、残存器高4.3cm、下棺は口径30.3、残存器高7.1cmを測る。

㉑ S J-113 (Fig. 19, Fig. 22)

SJ-111のすぐ北側でSK-95に切られた形で出土した接口式の甕棺墓。甕と甕の組み合わせで、下棺の胴部下半はSK-95の掘り下げにより削平されて欠失している。S-69°-Wの主軸方位を取り、埋置傾斜角度はほぼ水平の3°である。

上棺は胴部中位が接合できず、下棺は口縁部の復元のみしか実現できなかった。上甕はやや外傾したT字形の口縁を呈し突帯はない。下甕は上端部がほぼ水平のT字形の口縁部を有し、胴部に「コ」の字状の突帯が2条巡っている。

法量は上甕が口径33.9、復元器高37.0、底径7.7cm。下甕が口径39.0、残存器高14.6cmを測る。

㉒ S J-114 (Fig. 19, Fig. 22)

SJ-112の南側で検出したSK-91に切られる甕棺墓で、土器蓋を有するタイプのものである。主軸はS-64°-Wで、ほぼ水平に埋葬されている。

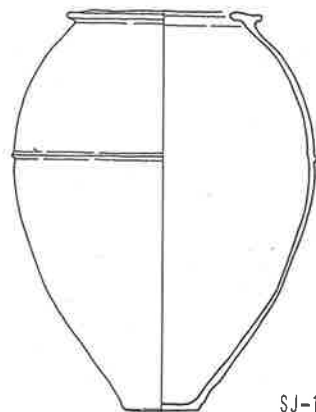
上蓋は口径28.0、器高8.8、上辺径4.1cmを測る。やや窪んだ天井部から湾曲して裾端部へ大きく広がる。下甕はやや外傾し、発達したT字形の口縁部を有する。出土状況図をみると、口縁下から胴部中位にかけて4条のM字状の突帯が巡っている。

㉓ S J-118 (Fig. 20)

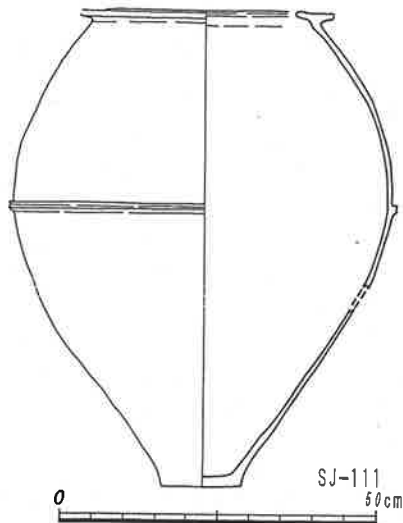
SJ-118はA-I調査区の作業が終了する直前にSX-49の東側調査区で検出した甕棺墓である。接口式で甕同士の組み合わせとみられる。上甕は復元口径が30.0cmのやや外傾したT字形口縁を持つ。下甕は復元口径30.0、残存器高20.0、底径9.9cmを測り、やや内傾したT字形口縁で胴部は張る逆卵頭形のプロポーシオンを有する。

㉔ S J-119

SX-49西側最南端部で検出したSK-120の西側で出土した甕で、大きく削平されていたため詳細は明らかでない。SK-120の共献土器の可能性もある。



SJ-110

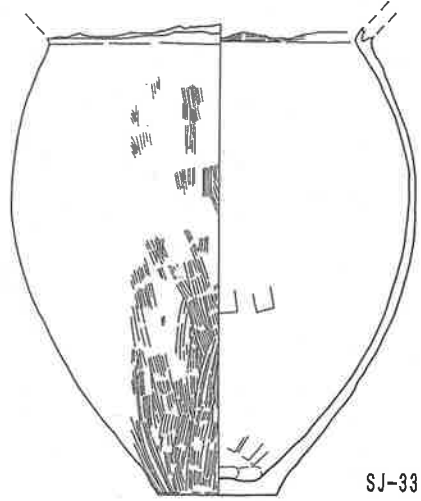
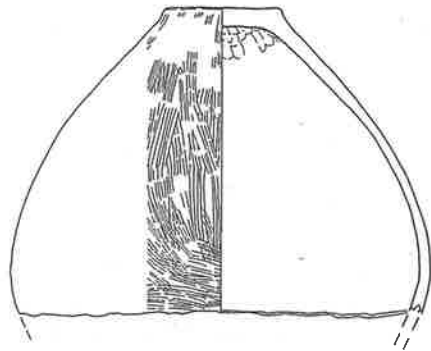


SJ-111

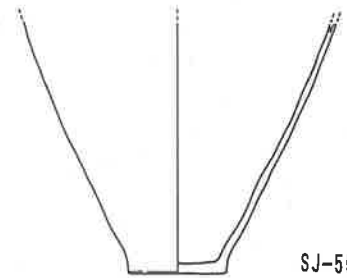
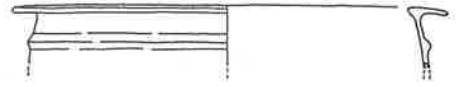
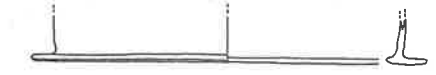
50cm

■ Fig. 21 S J-110, 111  
甕棺実測図(1/12)

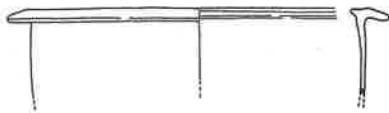
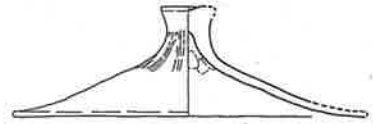




SJ-33



SJ-55



SJ-112



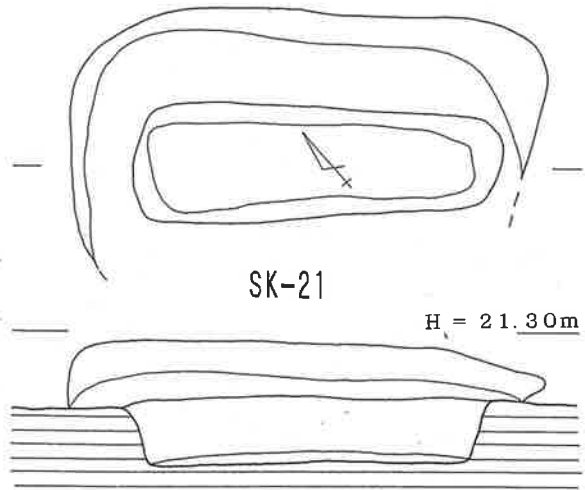
SJ-114

■ Fig. 22 S J -33, 55, 112, 114 甕棺実測図(1/6)

(1) 土壙墓

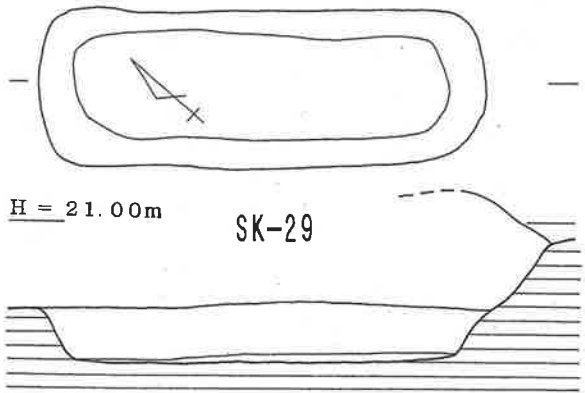
① SK-21 (Fig.23)

B-II 調査区の南端部に点在する弥生墳墓群の東端部で検出した。墓壙の南西部分は斜面による削平を受けていてその規模は明確ではないが、約244×145cm程度と予想される。そのほぼ中央に195×90cmの棺を掘り込む。棺は西側が東側に比べて幅が広く、主軸はN-48.5°-Wである。



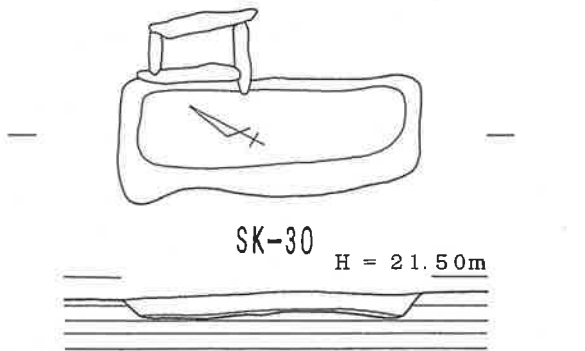
② SK-29 (Fig.23)

B-II 調査区墳墓群にはほぼ中央で検出した。この部分にはSK-30及びSC-26が切り合っており、墓壙については斜面部分の段落ちなのか墓壙なのかよく分からず、棺体の検出でしか確認できなかった。SK-29は240×85cmの棺を掘り込んであり、主軸の方向はN-41°-Wを示す。



③ SK-30 (Fig.23)

SK-29の南西側で検出した土壙墓で、SC-26に切られている。ほとんど棺底面付近しか遺存していない。棺は160×62cmを測り、頭位は若干幅広い西側小口と考えられ、主軸はN-28°-Wの方向を示す。

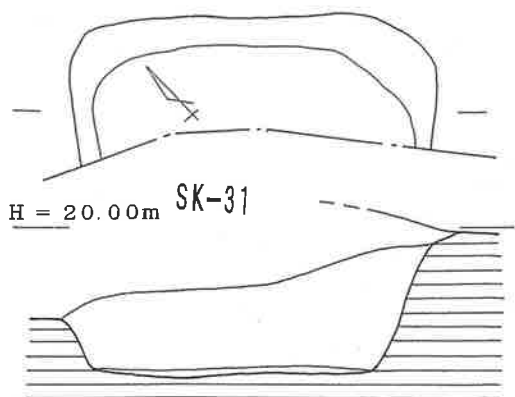


④ SK-31 (Fig.24)

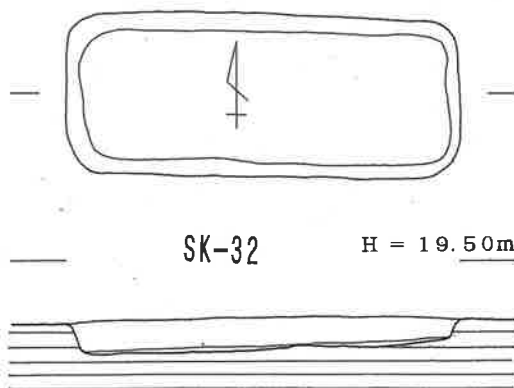
B-II 調査区の南端部は切り通しでA-I 調査区と分断されているが、この削平を受けた形でSK-31を検出している。墓壙の掘り方は斜面の段落ちで削平されてよく分からない。棺体の南側は削平されているため幅は不明。長軸方向は195cm、深さ74cmを測る。



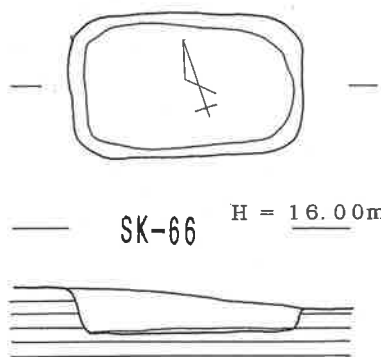
■ Fig.23 SK-21, 29, 30遺構実測図(1/40)



H = 20.00m SK-31



SK-32 H = 19.50m



SK-66 H = 16.00m



■ Fig. 24 SK-31, 32, 66遺構実測図(1/40)

⑤ SK-32 (Fig. 24)

SK-31の西側で検出した土壙墓で、棺底面部分のみの遺存である。棺は平面長方形プランで210×85cmを測る。小口幅はわずかに西側が広い。棺底面は東から西に向けて若干傾斜している。主軸はS-89°-Wの方向を示す。

⑥ SK-66 (Fig. 24)

B-II調査区の中央を南北方向に走る戦国時代の横堀SX-49の東側にあたる部分の中央北付近で検出した土壙墓である。128×78cmの平面隅丸長方形プランを呈する。小口幅は若干であるが西側が広く、N-72°-Wの主軸方向を示す。

⑦ SK-67

この土壙は、SK-66の南側で検出したもの。非常に遺存状況が悪く、土壙墓かどうか明確ではない。棺底面のプランがわずかに確認できたもので、かつ木根などに攪乱されていたため、実測図も作成しなかった。

⑧ SK-68 (Fig. 25)

B-II調査区北側でSX-49に切られ、SJ-62を切った状況で出土した土壙墓。192×54cmの平面長方形プランをもつ。南西側小口は鉤状になり、北東小口がやや広がっている。主軸はN-54°-Eの方位を示す。

⑨ SK-69 (Fig. 25)

SJ-62及びSK-68に切られた状態で検出されたもので、南西側はSX-49に削平されている。平面プランは隅丸の長方形と考えられる。小口幅は85cm程度で主軸方向は、N-40°-E。

⑩ SK-73 (Fig. 25)

B-II調査区SX-49西側に密集する墳墓群の南端部で検出した土壙墓で、その北側に平行して埋葬されたSC-72に切られる。墓壙は、これだけ多くの墳墓が密集する状態かつ覆土に差がみとめられない状況ではほとんど検出不可であった。

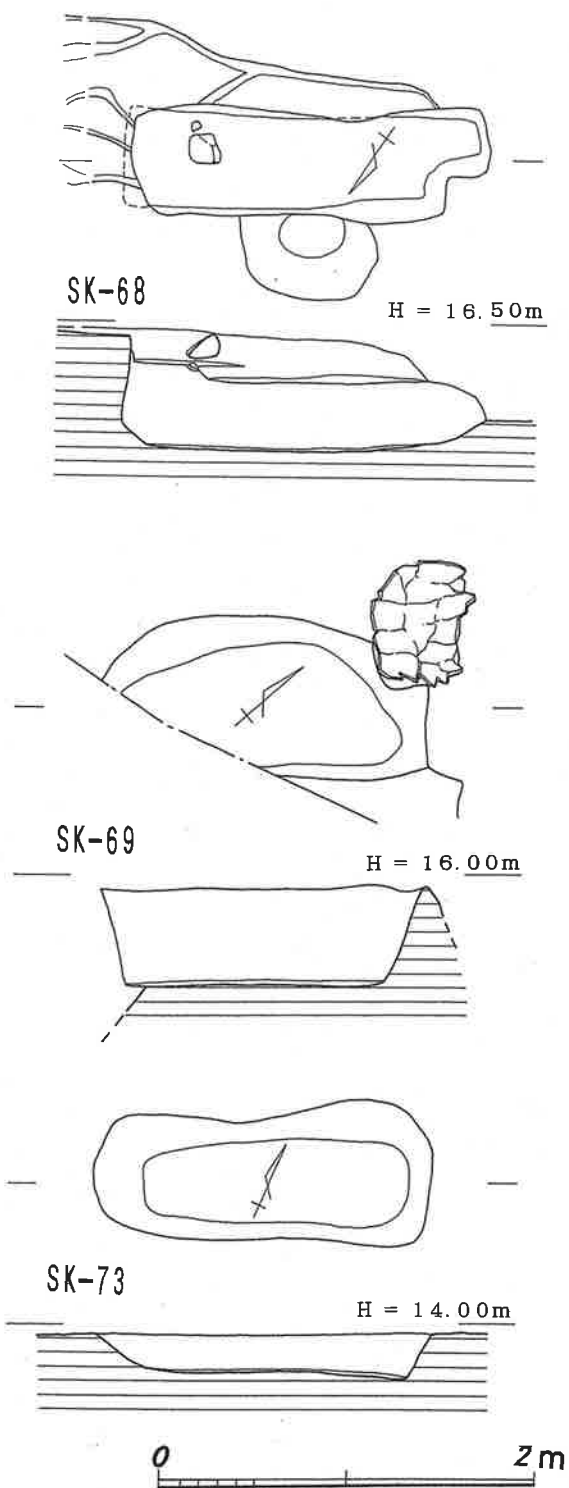
SK-73の棺の南際では約70×70cmの石を検出したが、この遺構との関連はない。棺の平面プランは隅丸長方形で、180×65cmの法量を測る。主軸方位はN-65°-Eである。東側小口がやや幅広くはなっているものの、棺底面の傾斜は東小口側へ傾斜している。

⑪ SK-81 (Fig. 26, Fig. 28)

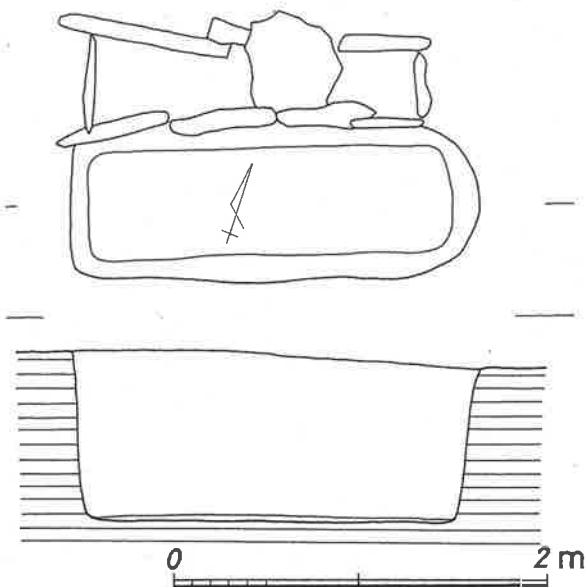
SX-49西側調査区の中央で検出した土壙墓である。この遺構は、SC-82の墓壙のプランを探していた中でみつけたものである。

SK-81の平面プランは隅丸長方形でその北際にはほぼ平行にSC-82が埋葬されており、これらの関係はSC-82がSK-81を切っている。棺は220×80cmの法量を測る。主軸はS-72°-Wの方向を示す。掘り下げ時点で地山の検出に失敗し、底面は掘り過ぎの状態であることを報告しておかなければならない。

この遺構の検出作業では、地山と覆土の区別が非常に難しく、何度も削る作業を行った。その過程で鉄斧が出土し、取り上げてしまった。鉄斧は体部の端を折り曲げて袋部を作るもので、刃先がやや広がる。刃部幅3.9、袋部は幅3.6、高2.4、深さ4.3cmを測る。



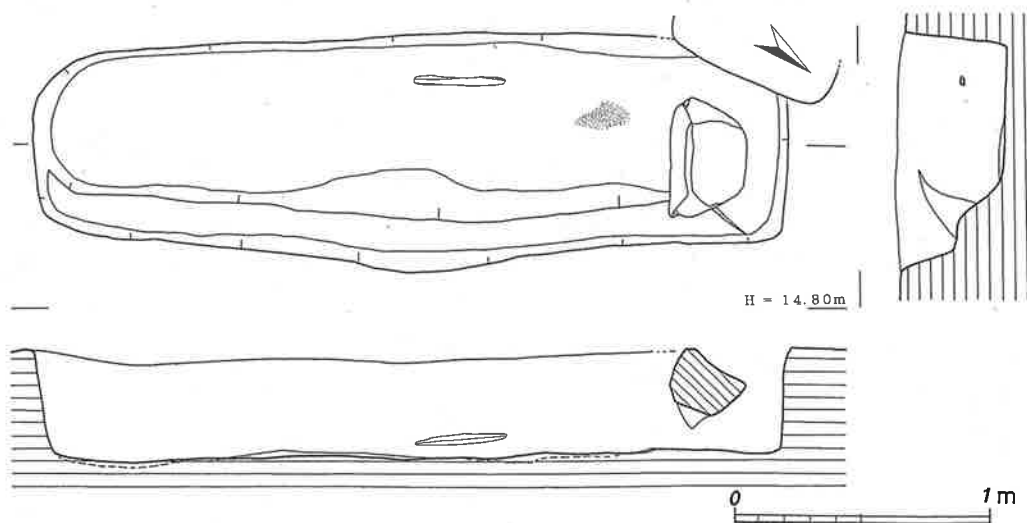
■ Fig. 25 SK-68, 69, 73遺構実測図(1/40)



■ Fig. 26 S K -81遺構実測図(1/40)

×30cmの石が落ち込んでいた。この石は、頭位側小口の仕切り石あるいは木蓋の押さえ石か、その性格はよく分からない。墓壙東側はテラスを持ち、2段の掘り込みになっているが、西側は直に棺底まで掘り込む。従って、棺体は墓壙の西側に位置する。主軸はN-36.5°-Wで、棺体は250×60cm前後を測ると考えられる。棺底の頭位部分ではベンガラとみられる赤色顔料を検出した。

また、埋葬者の右胴部付近から副葬されたと思われる鉄剣が出土している。鉄剣は全長37.0cm、刃幅は3.0cmで、茎部は短く3.0cm、幅1.7cmと推定される。



■ Fig. 27 S K -86遺構実測図(1/30)

⑫ S K -85 (Fig. 30)

SK-49西端部の北側でSC-84に切られた状態で検出した。この部分はその下にSJ-101, SJ-102も埋葬されており明確な切り合い関係を把握するのが非常に困難であった。

SK-85は東西方向のN-67°-Eに主軸を持つと考えられるが、SC-84の掘り方により削平を受けその全体プランは不明である。

⑬ S K -86 (Fig. 27, Fig. 29)

SK-85の西側で検出した土壙墓である。墓壙は平面プランが長方形で、298×94cmを測る。頭位の北西側はやや幅広くなっており、小口隅はSK-103に切られている。北西小口側棺内に50

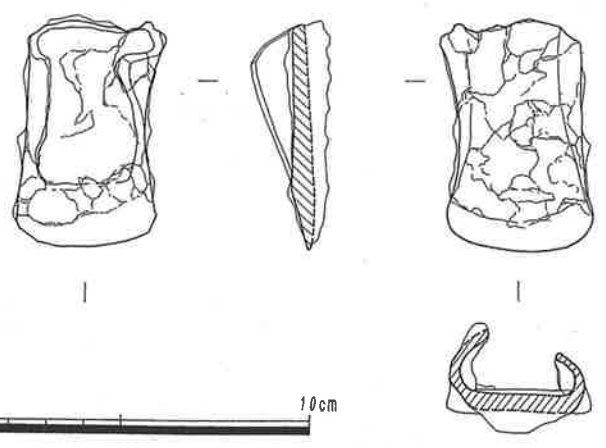
×30cmの石が落ち込んでいた。この石は、頭位側小口の仕切り石あるいは木蓋の押さえ石か、その性格はよく分からない。墓壙東側はテラスを持ち、2段の掘り込みになっているが、西側は直に棺底まで掘り込む。従って、棺体は墓壙の西側に位置する。主軸はN-36.5°-Wで、棺体は250×60cm前後を測ると考えられる。棺底の頭位部分ではベンガラとみられる赤色顔料を検出した。

また、埋葬者の右胴部付近から副葬されたと思われる鉄剣が出土している。鉄剣は全長37.0cm、刃幅は3.0cmで、茎部は短く3.0cm、幅1.7cmと推定される。

⑭ SK-87 (Fig. 30)

SX-49の西側中央部分で検出した土壙墓である。SK-87の南東部分がSJ-93を切っている。墓壙のプランは平面隅丸長方形で248×90cmを測る。

西側小口に比べると東側小口がやや幅広く掘られている。従って、東小口側に頭位が置かれたと考えられる。主軸の方向はN-56° -Eを示す。実測図には表れていないが、底面の状況はやや中央が窪む。



■ Fig. 28 SK-81出土鉄斧実測図(1/2)

⑮ SK-91 (Fig. 30)

SK-91はSX-49西側調査区の南で検出した土壙墓でSJ-112、SJ-114を切っている。西側小口部分は調査区外へ延びている。検出状況から推測すると墓壙の平面プランは長方形を呈すると考えられる。小口幅は東側で65cmを測り、検出した長さは140cmである。頭位は不明だが、長軸方向はN-25° -Eを示す。

⑯ SK-92 (Fig. 31)

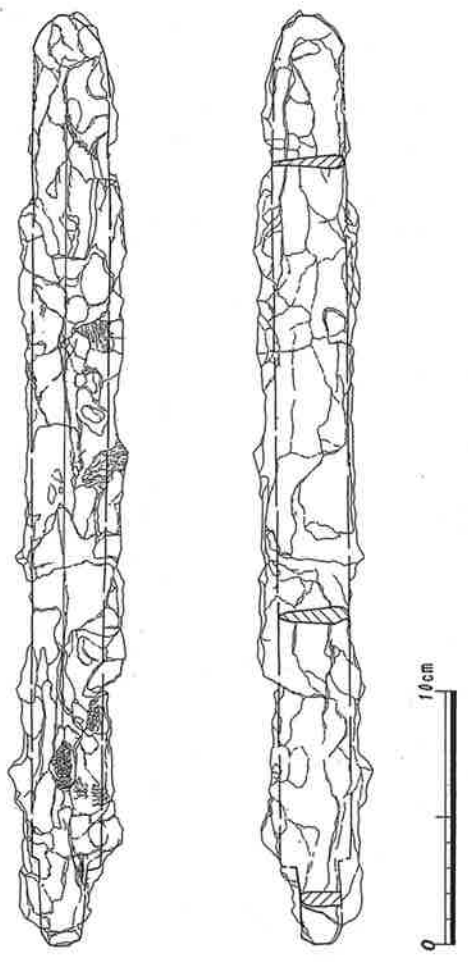
SK-92はSX-49西側調査区の中央付近で検出した土壙墓であり、その中央を東西に切っているのがSC-78である。また、SK-92は北東側隅でSJ-93と切り合っており、SK-92が新しい。

検出した棺の平面プランは隅丸長方形で215×75cmを測る。南側小口幅70cmに比べて北側小口幅82cmと広くなっており、頭位は北側に置かれたと考えられる。主軸方位はN-18° -Wとなる。

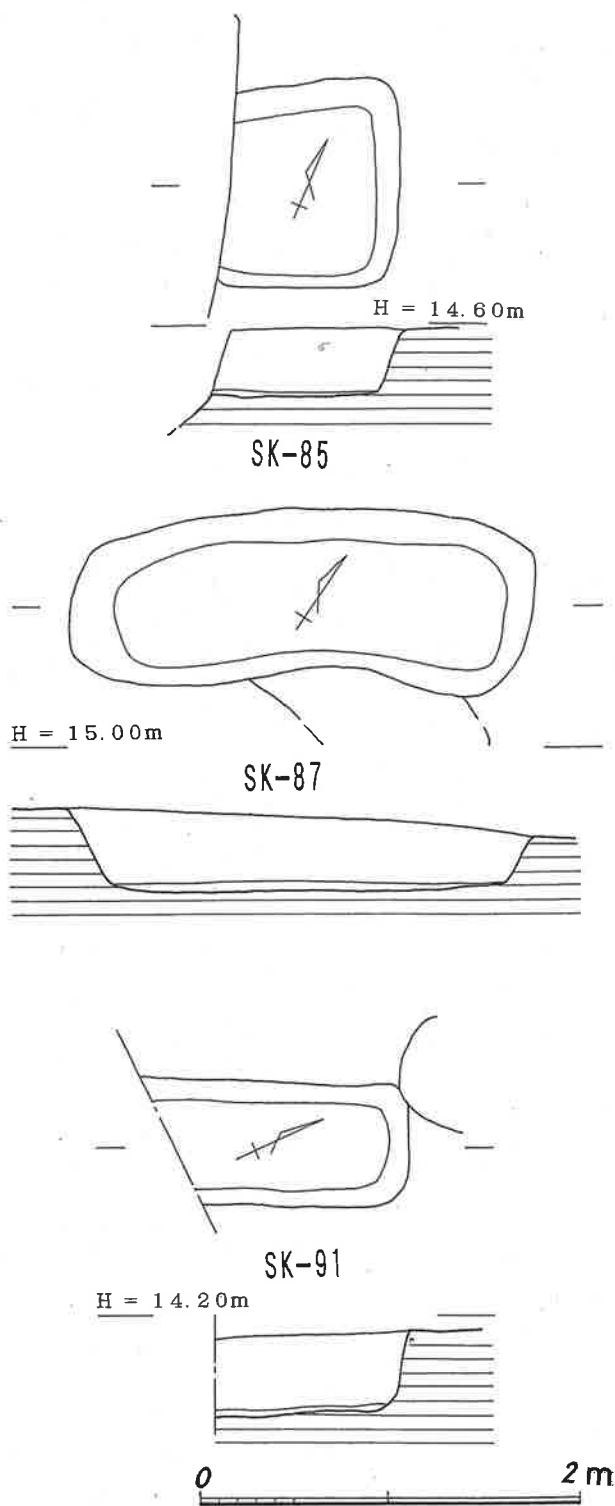
また、棺体の上場部分の北側半分からは目張りの粘土が検出された。木蓋の使用が考えられる。

⑰ SK-94

この調査区の作業終了時にみつけた土壙墓で、実測図は作成できなかった。SX-49西側調査区の南半部でSC-75に切られる。



■ Fig. 29 SK-86出土鉄剣実測図(1/3)



■ Fig. 30 SK-85, 87, 91遺構実測図(1/40)

⑱ SK-95 (Fig. 31)

SX-49西側調査区の南西部で検出した土壙墓で、この遺跡の中では比較的遺存状態の良い土壙墓である。SK-95は東側のSC-75によって切られており、また東側ではSJ-111及びSJ-113を逆に切っている。

墓壙はやや不整形の四角形（平行四辺形）を呈している。その西側は甕棺との切り合いで不明であるが、そのプランはおよそ220×125cmほどと推測される。棺体のプランは平面が長方形で195×75cm程度とみられ、棺底は東小口側が若干低くなる。

頭位については西側小口と予想され、主軸方位はS-47° -Wとなる。

⑲ SK-96, ⑳ SK-97

SK-96及びSK-97については、明確なプランといえるものではなく、やや不明瞭な点がある。

当初は1つの土壙墓として考えていたが、南側で切り合いを認めたため切り放して位置づけた。

この2つの遺構はSX-49西側調査区中央でそれぞれが切り合う形で検出している。また、共に近世攪乱によって大きく削平を受けている。加えて、その西側のSC-83によって切られているため、遺構として遺存している部分はごく僅かである。SK-97については西側のSC-82にも切られている。

㉑ SK-98 (Fig. 31)

SX-49西側調査区の西端部で検出した土壙墓である。SK-81及びSC-82によって東側小口を削平され、また西側

小口は国道34号建設による段落ちによって削平されている。その一方では、この土壌墓が北側に位置するSK-108及び南側のSK-99を切っている。棺の平面プランは明確ではないが、長方形を呈すると推測され、現存する部分は長軸178cm、幅78cmを測る。頭位は不明であるが、長軸はN-69°-Eの方向である。

② SK-99 (Fig. 32)

SK-99はSK-98の南側で、北側小口部分をSK-98に削られ、西側長辺は後世の削平で欠失している。西側の削平は石板が検出されており、石棺の一部とも考えられるが、大きく削平を受けているためよく分からない。

棺は隅丸長方形の平面プランを呈すると考えられる。207×(52+α)cmを測り、N-19°-Eの主軸方向を示す。

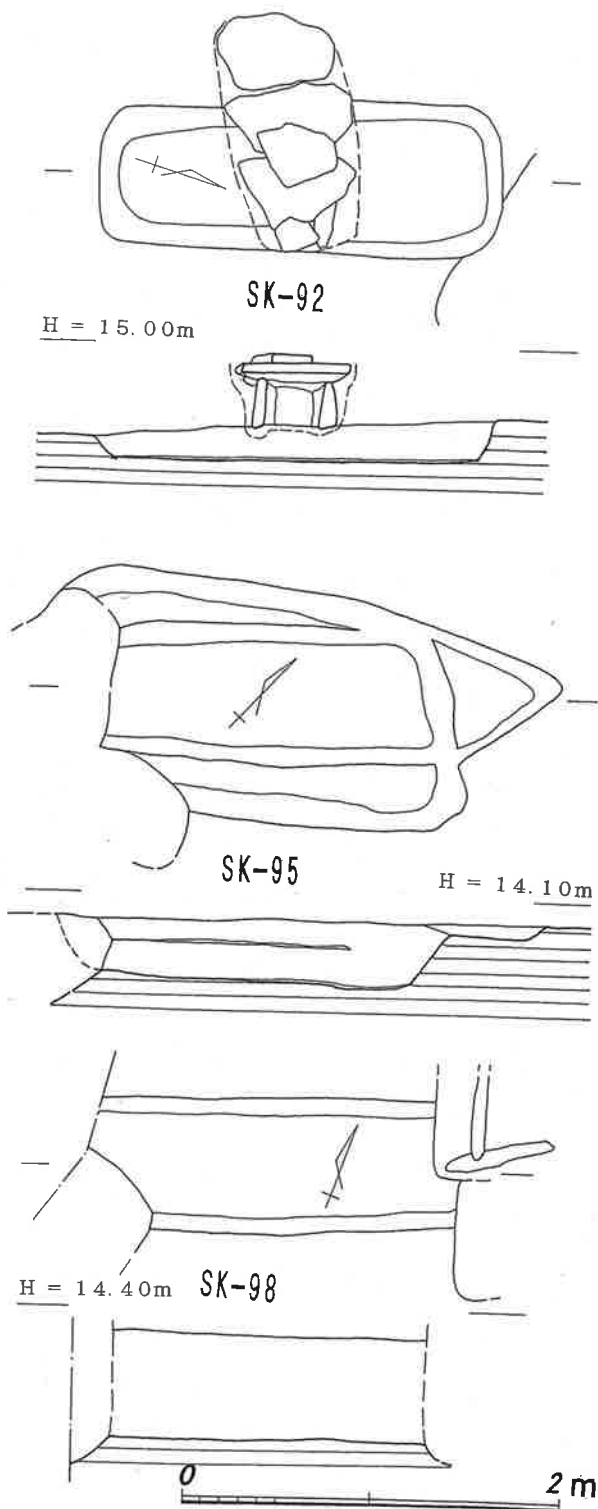
③ SK-103 (Fig. 32)

SK-103はSX-49の西側調査区の北西部で検出した土壌墓でSK-104と切り合い関係にある。東側では主軸が交差する形で鉄剣を副葬していたSK-86が検出されている。

SK-103は、棺底面部分がわずかに遺存していたに過ぎない。隅丸長方形の平面プランを呈しており、棺のサイズは188×54cmを測る。小口幅及び底面の状況からは頭位を明確にできない。主軸の方向はS-76°-Wである。

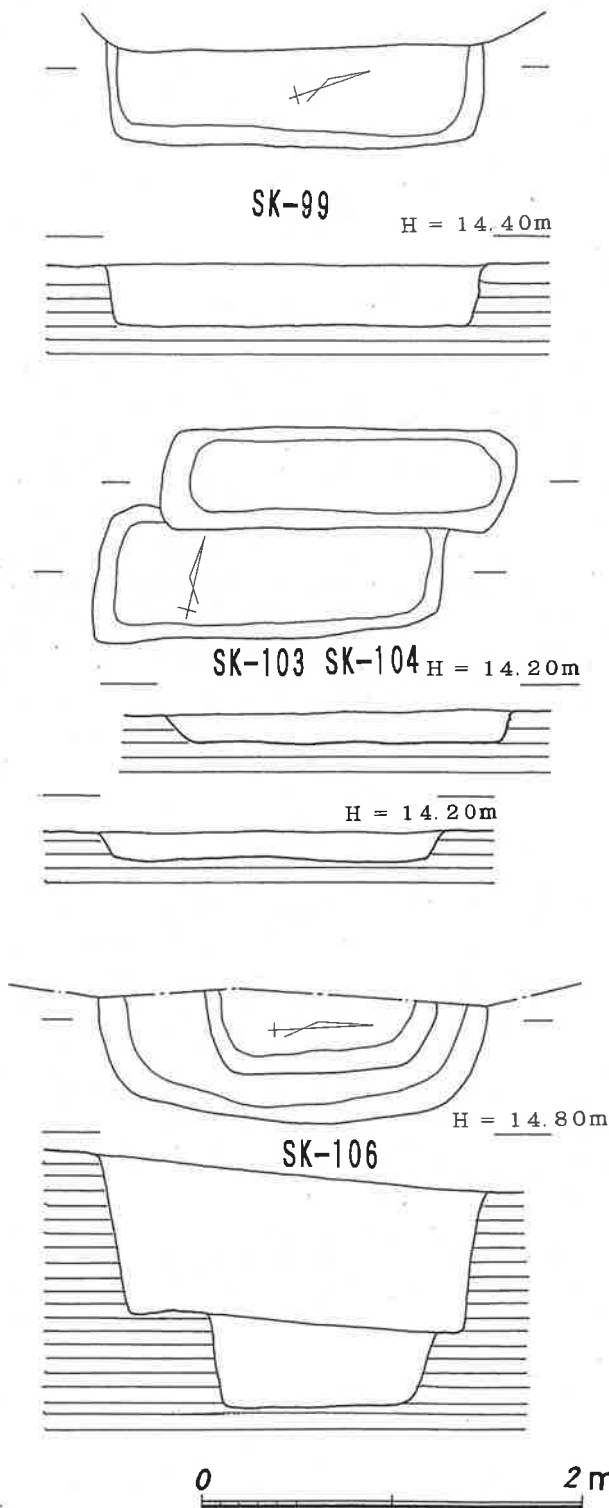
④ SK-104 (Fig. 32)

SK-104は、北側長辺部分をSK-103に切られている土壌墓。SK-103に比べると小口幅がやや広い。



■ Fig. 31 SK-92, 95, 98遺構実測図(1/40)





■ Fig. 32 SK-99, 103, 104, 106遺構実測図(1/40)

遺構の遺存状況は、SK-103と同じく棺底面部分のみである。やや平行四辺形に歪んだ平面プランを呈し、棺のサイズは184×72cmを測る。頭位はやや小口幅が大きい西側にあると考えられ、主軸はSK-103と同じくS-76°-Wの方向を示す。

㊸ SK-106 (Fig. 32)

この土壙墓はSK-103, 104の西側の段落ち際で検出した。遺構は国道34号建設のための切り通しにより大きく削平されている。そのため、SK-106の全体プランは不明である。

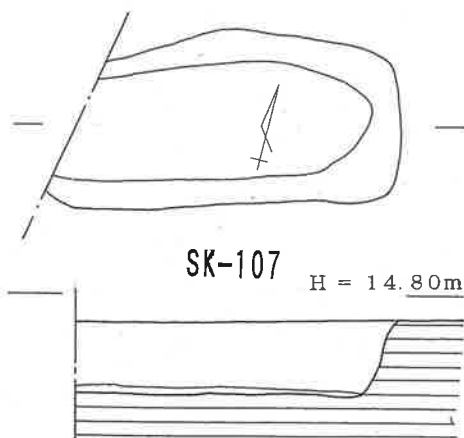
しかし、遺存部分は墓壙及び棺体部分の一部であり、その状況からみて南北方向に長軸を持つと判断した。その逆の見方をすると、墓壙及び棺体の小口幅が大きく、大規模なサイズの土壙墓となる。この遺跡ではこれまでの土壙墓の出土状況から判断してもそうした大規模な土壙墓は類似するものがない、などの理由からそう結論づけた。墓壙は隅丸長方形のプランを持つと推測され、205×50(+α)cmを測る。棺のサイズは120×30(+α)cmである。墓壙は約80cmの深さがあり、棺はその底面から約50cm掘り込んでいる。主軸はN-3°-Eの方向を示すと考えられる。

㊹ SK-107 (Fig. 33)

SK-108の北側で検出したもので、西側を国道建設のための切り通しで削平されている。平面プランは隅丸長方形で、174(+α)×90cmのサイズを測る。小口部分の削平のため頭位は不明であるが、長軸方向はN-76°-Eを示す。

⑳ SK-109 (Fig. 33)

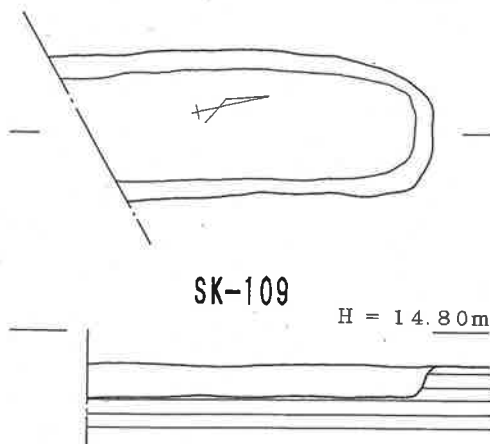
SX-49西側調査区の北部分で検出した土墳墓で、一部は土層観察のために設定したトレンチによって削平してしまった。非常に見極めが難しい土層でこの遺構も調査終了間際に検出できたものである。棺は、隅丸長方形の平面プランを呈する。サイズは $200(+\alpha) \times 78\text{cm}$ を測り、長軸方向は $N-12.5^\circ -E$ を示している。



㉑ SK-115 (Fig. 33)

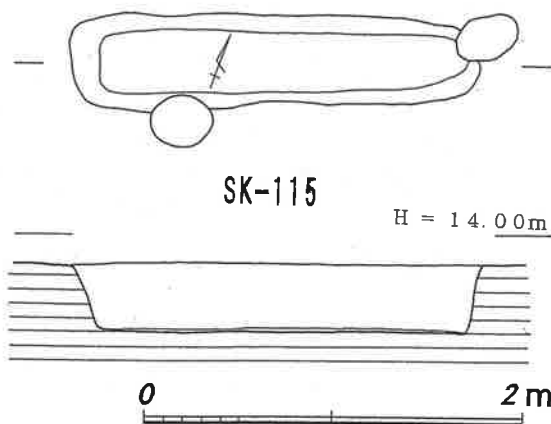
SK-109の東側で検出した東西方向に長軸を持つ土墳墓である。SJ-70によって東側小口の一部を切られている。

棺は、隅丸長方形を呈する。棺底面までの深さは $37\text{cm}$ を測る。長軸の長さ比べて幅が狭く、細長い平面プランを呈するが、西側小口部分より東側小口がやや狭く尖った形となる。サイズは、 $210 \times 50\text{cm}$ を測る。頭位は西側と考えられ、主軸方向は $S-70^\circ -W$ を示す。



㉒ SK-116 (Fig. 34)

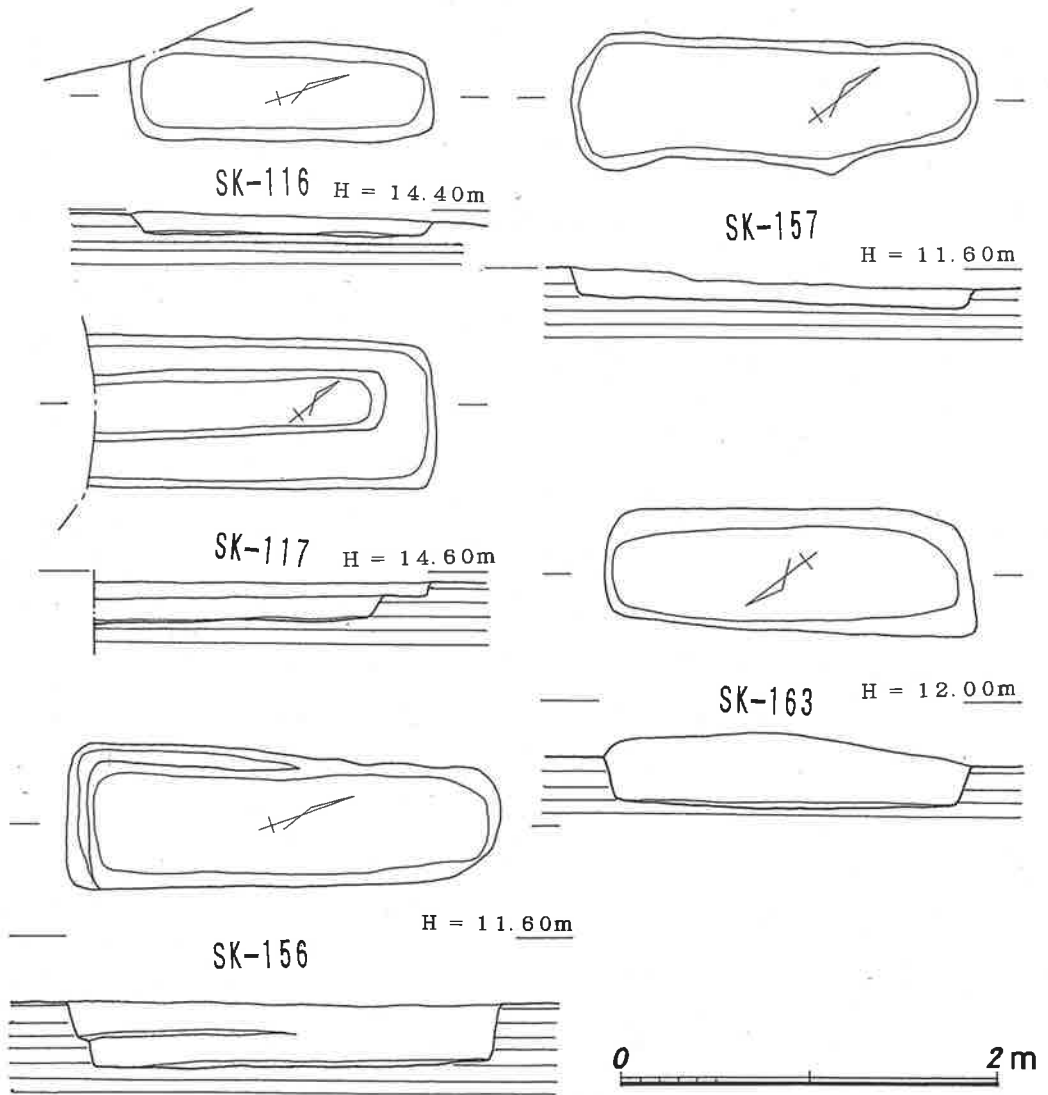
SK-115の西側で検出した土墳墓で、南西隅をわずかだが他の遺構から切られている。棺底面部分が遺存しているに過ぎない。平面プランは隅丸長方形を呈する。棺は $162 \times 52\text{cm}$ のサイズを測る。北側小口に比べわずかに南側小口部分の幅が広がっている。また、底面は北側に若干傾斜しており、頭位は南側小口方向に置かれると考えられる。主軸方向は $S-19^\circ -W$ を示す。



㉓ SK-117 (Fig. 34)

これは、SK-80とSK-99の間で検出した平面隅丸長方形プランの土墳墓。

■ Fig. 33 SK-107, 109, 115遺構実測図(1/40)



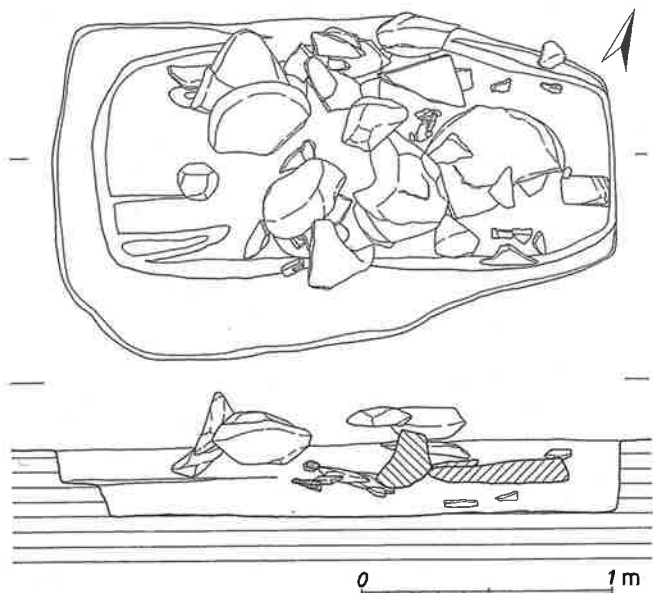
■ Fig. 34 SK-116, 117, 156, 157, 163遺構実測図(1/40)

墓壇の掘り方はわずか6cmの深さだが遺存しており、やや中軸から西側よりに棺体が掘り込まれている。棺のサイズは、 $(135 + \alpha) \times 35\text{cm}$ でやや小口幅が狭いといえる。底面は北側小口から南側に向けて傾斜しており、頭位は北側に置かれていると予想される。主軸はS-40°-Wの方向を取る。

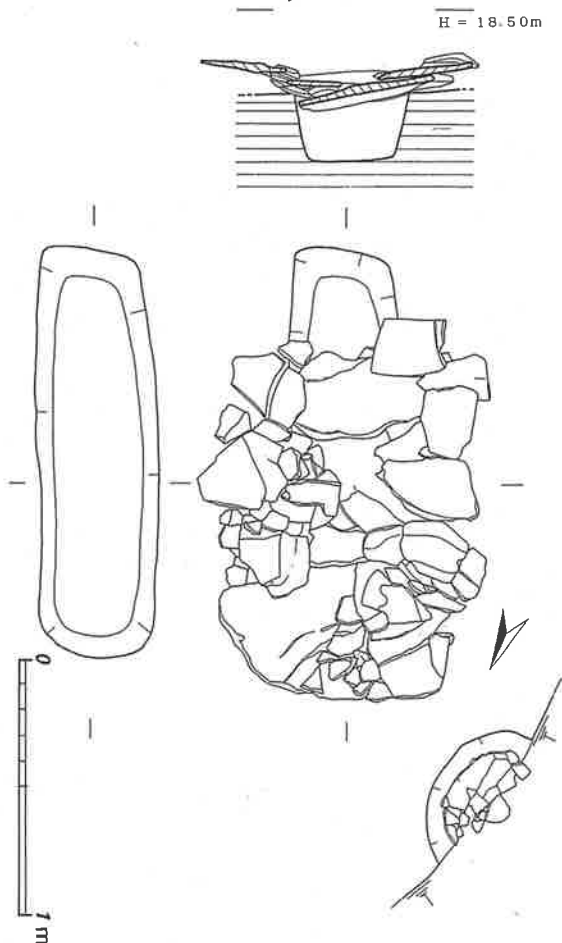
③ SK-156 (Fig. 34)

弥生時代の墳墓群が集中するのはA-II～B-I調査区であるが、そこから北へ約100mほど放れたC-I調査区でも土墳墓とみられる遺構が3基検出されている。

SK-156はC-I調査区南端部で検出された。この土墳墓の上面では古墳時代の住居跡SK-151が確認されている。棺は230×72cmのサイズを測り、北側小口が幅広くなる隅丸長方形のプランを呈する。主軸方向はN-19.5°-E。



■ Fig. 35 SK-72遺構実測図(1/30)



■ Fig. 36 SK-80遺構実測図(1/30)

③ SK-157 (Fig. 34)

SK-156の東側で検出した土壇墓で、同じようにSK-151に切られており、遺存状況は悪い。

棺はやや乱れた隅丸長方形のプランを呈し、北側小口部分がやや幅広く、南側小口部分は丸みが強くなって狭くなる。棺のサイズは215×65cmを測る。

頭位は北東に置き、主軸方向はN-37.5°-Eを示す。

③ SK-163 (Fig. 34)

SK-163はSK-157の北側で検出した土壇墓である。

棺は平面長方形のプランを持ち、北側小口の幅56cmに比べて南側が65cmと若干幅広くなっている。195×65cmのサイズを有するが、頭位は南側に置く。主軸方向はS-37°-Wを示す。

(3) 石蓋土壇墓

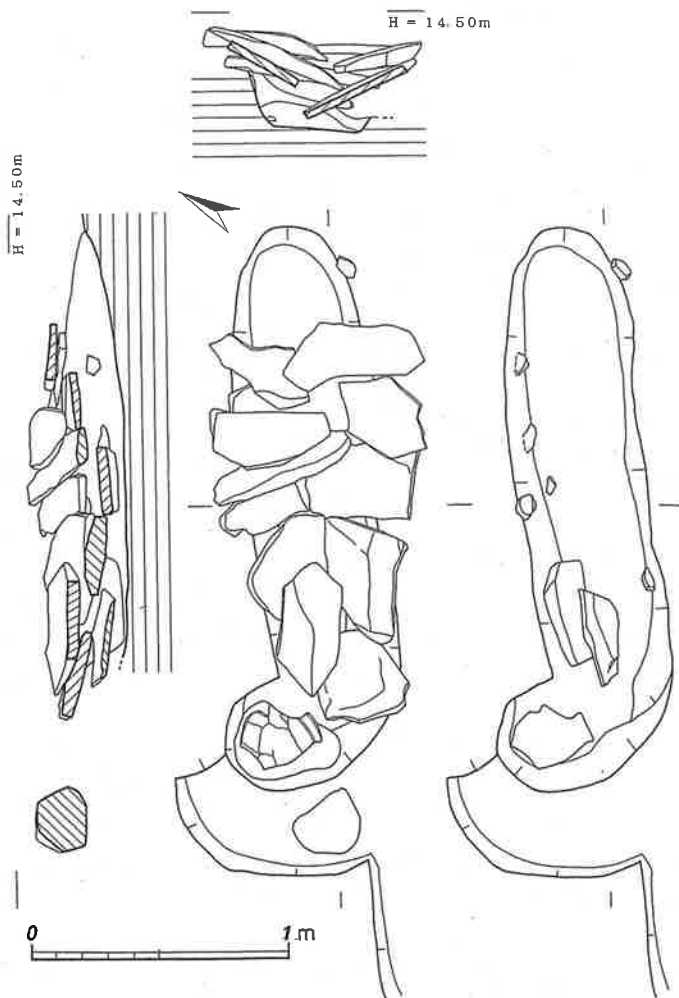
これまで報告した土壇墓は、無蓋土壇墓である。一部の土壇墓では、木蓋の目張りのための粘土が検出されている。しかし、ほとんどは墓壇プラン及び蓋部が遺存せず、わずかに棺底面部分が残るという状況である。そうした中で、3基という数少ない出土例ではあるが石

蓋を利用した土墳墓が検出されている。

① SK-72 (Fig.35)

SK-72は、A-II調査区のSX-49西側南部分で検出した。この周辺は甕棺、石棺そして複数の土墳墓が密集しており、それぞれが複雑に切り合い関係を持つ。SK-72は西側小口部分では小児甕棺であるSJ-76を切り、南辺部ではSK-73と切り合い関係を持つ。

SK-72の蓋は、長さ30~50cm、幅15~30cm、厚さ3~7cm程度の板石を利用しており、棺中央部分が棺内にやや落ち込んだ状態で出土した。棺は隅丸長方形の平面プランを呈し、200×53cmを測る。頭位は西小口側に置かれ、主軸はS-56.5°-W。実測ポイントは蓋石の中央に設定したため、棺の主軸からずれている。



■ Fig.37 SK-120遺構実測図(1/30)

② SK-80 (Fig.36)

A-II調査区SX-49西側中央部で検出したもので、上面は激しく攪乱されている。そのため、明確に石蓋土墳墓と言いきい面もあるが、ここではその可能性から石蓋土墳墓として報告する。

石材は攪乱により規則性は全くなく、棺内に乱雑に落ち込んでいる。棺のサイズは208×90cmで平面長方形プランを呈する。頭位は西側と考えられ、主軸はS-68°-Wを示す。

③ SK-120 (Fig.37)

この土墳墓はA-II調査区の最南端の段落ち際で出土した。すぐそばに楠の大木があり、その移植作業時に検出した。

蓋石は南小口側が欠失しているが遺存状況は比較的良好で、厚さ3cm前後の板材で棺を覆う。おおよそ幅100cm、長さ200cmの範囲にわたって石蓋を置いたと予想される。

棺は平面長方形のプランを呈し、162×47cmを測る。北側の頭位が置かれ、主軸方向はN-25°-Wを示す。

(4) 箱式石棺墓

①SC-26 (Fig. 38)

B-I 調査区南部、弥生墳墓群の西側で検出した。小児用の石棺墓であろう。

掘削機による表土剥ぎ作業によって蓋石の1つを誤って取り上げてしまった。斜面で検出し、墓壙は削平されていて確認できなかった。

主軸方向はN-32.5° -Wを示す。棺体は内法40×20cm、深さ23cmを測り、45×30cm、厚さ4~7cm程度の板石を2枚横にかけて蓋石とする。

小口及び長軸方向の側石は、それぞれ1枚の板石を用いている。小口の石板は25~40×17~20cm、側石は50×20cmの長方形の板石を用い、それぞれの板石が互いに持たせかけられるように組み合わされている。側石は段落ちする西側へ向けて傾いている。

②SC-51 (Fig. 39)

A-II 調査区SX-49の東側上端部の中央付近で検出した箱式石棺墓である。墓壙の南西側はSX-49によって削平されているが、棺体はほぼ完全に遺存していた。

棺体の主軸はN-53.5° -Wの方向を示す。蓋石は6枚用いて棺を覆い、頭位側とみられる北西側小口から2、3番目の蓋石上にもう1枚の板石を重ねている。4~6番目の

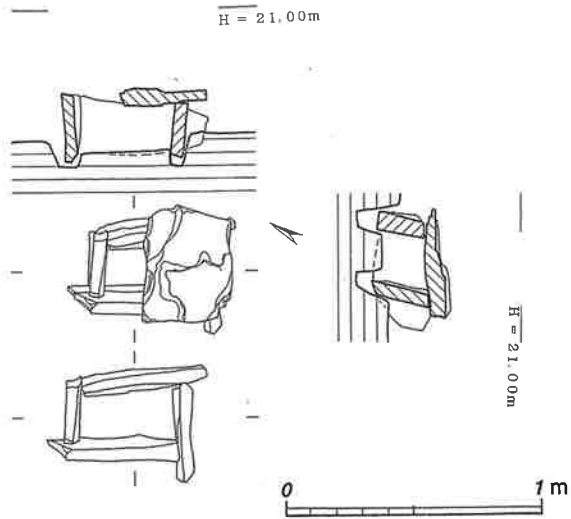


Fig. 38 SC-26遺構実測図(1/30)

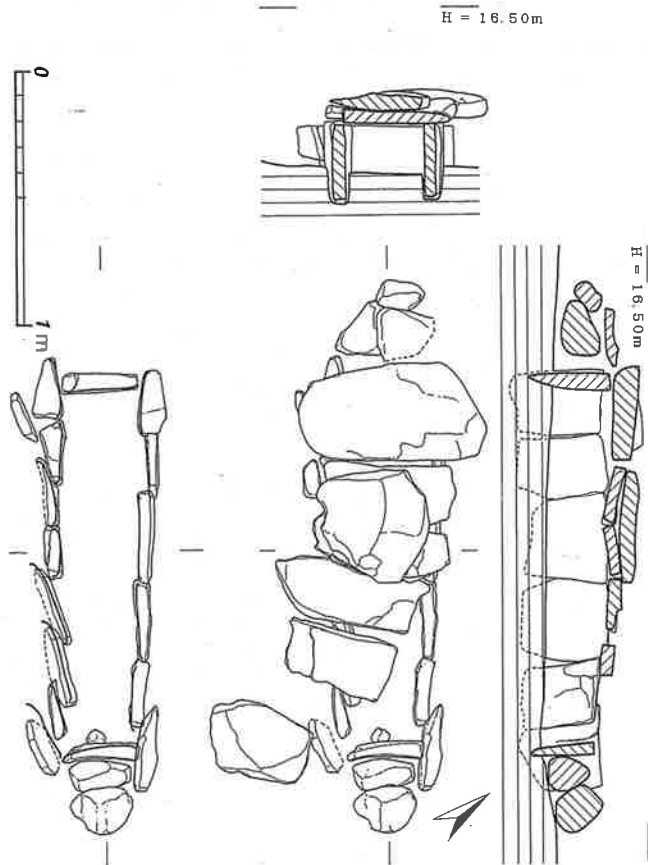
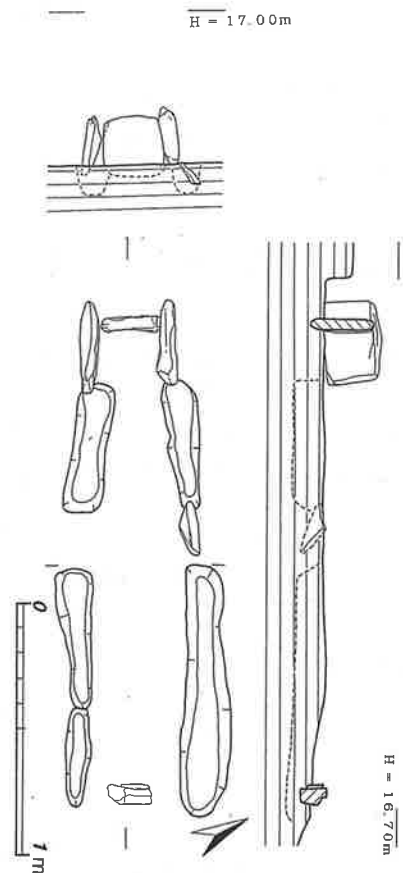


Fig. 39 SC-51遺構実測図(1/30)



■ Fig. 40 SC-53遺構実測図(1/30)

蓋石は南側にずれている。側石は北側が25~35cm、幅5~10cmの板石を6枚使い、南側はやや小ぶり板石を8枚重ねながら用いている。

小口板はそれぞれ長さ30cm、幅6~8cmほどの板石を1枚ずつ使っているが、北西側小口が南東側に比べて幅広くなる。小口板の外側には押さえのための塊石を2~3個据えている。

棺の内法寸法は長さ140cm、小口幅は30~32cm、棺底から蓋石までの高さは20cmである。

③ SC-53 (Fig.40)

SC-53はA-II SX-49東側調査区の北部分で検出したものである。SJ-58と切り合い関係を持ち、甕棺がSC-53より先行するとみられるが、この石棺墓は墓壇及び棺体がほとんど欠失していた。

遺存していたのは、北西小口の石板とそれを挟み込むように側石2枚が、また南東小口側及び北東側側石の根石とみられるものだけであった。また、棺体で使用された板石の抜け穴とみられる跡が検出されたため、棺の規模についてはおおよそ推測できる。

棺の主軸は、S-59° -Eの方向を示す。棺体の内法寸法は長さが182cm、小口幅は北西側が24cm、南東側が38cmで幅広い南東側に頭位が置かれると考えられる。側石は、抜け穴から推測すると北側が2枚、南側が3枚の板石を用いている。それぞれ中央部に抜け穴の痕跡がないことから、小さな板石でその部分の隙間を埋めていたのではないかと考えられる。

④ SC-57

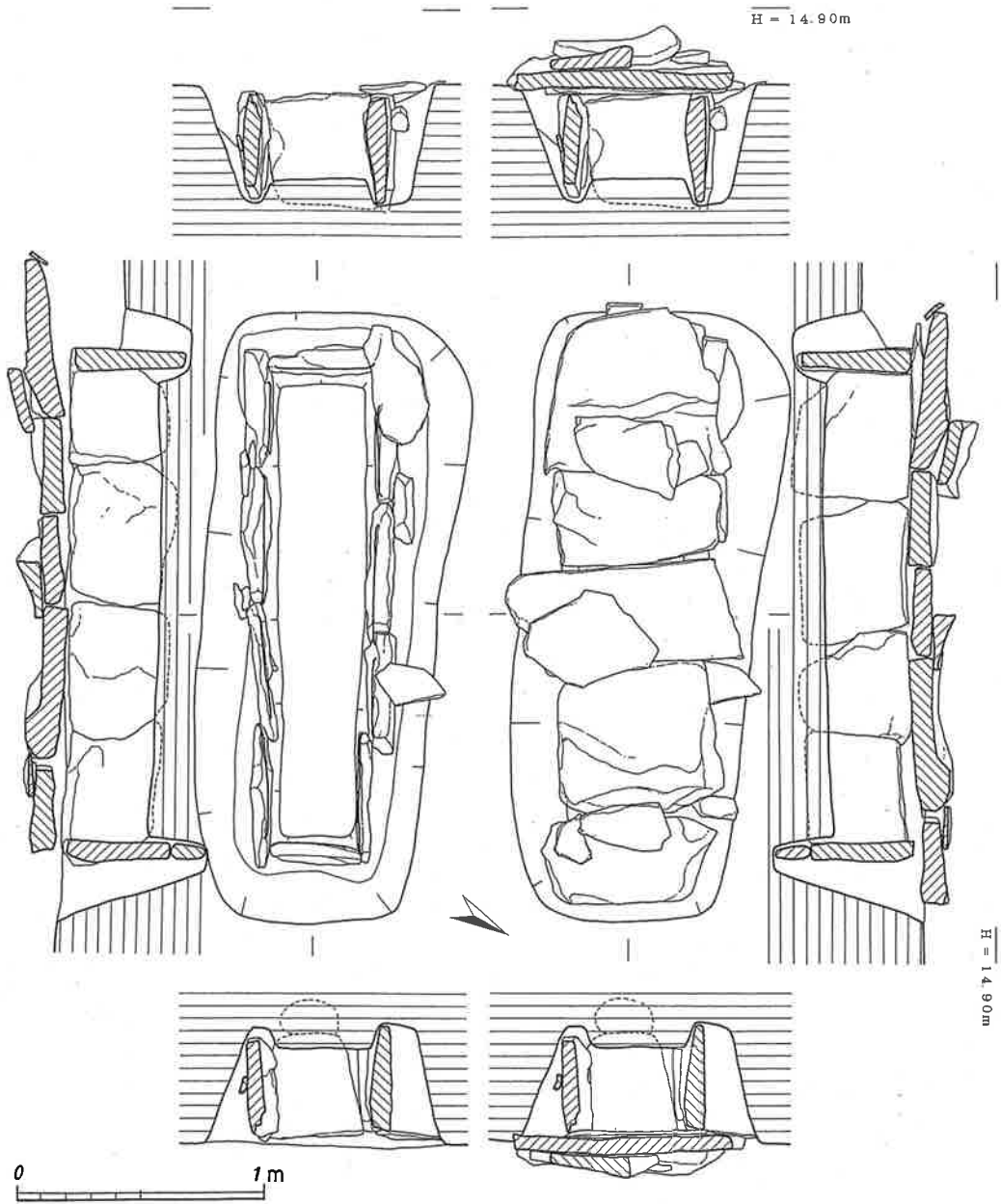
A-II SX-49東側調査区、SC-51の南側で検出した石棺墓である。SJ-56、SJ-64を切る形で埋設されているが、その大半はSX-49の掘削により欠失していてその全貌は不明である。わずかに小さな石板片が遺存していたのみである。

⑤ SC-74

A-II SX-49西側調査区の南端部で検出した石棺墓である。SK-73の南側にはほぼ同じ向きで埋葬されていると考えられる。SC-74もほとんどが欠失しており、遺存していたのは南側の側石と見られる2枚の板石のみである。

⑥ SC-75 (Fig.41, Fig.42, Fig.43)

SC-75はA-II調査区の南部で検出した比較的良好な遺存状態で出土した成人用石棺墓である。他の遺構との切り合い関係はなく、ほぼ完全な形の棺体が検出できた。

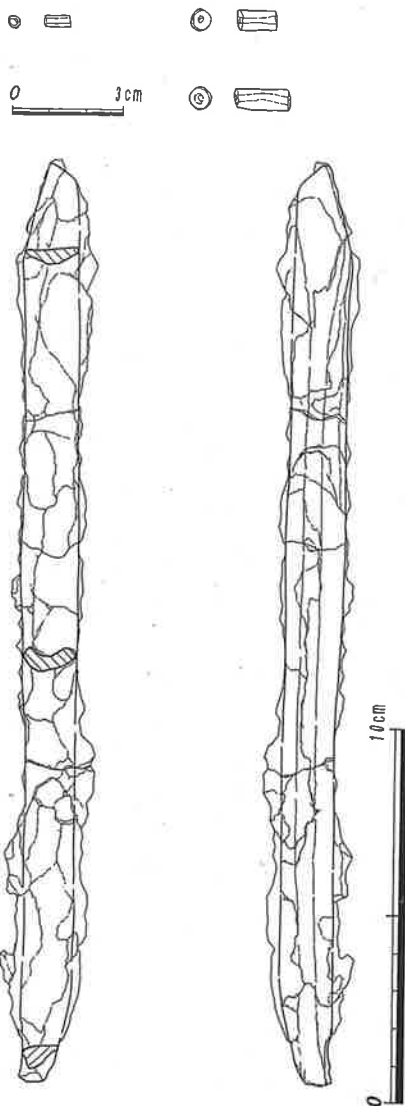


■ Fig. 41 SC-75遺構実測図(1/30)

墓壇は隅丸長方形の平面プランを呈しており、長軸253cm、短軸97cmを測る。棺の蓋石は5枚を横位置に並べている。それぞれの大きさはばらつきがあり、形状は長方形のものと同形状のものに大別できる。最大のは68×65cmの台形状の板石で、最長は90cmのものがある。この5枚の蓋石の上の継ぎ目にいくつかの押さえの板石が置かれている。

棺体は、小口板にそれぞれ1枚の板石が設置されており、それを両サイドから側石が挟み込ん





■ Fig. 42 SC-75出土管玉実測図(1/2)

■ Fig. 43 SC-75出土鏃実測図(1/2)

⑦ SC-77 (Fig. 44)

SC-77は、SC-75の西側で検出した石棺墓であるが、その大半は削平されていて遺存していなかった。わずかに石棺であることを示すものは、小口板と側石とみられる板石の存在である。検出時、この2枚の板石が直角方向に組まれていたことから石棺墓として位置づけた。

この石棺の長軸方向について、当初は南北方向と考えていた。しかし、SC-75と切り合い関係がないことや小口の作り方から逆の東西方向であると判断した。従って小口板は27×36cm、側板は57×38cmを測る。主軸方向は、S-81°-Wを示す。

でいる。北東側小口は37×40cm、厚さ7cm、南西側小口は42×46cm、厚さ8cmの板石を使用している。側石は、両サイドともに4枚の板石を用いる。その大きさは長さ50cm、高さ40~50cm、厚さ7~10cm程度のもので、そのほとんどは高さが揃えて配置されている。

棺体の内法の寸法は長軸192cm、短軸36~42cmを測る。頭位は小口幅が広がっている南西側に置かれており、主軸はS-61°-Wの方向を示す。

このSC-75の棺内からは副葬品とみられる管玉2点と鉄製の鏃（ヤリガンナ）が出土した。

検出地点は、棺中央よりやや北東小口側。小型の管玉は棺底中央部より、また管玉及びヤリガンナは接着した状態で南東側石の際より検出している。そして、棺底からはベンガラとみられる赤色顔料が確認された。

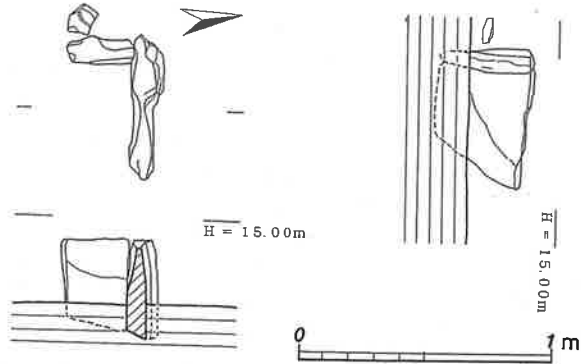
棺底中央出土の管玉は、長さ7mm、直径3mmの碧玉製とみられ、暗乳白色を呈する。穿孔は一方向から行っていると考えられる。側石横からヤリガンナの鏃に付着した状態で出土した管玉は、碧玉製で長さ1.05cm、直径0.5cmを測る。穿孔は両サイドから行われている。

この石棺から出土した鉄製のヤリガンナは3カ所で折れていたが、ほぼ完全な形に復元することができた。長さは24.6cm、刃長2.5cm、幅1.5cmを測る。基部はわずかに欠失しているとみられるが、断面が三角形となる。身部の断面は丸みがかかった三日月形を呈し、刃部は山形あるいは弧状の断面形となる。

⑧ SC-78 (Fig. 45)

A-II調査区SX-49西側の中央付近で検出した石棺墓である。SC-75の北側に位置し、SC-79及びSK-92と切り合い関係を持つ。

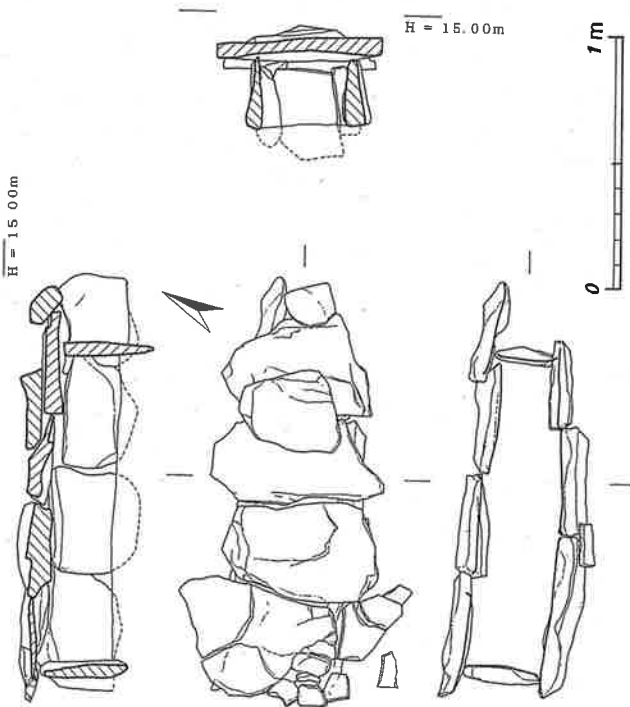
この石棺の上には大きな石が置かれていたが、標石的な意味合いがあるのかどうかは不明である。ただ、この石と石棺の蓋石との間の堆積土はほとんどなかった。



■ Fig. 44 SC-77遺構実測図(1/30)

墓壙のプランは不明であるが、棺はほぼ完全に遺存していた。蓋石は4枚の板石を横位置に並べて、その上から継ぎ目部分に押さえの板石を置く。小口部分は30×33cm、23×36cmの板石を用い、その小口を挟み込むように側石を配置する。北側が4枚、南側が3枚の板石を並べ、北側の1枚は小口板石から大きくはみだす。

棺体の内法サイズは120×31~22cm、棺底からの高さ26~22cmを測る。頭位は小口幅の大きい西側に置かれていると考えられ、主軸はS-64°-Wの方向を示す。棺底からはSK-92の蓋材の目張りのための粘土が検出されているが、その上から管玉が出土した。碧玉製で長さ1.4cm、径0.55cm。



■ Fig. 45 SC-78遺構実測図(1/30)

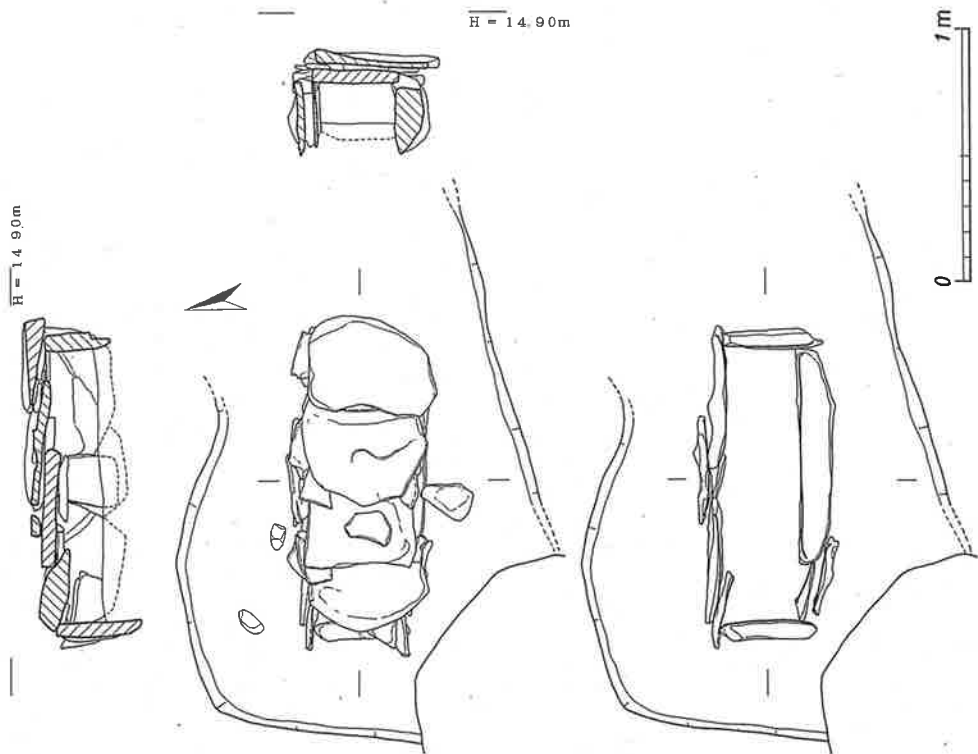
両サイドから穿孔を開けている。

⑨ SC-79 (Fig. 46)

SC-78の西側でSC-78の墓壙を切る状態で検出した石棺墓である。西側ではSK-80とも切り合い関係を持つが、土層観察等によりこのSC-79が最も新しいと判断した。棺の遺存状態は良好で、ほぼ完全な状態で出土している。

蓋石はメインとなる4枚の板石を隙間ができないように重ねながら並べる。そして、小さな隙間は小板石を用いて埋めている。

棺体は、小口板に40×35~25cmの板石を1枚ずつ置く。側石は、北側は比較的薄い板石を4枚用いている。南側は厚さ13cm、長さ85cmという板石を置き、小口板と



■ Fig. 46 SC-79遺構実測図(1/30)

の隙間には薄い板石2枚を重ねて用いている。棺の内法は108×30cmを測る。棺底からの高さは、20cm程度である。頭位は東小口側に置かれていると考えられ、主軸はS-73°-Eの方向を示す。

⑩ SC-82 (Fig. 47)

A-II調査区SX-49西側中央部で検出した石棺墓である。SK-81の北側、SK-87の西側にあたる。この石棺墓は検出した当初、蓋石が1枚遺存していた。しかし、棺内を掘り下げていくに従い、この蓋石が2次的に利用されていることが分かった。棺中央から東よりに瓦を用いて上辺経28cm、下辺経37cm、高さ50cmの筒状の空間を作っている。底部には薄い板石を敷いており、その部分の蓋として再利用されていたのである。こうした攪乱の時期は明確ではないが近世以降であろう。

棺は再利用されてはいるものの、小口板石及び側石はほとんど原形をとどめているといえる。小口板石は東側は35×50cm、厚さ3cmの薄い板石を用い、西側は53×43cm、厚さ2cm程度の板石を置き、その後ろに30×28cm、厚さ1cmの板石を並べる。側石は北側が3枚、南側が4枚の板石を重ねながら配置しており、西側小口に向けて「ハ」の字状に広がる。

棺の内法サイズは長さが173cm、中央部幅が34cmを測るが、棺底は攪乱により深く掘り下げられており不明である。

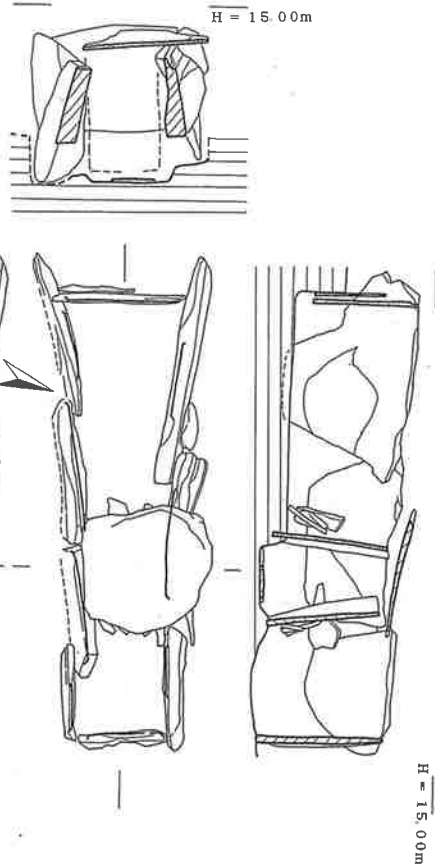
頭位は、小口幅が広がる西側の置かれ、主軸方位はS-73°-Wを示す。

① SC-83 (Fig. 49)

SC-83はA-II調査区SX-49西側中央北で出土した石棺墓である。SC-82の北側に位置し、直角方向に長軸を取る。

遺構の遺存状況は良好で、わずかに墓壇南東隅が攪乱で削平されている。墓壇は北側が幅広くなっている隅丸長方形のプランを呈している。

蓋石についても、墓壇と同様に北側に幅広い板石を用いており、南側小口側にいくに従って幅が狭くなる。蓋石は北側小口から順次重ねながら置いていき、隙間部分には粘土を使って目張りを行っている。北側から3、4番目の蓋石が棺内に落ち込んでいる。

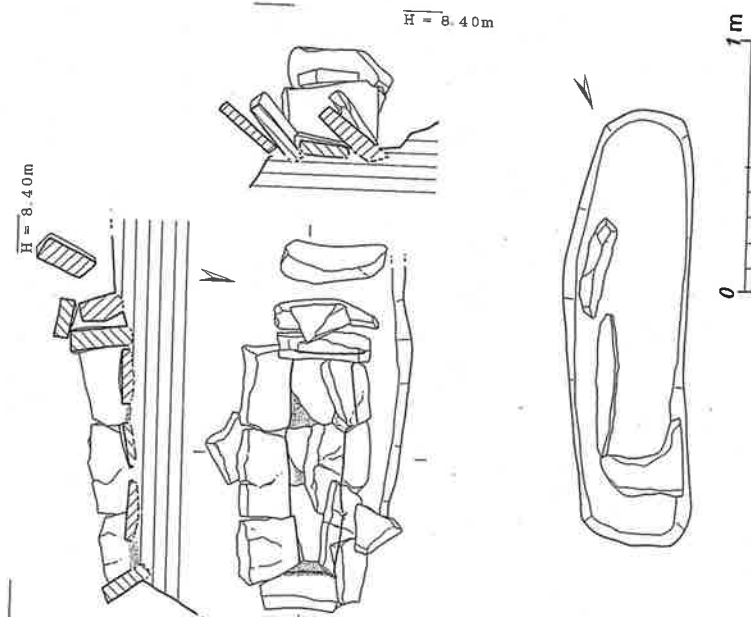


■ Fig. 47 SC-82遺構  
実測図(1/30)

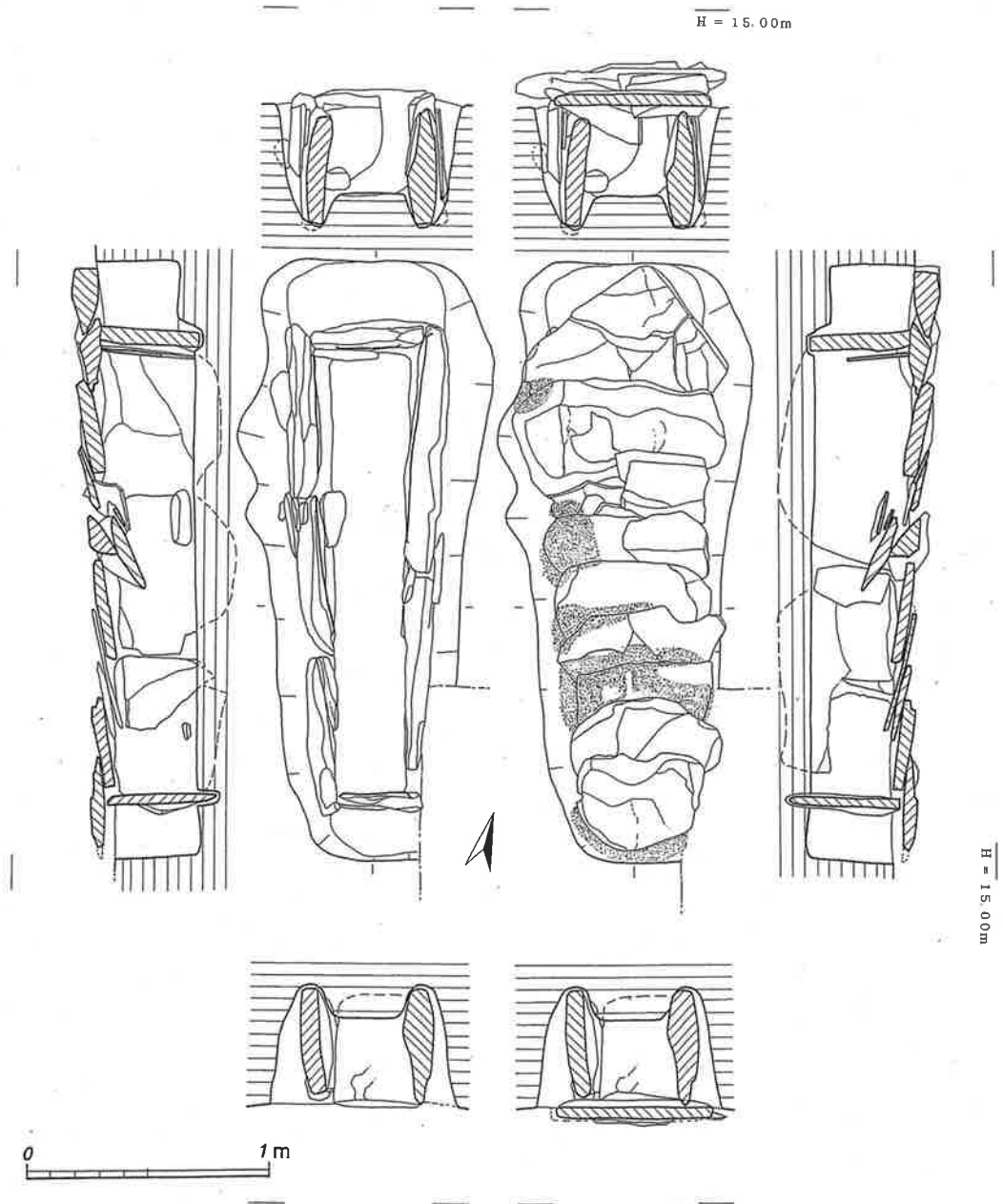
棺の小口には長さが46～35cm、高さが43～46cm、厚さが4～6cmの板石を用いている。北側小口には、内側に厚さが1cm程度の非常に薄い板石をもう1枚重ねている。

側石は東側が2枚、西側が3枚の板石を使い、隙間を小さな板石で塞いでいる。最大の石は長さ104×54×12cmのサイズを測る。

棺体の内法サイズは長



■ Fig. 48 SC-122遺構実測図(1/30)



■ Fig. 49 SC-83遺構実測図(1/30)

さが187cm、小口幅は北側が45cm、南側が28cm、棺底からの高さが40cmを測る。頭位は、北小口側に置かれ、N-17°-Wに主軸方向を取る。副葬品は遺存していなかった。

⑩ SC-84 (Fig. 50)

SC-84はSK-86の東側で検出した石棺墓であるが、大きく攪乱を受けている。また、その下面

にはSJ-101、102が埋葬してあり、それらを大きく削平して作られている。遺存していたのは、両小口板、側石とみられる3枚の板石及び2枚の蓋石であるが、多くは攪乱により原位置をとどめていない。わずかに北側小口板石だけが動いていないとみられる。

棺のサイズは推測であるが、 $115 \times 35 \sim 30$ cm程度と考えられる。頭位は北側で主軸方向は $N-16^\circ -W$ 。

#### ⑬ SC-121

この石棺墓はD-I調査区で南側方向に段落ちする斜面上で検出した。大半が削平により欠失していた。遺存していたのは北側の側石の一部のみである。

#### ⑭ SC-122 (Fig. 48)

D-II調査区、SC-121 ■ Fig. 50 SC-84遺構実測図(1/30)

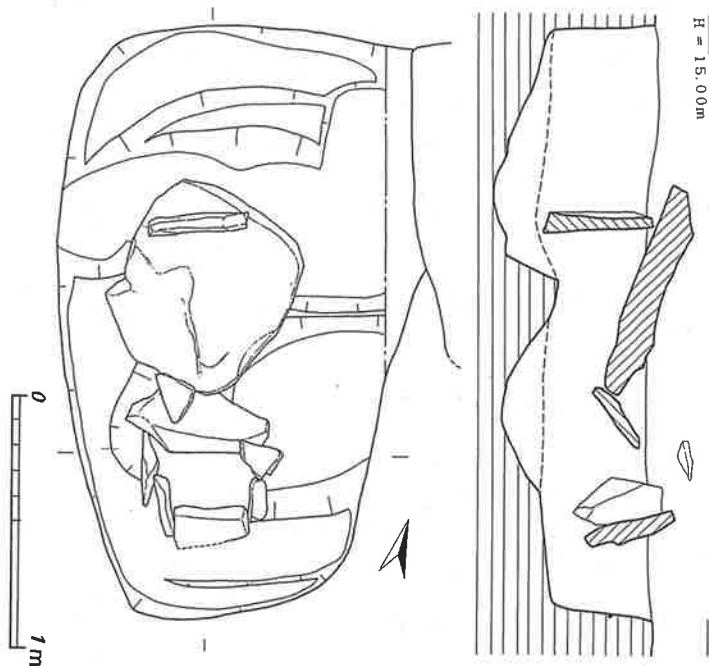
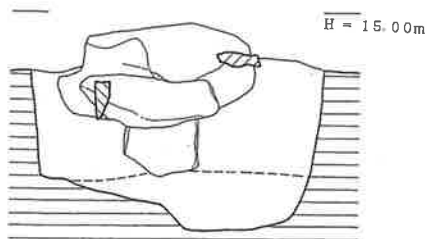
の南側で東側へ段落ちする斜面上で検出した石棺墓である。この石棺も削平を受けており、原形から大きく崩れている。蓋石は欠失している。側石は段落ちする南側に向かって倒れており、小口板石は外方向へ開く。また、棺底には3枚の板石が並んで敷かれた状態で確認された。

小口板は、 $36 \times (25 + \alpha)$ cmと $30 \times (20 + \alpha)$ cm、厚さ6~8cmを測る。側石は両サイド共に3枚ずつ用いている。石材のサイズはそれほど違いがなく、長さ25~35cm、高さ30cm、厚さ5~7cmを測る。棺のプランを復元すると、長さ87cm、小口幅は23~15cmを測る。頭位は西小口側と考えられ、主軸方向は $S-80^\circ -W$ を示す。

この石棺墓およびSC-121については、時期的には古墳時代に入る可能性がある。

#### ⑮ SC-162

SC-162はC-I調査区とII区の境界付近で検出した石棺墓である。この調査区は中世期に造り出した平坦面によって、前時代の遺構は大きく削平を受けているとみられる。そのため、SC-162についても大半が削平されていて、わずかに墓壇のプランと側石が2枚遺存していたに過ぎない。



## (5) その他の遺構と遺物

これまで、弥生時代の所産とみられる墳墓群として甕棺墓、土壙墓、箱式石棺墓の調査について報告してきた。今回の調査ではこの時期の集落跡が確認できなかったため、遺構としてはこれらの墳墓群が主役をなすことはいうまでもないだろう。しかし、これらの他に数は少ないが弥生時代の遺物を出土した遺構を検出した。その概要と出土遺物について以下に報告する。

### ①遺構

調査区全体のなかで、弥生時代の所産である遺構はA、B調査区に集中している。丘陵南側斜面にあたるこれらの調査区は、地形的に墳墓を造営するのに適した環境にあることは間違いない。また、その他の遺構についてもA-I調査区で検出している。

A-I調査区は墳墓が集中するA-II調査区の南側に位置する。しかし、II調査区が丘陵上であるのに対し、I調査区は大きく段落ちした崖下の平坦面になる。旧地形はII調査区からI調査区に向けて緩やかな斜面を形成していたと考えられるが、後世の削平によって2つの調査区間は大きな崖面となったようである。

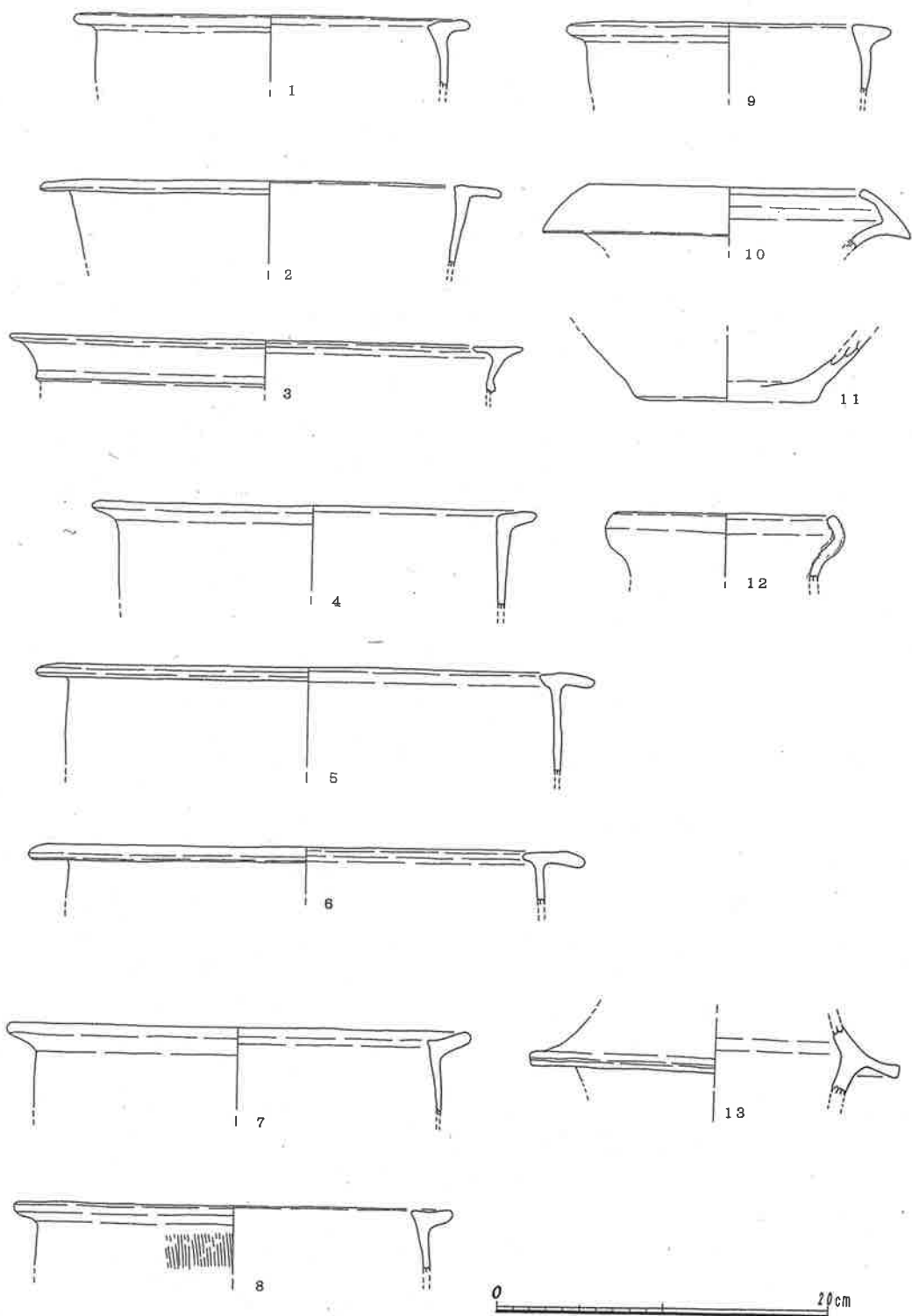
このA-I調査区の東南側はさらに段落ちする。その段落ち部分SX-200に堆積した土層は、下層が弥生時代中期以降の遺物包含層で、上層が古墳時代前期の遺物包含層である。このSX-200からは多くの遺物が出土しているが、細片が多く図化し得たものは数少ない。

SX-200の北側の斜面で検出したSK-208およびSK-209は弥生土器を出土した。斜面での検出であることや遺構の遺存状況が悪いため、その性格はよく分からない。SK-208は長方形のプランを呈する。またSK-209は、SK-208から一段下がって斜め方向に延びる平行四辺形プランを呈する遺構で、当初はこれらがSX-200の底面に溜まる水の取水口ではないかと考えた。

その他、SK-208の南西側斜面に掘り込まれた柱跡P-01からも弥生土器が出土している。また、A-I調査区の北西側で検出した長方形の遺構SK-202、SK-203、SK-207は攪乱を受けていて出土遺物に中世期の遺物が若干混ざっているが、弥生時代の所産である可能性もある。その性格については不明である。

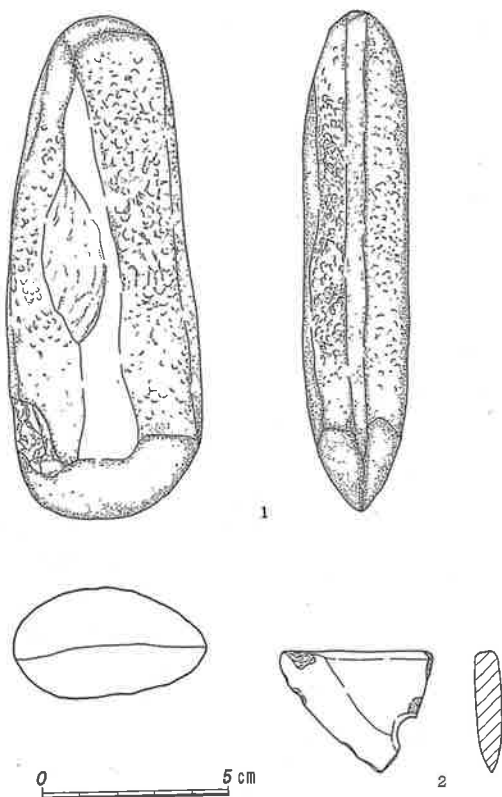
### ②遺物 (Fig. 51, Fig. 52)

弥生土器として図示し得たのは13点である。1～9は甕形土器でいずれも口縁部破片である。1～3、9はSK-209から出土した。1は、やや内傾した逆L字形口縁の甕で復元口径24.2cm、現存器高4.2cmを測る。赤褐色を呈し、胎土は1～3mmの砂粒を含みやや粗雑である。摩滅のため調整は不明。2は、口縁端部が外傾する逆L字形口縁を呈する。胴部は張りがなく底部に向けてすばまっていくとみられる。復元口径28.0cm、現存器高4.9cmを測る。1～3mmの砂粒を含んで胎土はやや粗く、暗黄灰色を呈する。3は、鋤先状の口縁部で上面がほぼ水平となり、やや内湾ぎみに胴部へと向かう。口縁下に三角突帯が巡る。復元口径31.0cm、現存器高2.8cmを測る。9は、復元口径19.6cm、現存器高4.3cmを測る甕で、肥厚した逆L字形口縁を有する。



■ Fig. 51 S X-123, 200, S K-209出土遺物実測図 (1/4)





■ Fig. 52 出土石器実測図(1/2)

4～6の甕は、SX-200から出土したもの。4は、口縁内側端部が下がる逆L字形の口縁で胴部上半は直線的になる。復元口径27.0cm、現存器高6.0cmで、胎土には1～2mmの砂粒が多く含まれる。5は、口縁外側端部がやや下がるT字形を呈し、口縁部からほぼ直線的に胴部へと向かう。復元口径33.0cm、現存器高は6.2cmを測る。1～2mmの砂粒を多く胎土に含み、淡赤褐色を呈する。6は、口縁外側端部がやや肥厚して下がるT字形口縁を有する。復元口径は33.6cm、現存器高3.3cmを測り、1～2mmの砂粒が多く混じる。

7、8はP-01より出土した甕形土器の破片で、7はやや内傾した逆L字形口縁部を有する。胴部はやや張りを持つとみられる。復元口径28.0cm、現存器高5.1cmを測る。1～3mmの砂粒を含み、胎土はやや粗雑であるが、焼成は良好で淡赤褐色を呈する。8は、口縁上端部はほぼ水平で中央がやや窪む逆L字形を呈する。復元口径26.6cm、現存器高3.7cm

で外面口縁部はヨコナデ、胴部はタテ方向のハケ目調整を施す。

10～12は壺形土器の口縁部及び底部破片である。10、11はSK-209から出土したもので、10は複合口縁壺で頸部は大きく外反して開きながら口縁部へ続き、口縁上半部は丸みをもって内傾する。復元口径16.4cm、現存器高3.7cmを測る。11は、壺の底部破片で底部と胴部の境にわずかな段を有し、大きく開く。復元底径11.0cm、現存器高は4.1cm。

SX-200から出土した12は、袋状口縁壺の口縁部破片で、丸みをもって内湾する口縁部を有する。復元口径は13.2cm、現存器高3.7cmを測る。

13は、SX-123から出土した筒形器台の口縁部破片である。口縁端部は欠失している。錨状の縁部はやや外反しながら斜め下方に開く。復元内口径14.8cm、錨部径22.4cmを測る。器壁の一部には丹塗り痕が残る。

弥生時代所産の石器は、B-I調査区で遺構検出時に表採した磨製石斧とA-I調査区SK-96の覆土から出土した石包丁の破片である。

石斧は全長13.3cm、刃部幅4.9cmを測る。石包丁は約3分の1の遺存状況で現存幅4.0cm、現存器高3.3cm、厚み0.7cmを測る。穿孔部が若干残っているが、その近くまで研磨されて使用されている。

## 2. 古墳時代の遺構と遺物

八幡山遺跡の調査では、わずかではあるが古墳時代の所産とみられる遺構と遺物も検出した。多くは中世期に行われたとみられる土木整地作業に伴う削平により欠失しているが、ここに報告する遺構は遺存状況は悪いが、その性格をある程度推測できるものである。

今回の調査のなかでA、B、D調査区からは明確な古墳時代の遺構は検出できなかった。A及びD調査区では古墳時代前期の遺物包含層を確認しているが、その時期の生活址は検出できなかった。

C-I~II調査区の平坦面は、中世期に整地された山城あるいは砦などの戦略施設の一部（曲輪）である可能性があるが、そうした部分にかろうじて遺存していたのが以下に報告する古墳時代の住居跡である。これらの遺構は、他の調査区で確認された遺物包含層の時期よりは後出するものである。

### (1) 竪穴式住居

#### ①SK-151 (Fig.53, Fig54)

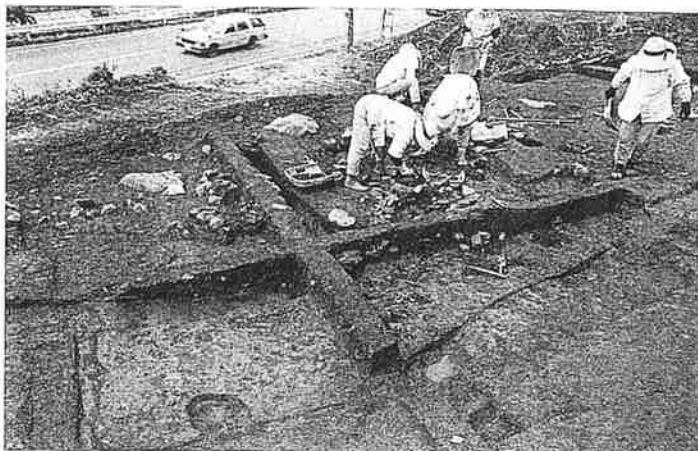
SK-151は、C-I調査区の南端部で検出した竪穴式住居跡である。遺構西側は削平により欠失し、遺存状況はあまり良くない。

平面プランは、西側が欠失してはいるものの北側の壁がややカーブを描き始めていることから、ほぼ方形に近いプランではないかと予想される。また、周溝が東側の一部で検出されたが、西側に行くに従ってなくなる。そのため、東及び南サイドに幅60~80cmのベッドが巡ると思われるが不明確である。

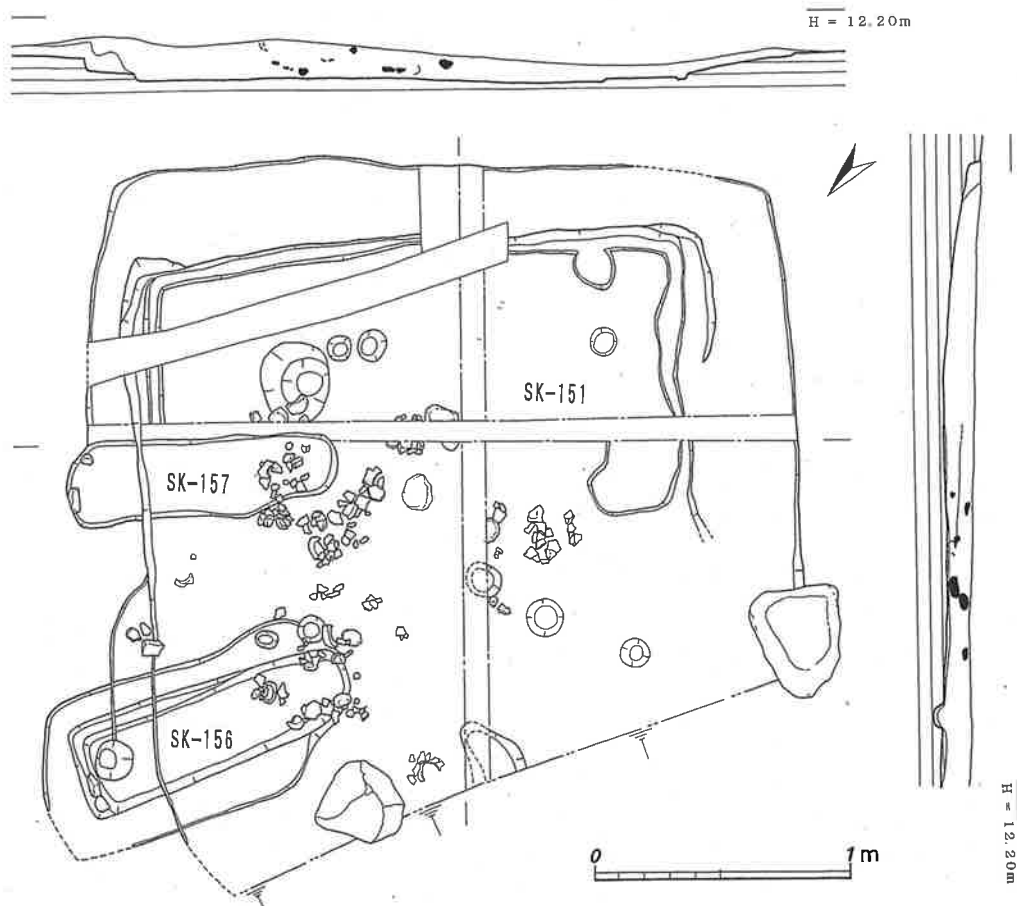
住居跡の規模は東側壁510cm、南側壁320cm、北側壁500cm前後が遺存している。底面までの深さは、25cmほどで浅い。北側壁あたりでは土壌墓のSK-156、SK-157がSK-151に切られて検出されている。覆土からは生活に使ったとみられる遺物が押し潰された状態で出土している。

SK-151出土の遺物のなかで、復元整理後図化し得たものは17~21、24~29 (Fig.54) である。

17~19は、土師器甕の口縁部から胴部にかけての破片である。17は、口縁部は頸部より大きく外反し端部を薄く摘み出す。復元口径16.4cm、現存器高5.0cm。胎土は1mm程度の砂粒を含み、焼



■ Photo. 4 C区調査作業風景(上)  
C区掘下完了写真(下)

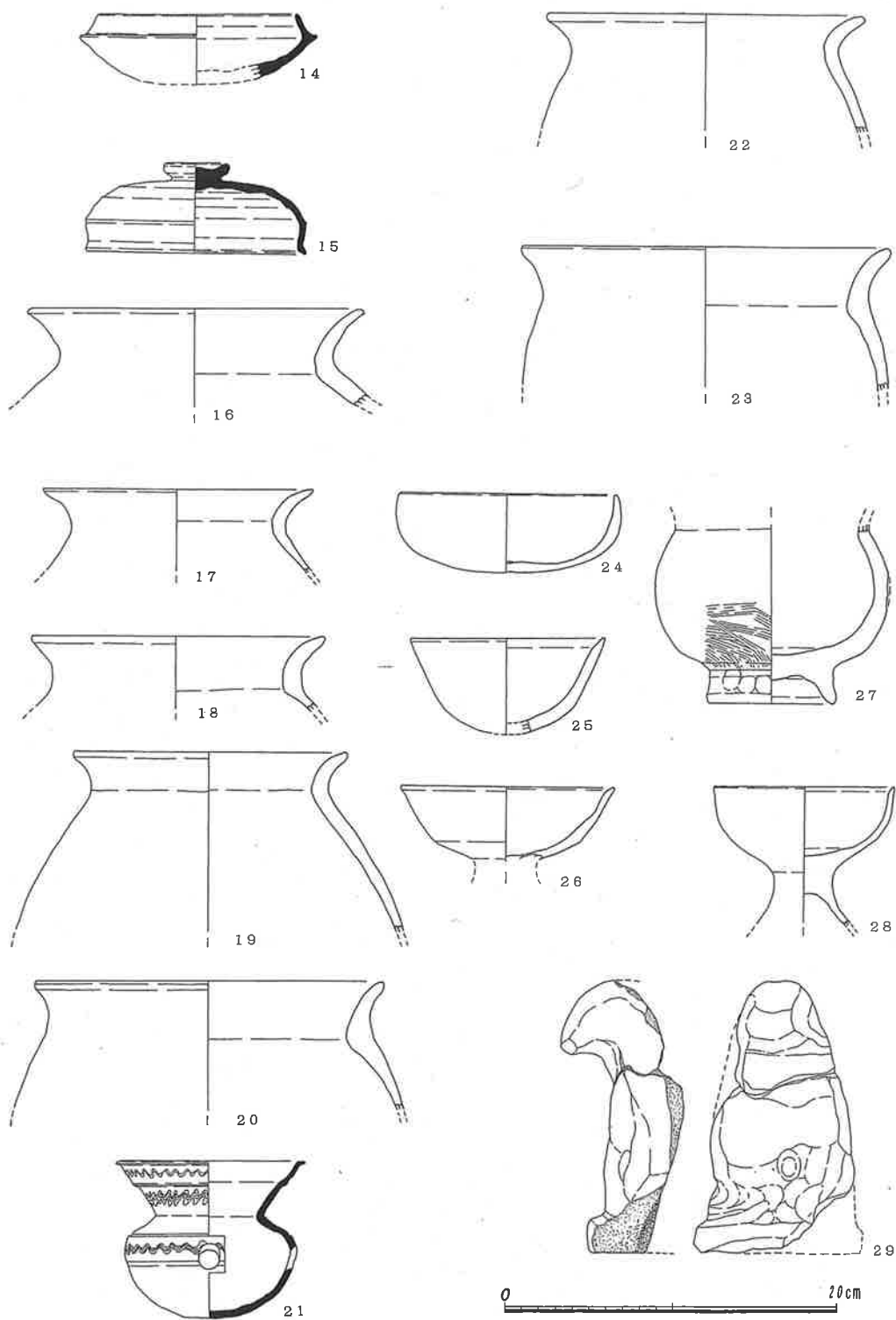


■ Fig. 53 SK-151出土状況実測図(1/30)

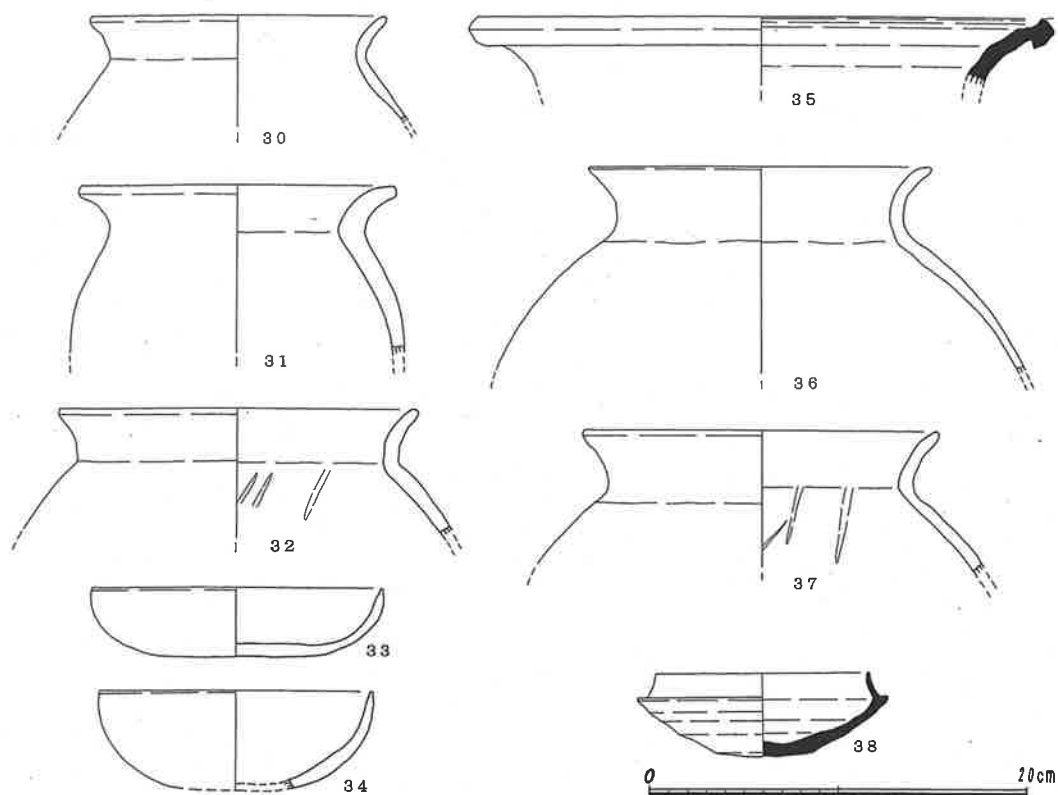
成は良好である。18は、復元口径17.9cm、現存器高3.8cmで肥厚した口縁部を有する。胎土はやや粗雑で1~3mmの砂粒を含むが、焼成は良好。19の口縁部は大きく外反し、頸部から肥厚したまま胴部へと広がる。復元口径16.2cm、現存器高10.9cmで、胎土はやや粗雑で1~4mmの砂粒を含む。20は頸部が大きく肥厚し、口縁端部はやや外反して短く延びる。胴部はあまり張りを持たない。復元口径21.0cm、現存器高7.7cmで、胎土はやや粗く2~3mmの砂粒を多く含む。

21は、須恵器の罍である。2分の1程度が欠損している。口縁端部は水平に引き出して上端部に沈線が巡る。口縁下に段を有し、その上下に波状文を施す。また、胴部肩にも1条の沈線が巡り。その下に波状文が巡る。頸部はよく締まって肩部が張る。胴部中位には穿孔が施される。法量は復元口径11.5cm、器高9.5cm、最大胴径9.8cmを測る。

24は、坏でやや平底化した底部を有し、肥厚した体部がやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部へと続く。復元口径13.0cm、器高4.6cmを測る。25は、厚みを持つ器壁を有した坏で、底部から斜め上方へ直線的に立ち上がる。復元口径11.6cm、器高5.8cmを測る。26は、高坏の坏部破片で、復元口径12.8cm、現存器高4.4cm。27は、台付き壺で上部を欠失し、台部の復元径7.6cm。現存器高10.6cm。台部は指押さえ痕、体部下位にはハケ目が残る。28は、高坏で脚底部が欠失する。坏



■ Fig.54 S E-04, S K-02, 151, 153, 155出土土器実測図(1/4)



■Fig. 55 B-II、C-I 調査区整地層出土土器実測図(1/4)

部復元口径10.8cm、現存器高は8.5cmを測る。29は、支脚で背部が欠失しており、器高16.5cm。

②SK-152

C-I 調査区の北側部分で検出した住居跡で、東壁側とみられる周溝跡が遺存するのみである。周溝の南北方向の長さは、約480cmである。

③SK-153

C-II 調査区の南側で検出した住居跡である。この遺構についても西側に向けて削平を受けており、遺存しているのは東側壁を中心として部分のみである。北側は攪乱によって削平されており、東壁の遺存長は約500cmを測る。支柱穴とみられるピットは、うまく検出できなかった。

この住居跡より出土した遺物のなかで、実測・図示できたのは23のみである。23は、土師器甕の口縁部破片である。口縁は頸部より外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。頸部は締まりがなく、張りが無い胴部へと続く。復元口径22.4cm、現存器高8.5cmを測る。器面の調整は摩滅のため不明。

④SK-155

SK-155はC-II 調査区の北側中央部分で検出した。この住居跡についても西側部分が大きく削平されている。また、住居内部は攪乱により削平を受ける。東壁部分がわずかに遺存している。

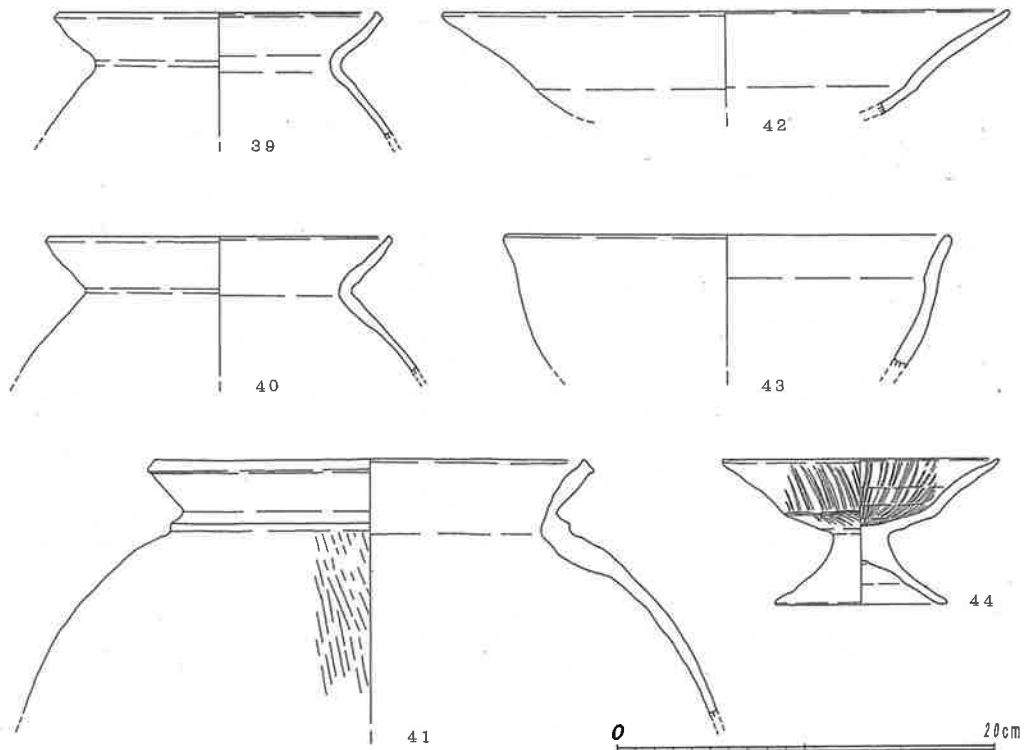
南北東側のコーナーは検出しており、南北長は約500cmを測る。

この遺構の内部とみられるピットから出土した遺物の中で図示できたのは15、16(Fig.54)のみである。15は、須恵器の高坏蓋。ボタン状のつまみを有し、天井部と口縁部の間に明瞭な段が巡り、口縁端部面にも段が回る。天井部2/3程度に回転ヘラ削りを施す。復元口径13.2cm、器高5.4cmを測る。16は、土師器の甕の口縁破片で、頸部から大きく外反して口縁部へ至る。復元口径20.4cm、現存器高5.9cmを測る。

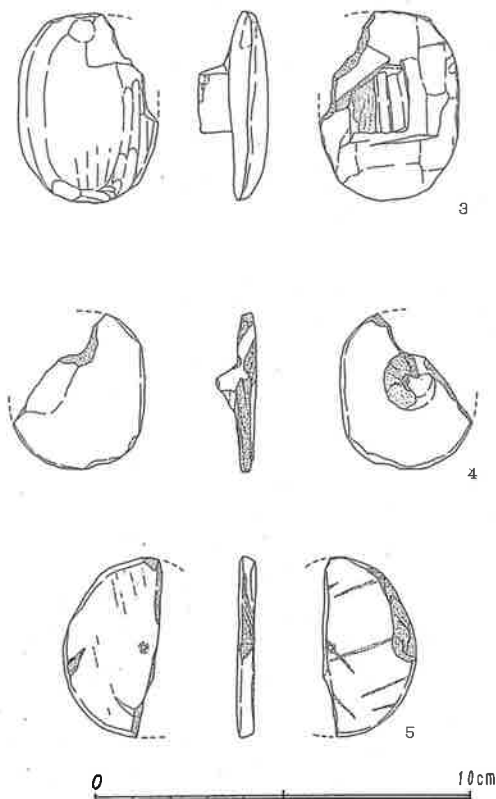
(2) その他の遺構と遺物

今回の調査では、古墳時代の所産とみられる明確な遺構の検出例は数少ない。その背景には、従来は所在していたと思われる遺構が中世期以降の大規模な土木事業により削平、消滅した事実があるということが分かってきた。しかし、遺構自体は現存しないが遺物は土木事業により原位置を移動しつつも整地層等のなかに包含されており、それらの多くが出土している。

B調査区では西側段落ち部分SX-35の覆土中には中世期の遺物が多く含まれていたが、38(Fig.55)など古墳時代の遺物も検出された。38は、須恵器の坏身であるが、酸化焰焼成で淡赤褐色を呈する。約1/2が現存する。かえりは高くやや内傾し、口縁端部は丸く仕上げる。外面は受部下まで回転ヘラ削りが施され、受部付近はその上からナデ調整が行われる。復元口径11.4cm、



■ Fig. 56D区包含層出土土器実測図(1/4)



■ Fig. 57 C区出土滑石製品実測図(1/2)

33、34は土師器坏。33は、底部の平坦部が広く、体部は内湾しながらやや肥厚した口縁部へと続く。復元口径15.4cm、器高3.7cm。34は、器高が高く、狭い底部から内湾して立ち上がる。復元口径14.4cm、器高5.2cmを測る。35は、須恵器の甕の口縁部破片。玉縁状の口縁端部を呈する。

D調査区では古墳時代前期の遺物包含層を検出している。そのなかで実測・図示できたのは39~44(Fig.56)である。39~41は甕の口縁部破片である。39、40は共に外来系のいわゆる「布留式系甕」である。39は、口縁部がやや内湾ぎみに開き、端部は外傾して面取りされる。内面は頸部下までケズリ調整により器壁を薄く仕上げる。外面の調整は摩滅のため不明。復元口径16.8cm、現存器高6.5cmを測る。40は、直線的に開く口縁部を有し、端部は外傾する。復元口径18.0cm、現存器高7.3cm。41は、頸部に段が巡る大型の甕で復元口径22.8cm、現存器高13.4cmを測る。口縁部はやや外反ぎみに開く。42及び44は土師器の高坏。42は、坏部破片で体部中位に稜を有し、口縁部に向けてやや外反しながら開く。44は、2/3程度の遺存状態。体部下半に稜を持ち口縁部に向けて外反しながら開く。脚部は低く裾部は大きく開く。坏部復元口径14.6cm、底径9.2cm、器高7.7cmを測る。43は、鉢で復元口径23.2cm、現存器高7.1cmを測る。

その他、C調査区からは滑石製品5（3、4は中世期の所産か?）も出土している(Fig.57)。

器高4.4cmを測る。C調査区東側では、斜面上に平坦部を形成するための整地層が検出された。その土層中からも多くの古墳時代の遺物が検出されている。図示できたのは30~38(Fig.55)である。30~32及び36、37は土師器の甕口縁部破片である。30は、なだらかなカーブを描く頸部を持ち、口縁端部は丸くおさめる。復元口径15.6cm、現存器高5.7cmを測る。31は、厚い器壁を持つ甕で口縁部は大きく外反し、胴部はあまり張りを持たない。復元口径17.0cm、現存器高17.8cmを測る。32は、復元口径19.2cm、現存器高7.0cmの甕で頸部から直に立ち上がりながら端部が外反する口縁部を呈する。

36は、ゆるやかに外反する口縁部を持つ甕で、胴部はやや器壁が薄くなり張りを持つ。復元口径18.2cm、現存器高10.9cmを測る。

37は、頸部が締まり口縁部は直線的に外反する。頸部内面には明確な稜がつく。復元口径18.6cm、現存器高7.8cmを測る。

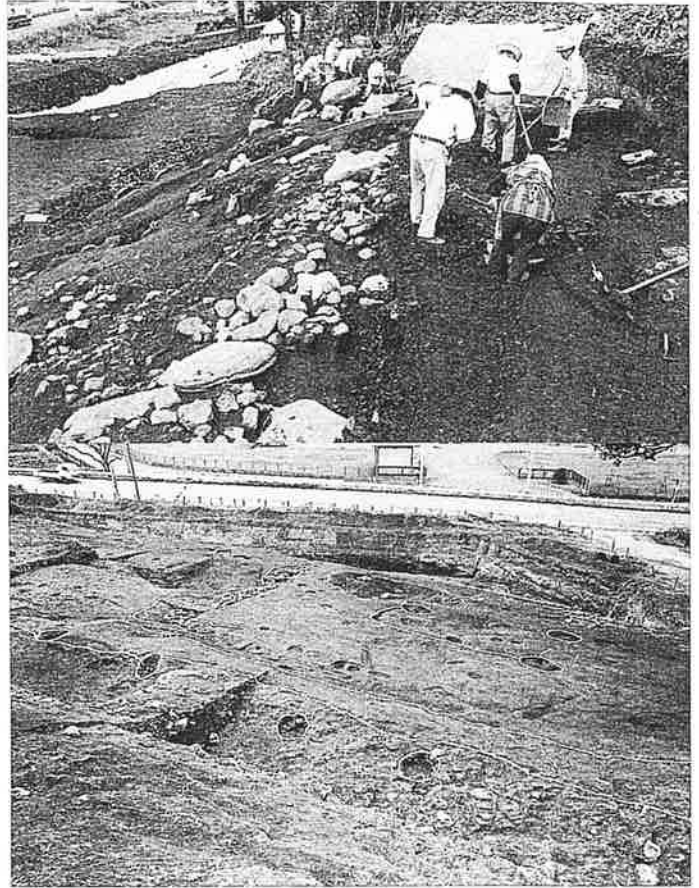
### 3. 中世の遺構と遺物

今回調査した「八幡山遺跡」は従来、中世から戦国時代の山城あるいは砦跡として認識、周知されてきた。地元にも「昔は出城だった」という伝聞が残っている。

御嶽山から舌状に延びた低丘陵の突端部に島状に隆起した部分であり、その立地からまた頂部に八幡神社の社が奉られていることから、そうした遺跡であることは十分予想されていた。そして、この調査ではこれらの伝聞を具体的に裏付ける考古資料が出土しており、大きな成果を得ることができたといえる。

今回の調査で明らかになったのは、中世期に大規模な土木事業が行われことを示す整地層の検出と、それに伴う施設の存在である。国道拡幅部分という限られた範囲の発掘調査であり、施設の全貌は不明であるが、平坦面あるいは斜面の造り出しや溝の掘削、また施設とみられる掘立柱建物跡や井戸跡らしき遺構などいくつか検出した。

ここでは、そうした中世期の所産である遺構と遺物を中心に報告する。



■Photo. 5 調査風景

#### (1) 土壌

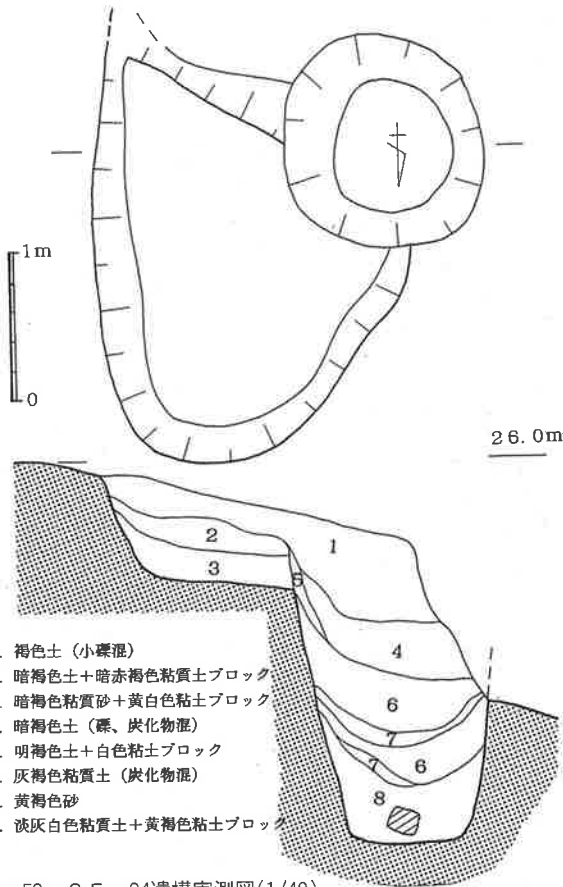
##### ①SE-04(Fig.58)

この調査で出土した井戸跡的施設と考えられる遺構は、SE-04だけである。この土壌はB-I調査区の北側に延びる細い平坦面と土取りによる削平部分との境で検出した。

SE-04の平面プランは楕円形で110cm×140cmを測る。遺存する深さは約200cmで、底径は約70cm程度の大きさである。当初はこの掘り方状況から井戸跡と考えたが、遺構の深さや土層状況から井戸としての機能は果たせないと判断した。果たして取水できたかどうか疑問ではあるが、おそらく雨水等の溜め水用の穴ではないかと推測される。また、土層堆積状況を観察すると、各土層に炭化物が多く混じっており、廃棄土壌として使われた可能性も指摘できる。

出土した遺物で実測し得たものは、次の数点である。22(Fig.54)は、上面で検出した土師器の





1. 褐色土 (小礫混)
2. 暗褐色土+暗赤褐色粘質土ブロック
3. 暗褐色粘質砂+黄白色粘土ブロック
4. 暗褐色土 (礫、炭化物混)
5. 明褐色土+白色粘土ブロック
6. 灰褐色粘質土 (炭化物混)
7. 黄褐色砂
8. 淡灰白色粘質土+黄褐色粘土ブロック

■ Fig. 58 SE-04遺構実測図(1/40)

磁碗の口縁部破片か。

また、底部付近からは銅銭が出土している (Fig. 72)。1/2程度の現存で「咸平元□」と読める。北宗銭「咸平元寶」とみられる (初鑄は咸平元年=998年)。

②SK-03, SK-06, SK-08, SK-09

SK-03は、SE-04の北側で検出した土壌である。平面プランは円形で直径125cm、現存する深さは約80cm程度を測る。覆土中は5~20cm程度の礫が多量に含まれていた。暗褐色土に灰褐色の粘土ブロックが混じる土層でカーボンが多く混じる。図化できた出土遺物は、土師器皿45 (Fig. 59) や輸入陶磁器207、219 (Fig. 60) がある。

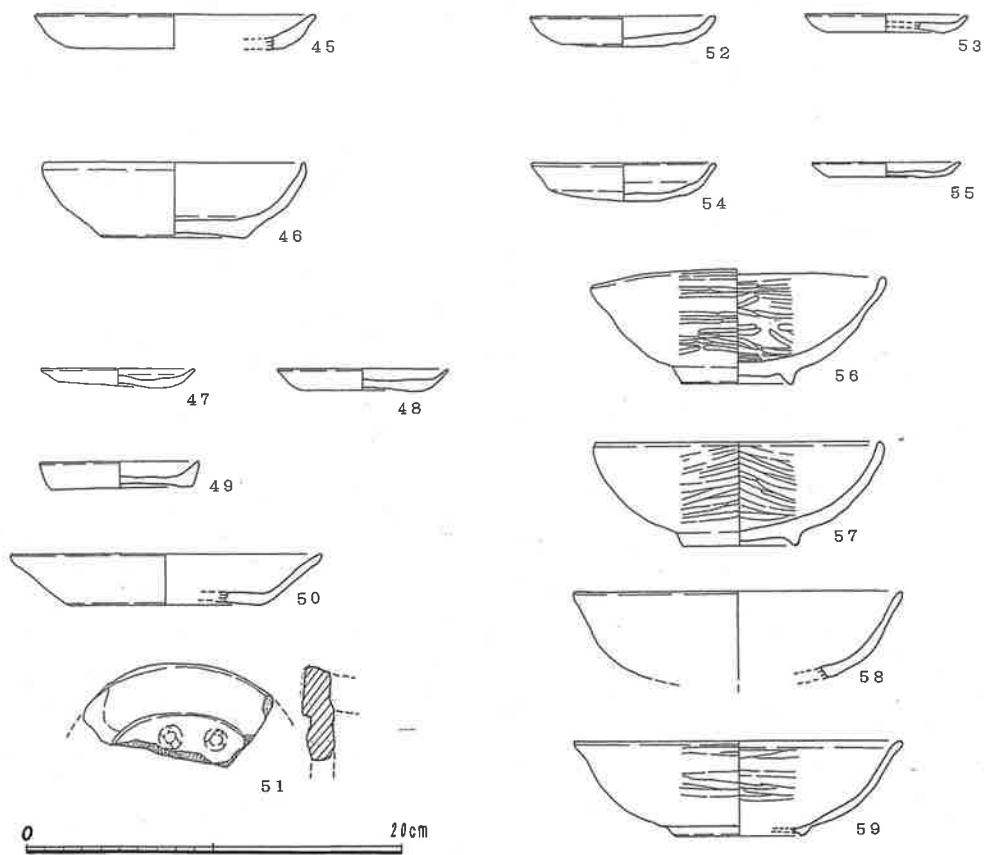
45は、1/5程度の遺存状況で復元口径15.0cm、器高1.8cmを測る。底部は欠失しており、器壁が厚い。口縁部はやや外湾しながら開く。207は、口縁端部上面の釉を剥ぎとる「口ハゲ」の白磁皿破片で、底部を欠失している。復元口径10.6cm、現存器高2.7cm。219は、白磁碗の口縁部破片で玉縁状を呈する。

SK-06は、SK-04南側で検出した不整形の土壌である。SK-05あるいはSK-07と区別して考えたが、それらとの切り合い関係は不明である。

SK-05及びSK-07からは実測可能な遺物の出土はみなかったが、SK-06からは青磁や白磁破片

甕。古墳時代の所産であり、混入とみられる。46 (Fig. 59) は土師器の坏で、約1/3が現存する。底部はやや上げ底となる。体部はやや外湾して外に開き、中位ほどで内湾しながら口縁部へと立ち上がる。復元口径13.8cm、底径7.4cm、器高4.0cmを測る。胎土は精良で、焼成良好。

201~202、208~210、214 (Fig. 60) は輸入陶磁器の破片である。201は、青磁碗の口縁部破片で、復元口径19.6cm、現存器高4.7cmを測る。内面の中位には、白粘土象嵌により2条線を施す。高麗青磁とみられる。202は、青磁碗の口縁部破片で外面に櫛描文様、内面に1条の沈線文が施される。208は、白磁皿の破片か。209は、高台付白磁碗で口縁部を欠失する。高台は無釉。210は白磁碗の高台破片で外面には部分的に釉が垂れる。214は、白



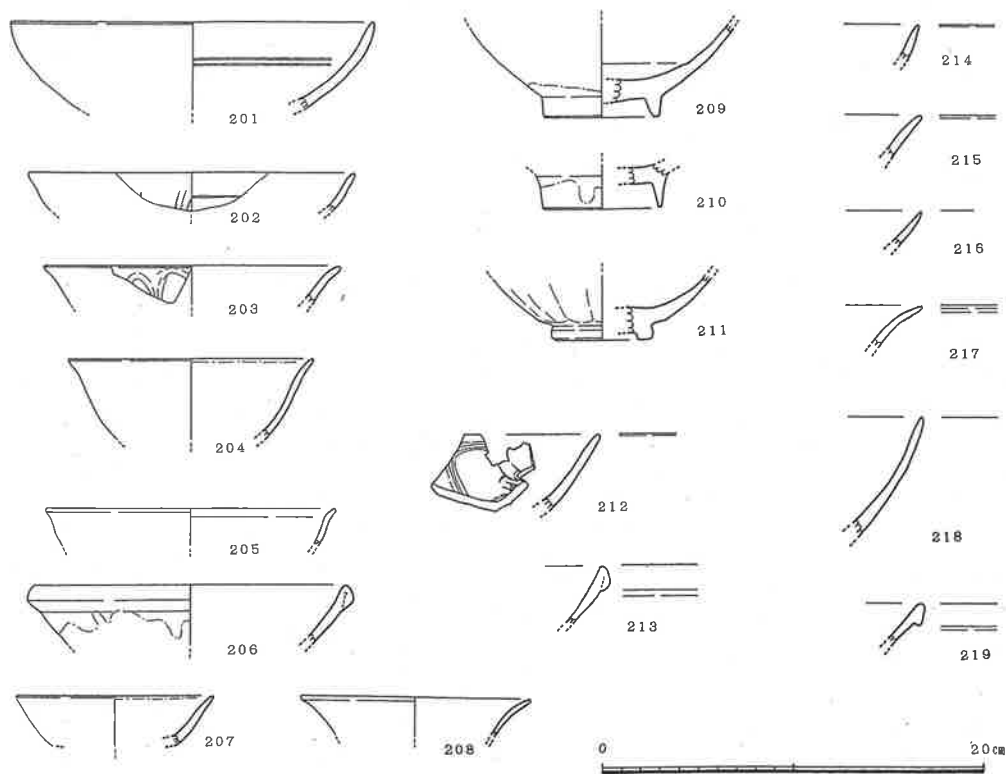
■ Fig. 59 B調査区出土土器実測図(1/4)

203、204、211、215 (Fig. 60) が出土した。

203は、青磁碗の口縁部破片である。復元口径16.0cm、現存器高2.1cmを測る。口縁端部は直線的に延びた体部から外方へ引き出す。外面体部には蓮弁文を施す。204は、白磁碗の口縁～体部破片である。いわゆる「口ハゲ」の口縁端部を呈し、内湾して立ち上がる体部から外方へ引き出される口縁端部へと続く。復元口径13.2cm、現存器高4.3cmを測り、釉色は暗乳白色を呈する。

211は、青磁の高台付碗の破片で、復元底径5.4cm、現存器高3.5cmを測る。高台は低く畳付にも釉がかかり、欠き取られていない。外面体部には蓮弁文が施される。釉色は明黄灰色を呈し、貫釉する。215は、青磁の口縁端部破片で211と同一固体である可能性が高い。口縁端部がやや外方へ引き出されるもので、釉色は211と同じ明黄灰色を呈する。外面には僅かだが蓮弁文が認められる。

SK-08は、SK-06の南側で検出した土壌で楠の木株によって攪乱されており、その全貌は不明であった。遺構全体の平面プランは長方形を呈するとみられるが、木株の北側部分を掘り下げたところ、底部部分には不整円形の窪みがあった。この土壌からは実測可能な遺物が4点出土した。205、216～218 (Fig. 60) がそうで、いずれも輸入陶磁器である。



■ Fig. 60 A-Ⅱ, B-I 調査区出土陶磁器実測図(1/4)

205は、青磁碗の口縁部の細片で、復元口径15.6cm、現存器高2.1cmを測る。口縁部は外方へ引き出し端部を丸くおさめる。釉色は淡黄灰色を呈し、貫入する。216は、白磁碗の口縁部細片で端部を鋭く引き出す。釉色は淡白褐色を呈する。217は、白磁皿の細片か。口縁端部は大きく外反し、端部は細く摘み出し、外側に小さな段を有する。暗乳白色の釉がかかる。218は、白磁碗の破片とみられる。釉はやや暗い白褐色を呈し、口縁部付近はやや乳白がかった色になる。

SK-09は、B-I 調査区南東で検出した半円形の土壌である。平面プランは円形とみられるが、半分は調査区外へ延びていく。土壌中には人頭大程度の石が多量に投げ込んであり、土器も若干出土している。実測し得たのは、212 (Fig. 60) のみである。

212は、青磁碗の口縁部～体部の細破片である。淡黄灰色の釉がかかり、貫入する。内面体部には片切彫で線文が描かれている。

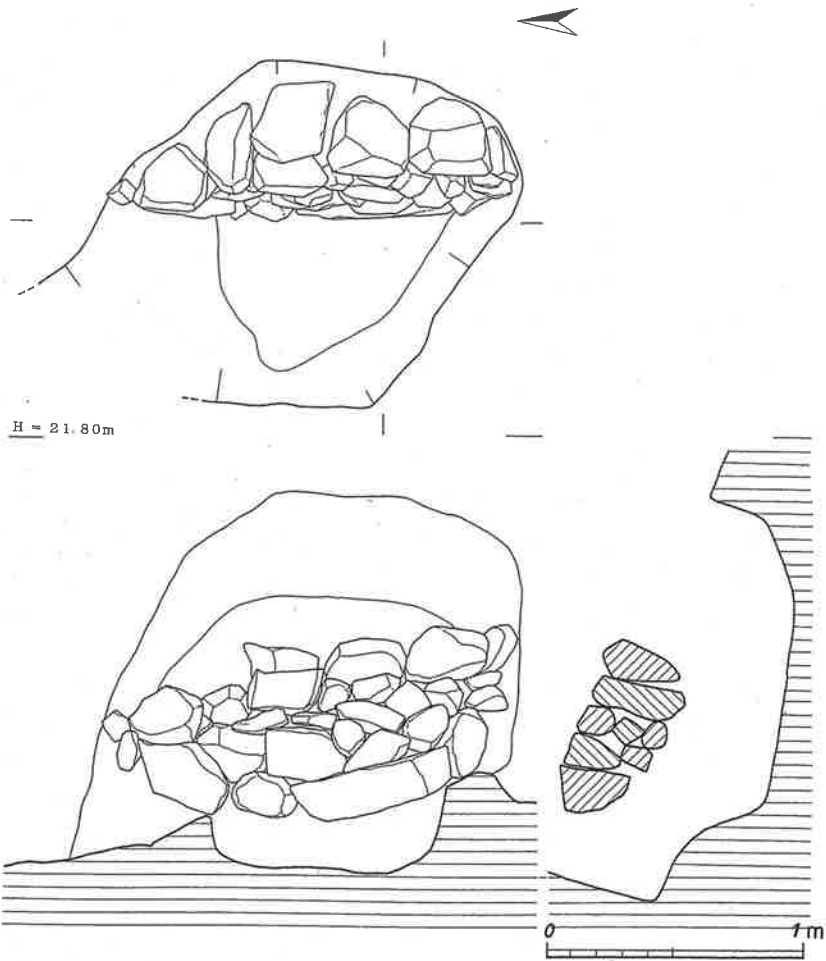
### ③ SK-41 (Fig. 61)

B-I 調査区とB-II 調査区を分ける崖面は調査前の現況から確認されていたが、単なる耕作のための開墾作業によってできた段落ちと認識していた。しかし、調査のための表土剥ぎ作業により、この崖面がかなり古い段階の時期から崖面として存在していたことが明らかになった。その大きな要因がこのSK-41の出土である。

この遺構はB-II 調査区北側の崖面に掘り込まれる形で検出された。平面プランは円形である

が、その直径部分を起点としてほぼ検出した崖面の斜面の角度に合わせて石を積み上げている。平面サイズが約 150cm × 150cm で、底から天井までの高さは約 160cm を測る。

石は乱積みであり、岩盤を掘り込んで作った空間と外とを遮断するためのものであると考えられる。しかしこの石積みの中からは、遺構の性格を知るための遺物は検出されなかった。



■ Fig. 61 SK-41遺構実測図(1/40)

一方、遺構検出作業のなかで北側や南側につながる付近の崖面下端よりいくつかの遺物が出土している。

出土遺物としては、51 (Fig. 59) の軒丸瓦の瓦当部破片及び234、235 (Fig. 64) の輸入陶磁器破片がある。51は、内区に珠文が施されている。220は、青磁皿で底部は欠失。口縁部はやや外反する。復元口径11.4cm、現存器高1.9cm。淡青白色の釉がかかる。235は、白磁碗の底部破片。高台の見込み部分は平高台に近い。高台から体部下は露胎で、釉色はやや暗い乳白色を呈する。

## (2) 掘立柱建物跡

### ① SB-01、SB-02、SB-03、SB-04 (Fig. 62、64)

この発掘調査のなかで掘立柱建物の柱跡（ピット）とみられる遺構は、B-II調査区で検出している。ピットはその他にC-III調査区などで検出しているが、こちらはどちらかといえば杭あ

るいは柵列的な性格のものである可能性が強い。

B-II調査区は標高19.8m前後に作られた平坦面である。耕作土下は風化した岩盤層で、ピットはこの岩盤に掘り込まれる形で検出した。ピット群は大きく分けて2つの地域に密集して検出された。1つは調査区の南側の平坦面である。これは明確に建物跡を復元することはできなかったが、図上において4つの建物を予想した(SB-01~04)。

SB-01は1間×1間(210cm×200cm)の方形プランを呈する。SB-02はSB-01と1つのピットを共用する形で検出した建物跡で1間×2間(300cm×320cm)を測る。SB-03はその2つの建物跡の北西側で検出したもので、2間×2間(280cm×300cm)のほぼ方形のプランである。SB-04は南西側の段落ち際で検出した1間×1間(200cm×220cm)のプランを有する建物跡である。

これらの建物跡について明確な時期を同定することは難しいが、これらのピットの一部からは細片であるが遺物が出土している。出土遺物は、主に中世期の所産である。

たとえば、P-19はSB-01を構成するピットである。このピットからは52(Fig.59)が出土している。これは瓦器皿の破片で、復元口径9.8cm、器高1.6cmを測る。糸切り底で外面をヘラ状工具でナデつける。

その他にもこの地域で検出したピットの中ではP-20~P-27から細片であるが遺物を検出している。しかし、図化でき得たのはP-25から出土した白磁碗の破片220(Fig.64)とP-26出土の222、そしてP-27出土の土師器皿53のみである。

220は、復元口径16.3cm、器高5.3cmを測る。体部は大きく開き口縁端部は横に摘み出す。釉色は乳白色で、体部下半から高台にかけては露胎。内面の見込み部分は輪積みのために輪状に釉を掻き取る。内面体部には小さな線文が2条巡る。222は、白磁碗で底部を欠失している。体部は直線的に開き、口縁端部は上方に摘み上げる。復元口径15.4cm、現存器高4.9cmを測る。釉色はやや暗い乳白色で、体部下半は露胎。内面見込み部分の上位に砂目跡が付着している。P-27出土の53は、復元口径8.6cm、器高0.9cmを測る。

#### ②SB-05, SB-06(Fig.62, 64)

B-II調査区の北側平坦面では、かなり集中してピットが検出されている。その中で、SK-41の全面に広がるピット群とその南側のピットを東西に延びた溝状遺構を境に区分して考えた。その結果、溝の南側ではSB-05及びSB-06を検出した。調査時点ではこの2つの建物跡を1つのものとして考えていた。しかし図上で再検討を加えた結果、柱間があまりにも不規則になりすぎるため、2間×2間の建物が2つ並んでいると考えたほうがより妥当だという判断に達した。

南側の建物跡SB-05は、2間×2間(450cm×500cm)のプランを持つ掘立柱建物跡である。そして、南側及び東側に塀あるいは柵列とみられるピットの配列を検出した。南側、東側共に3間の長さである。この建物を構成するピットP-28、P-30、P-33、P-37、及び柵列を構成するピットP-29などからは土師器や陶磁器の破片が出土している。

図化し得たのは、わずかにP-28から出土した227(Fig.64)だけである。227は白磁碗の口縁部破片で復元口径18.0cm、現存器高1.9cmを測る。体部は直線的に開くとみられる。口縁端部を横



Fig.62 B-II調査区遺構配置図(1/150)

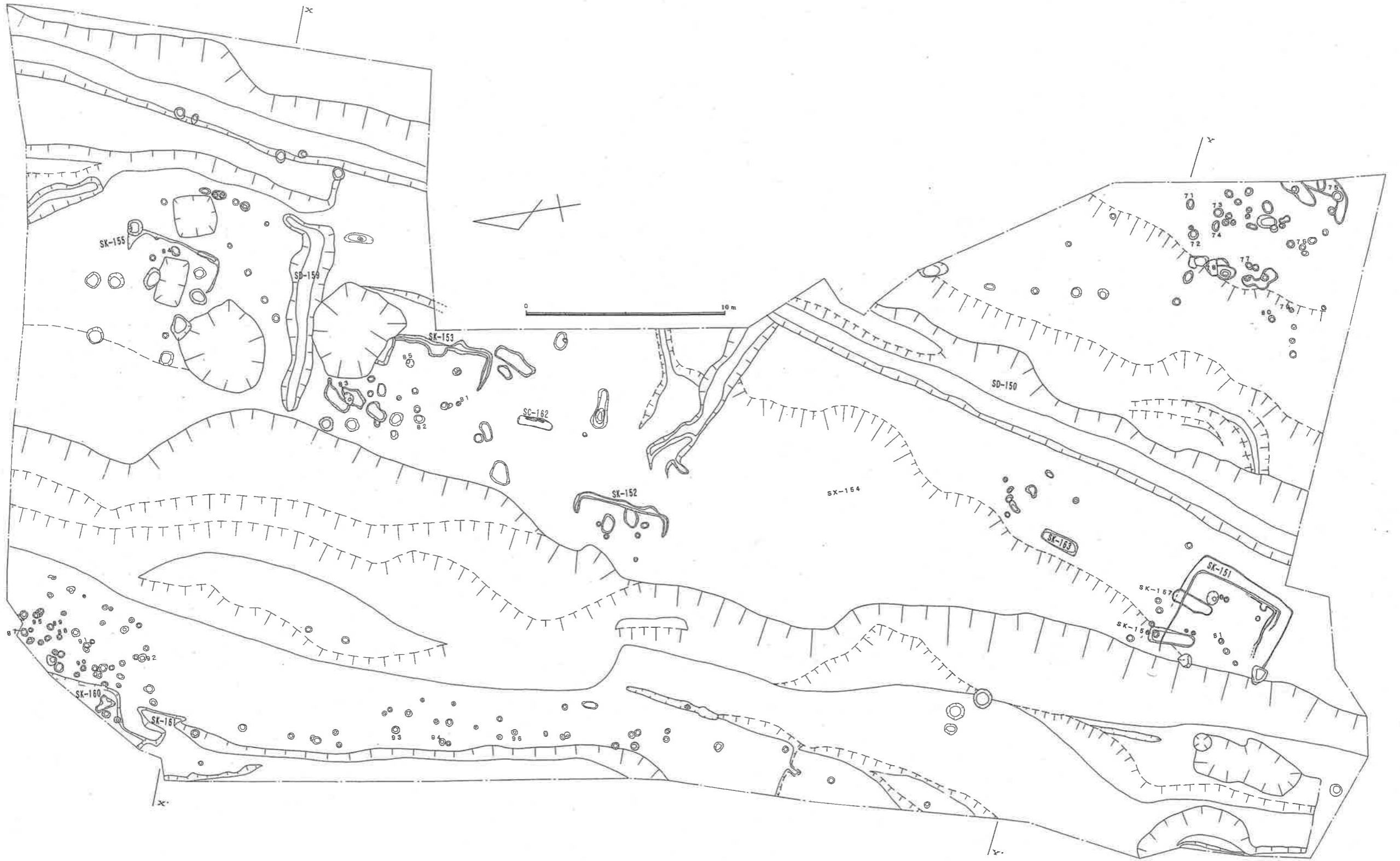
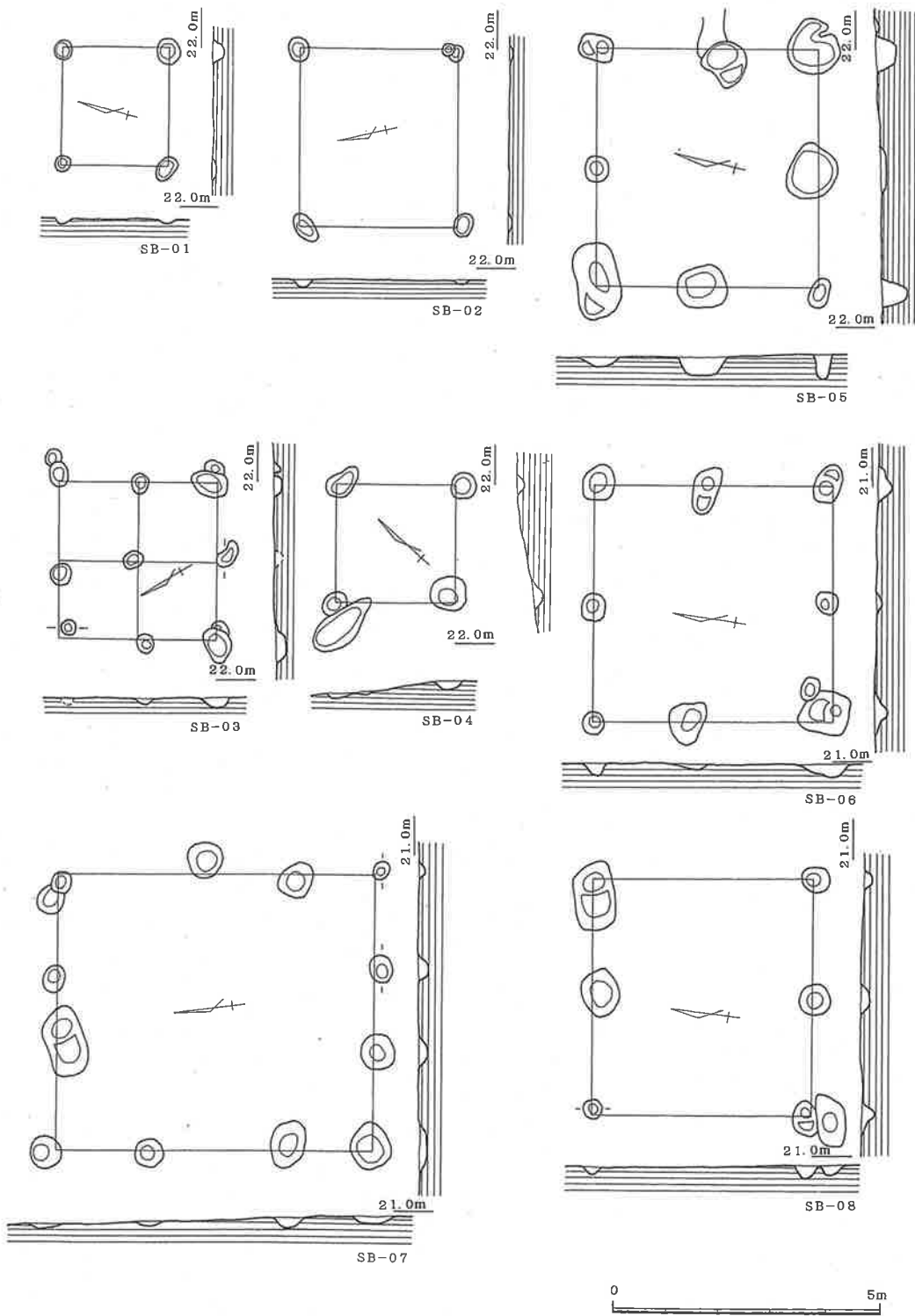


Fig.63 C調査区遺構配置図(1/150)



■ Fig. 64 掘立柱建物跡遺構実測図 (1/125)



に摘み出し、端部上面は若干外傾する。釉色は淡黄灰色を呈する。

SB-05の北側ではほぼ平行して検出されたSB-06は、2間×2間のプランを呈する。そのサイズは450cm×450cmを測る。この建物も東側及び北側に塀あるいは柵列とみられるピットを検出している。東側、北側共に3間の長さでカギ状に検出された。構成する8個のピットのうち7個から土師器、瓦器、輸入陶磁器細片等の遺物が出土している。柵列のピットP-48からも土師器破片が出土した。このなかで図化し得たのは、P-40から出土した224及び225(Fig.64)だけである。共に玉縁状の口縁部を有する白磁碗の破片である。224は、復元口径16.0cm、現存器高3.2cm。225は、復元口径17.2cm、現存器高3.4cmで体部中位下半部は露胎である。共に釉色は淡乳灰色を呈する。この2つの破片は、復元口径の数値は若干違うものの同一固体である可能性がある。

### ③SB-07, SB-08 (Fig.62, 64)

SB-05の北側に東西に延びた溝状遺構が検出されているが、この遺構からは全く遺物は出土していないため、その性格及び時期は不明である。この溝跡の北側であり、しかも崖面で検出したSK-41の真正面に掘立柱建物跡SB-07を検出した。またSB-07と重複する形で、しかもSB-05及びSB-06と同方向に建つSB-08も検出している。その北側ではピットは少なくなり、建物跡は確認できなかった。

SB-07は、東西方向が3間、南北方向の崖面に接した東側が2間、西側が3間という変則的な柱間の建物である。崖面に作られたSK-41との関連が考えられるが、確証はない。この建物を構成するピットは12個であるが、この中で土師器破片が出土しているのが3個である。図化し得たものはなかった。

SB-08は、東西方向が2間、南北方向が1間のプランを呈する建物跡。構成する6個のピットのなかで、土師器破片が出土したのは4個であったが、実測できるものはなかった。

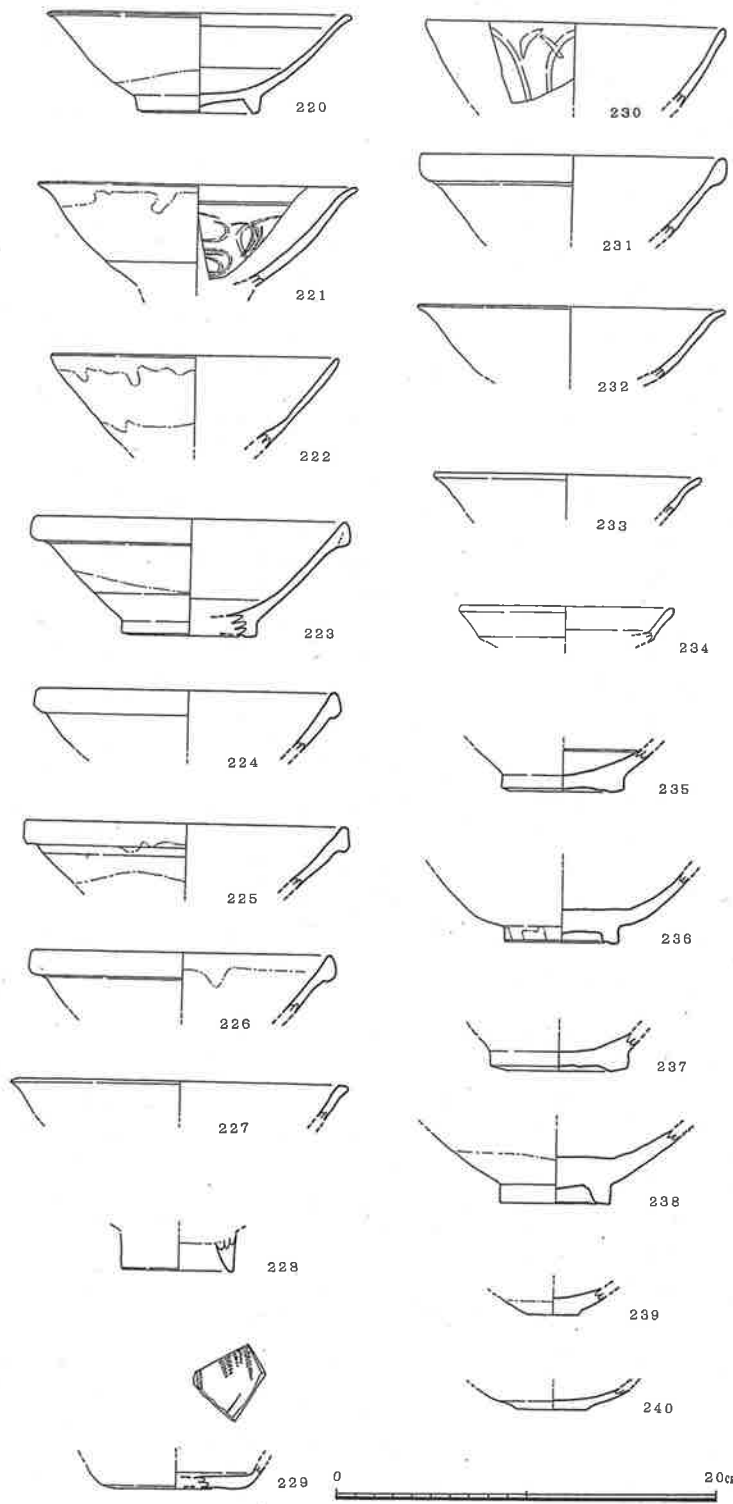
## (3) 柵列

### ①SA-01, SA-02, SA-03

B-I、B-II調査区のなかで検出した柵列はSB-05、SB-06に関連するもののほか、B-I調査区において4カ所検出している。簡易な柵などの施設と予想される。

B-II調査区において検出した柵列遺構SA-01、SA-02及びSA-03は、調査区西側の段落ち際で確認した整地層SX-35の掘り下げにより検出したものである。この整地層は平坦面の拡張を意図したものであると考えられるが、その土木作業の前段階において一段下がった平坦面が存在したことが確認された。その平坦面より2つの柵列が段落ちラインに平行した形で検出されている。

SA-01は、柱間にばらつきがあるが7間分を検出している。その柱間は最大4m、最小2mで全長は21mを測る。SA-02は、3間の柱間を検出した。それぞれのスパンはほぼ等しく約3.7mを測り、全長は11.1m。SA-03は、SA-02の南側で検出した2間の柵列。柱間はそれぞれ3.8mを測り、全長は7.6mである。それぞれの柵列の方向は若干ずれている。



■ Fig. 65 B-II調査区出土陶磁器実測図 (1/4)

(4) 溝跡

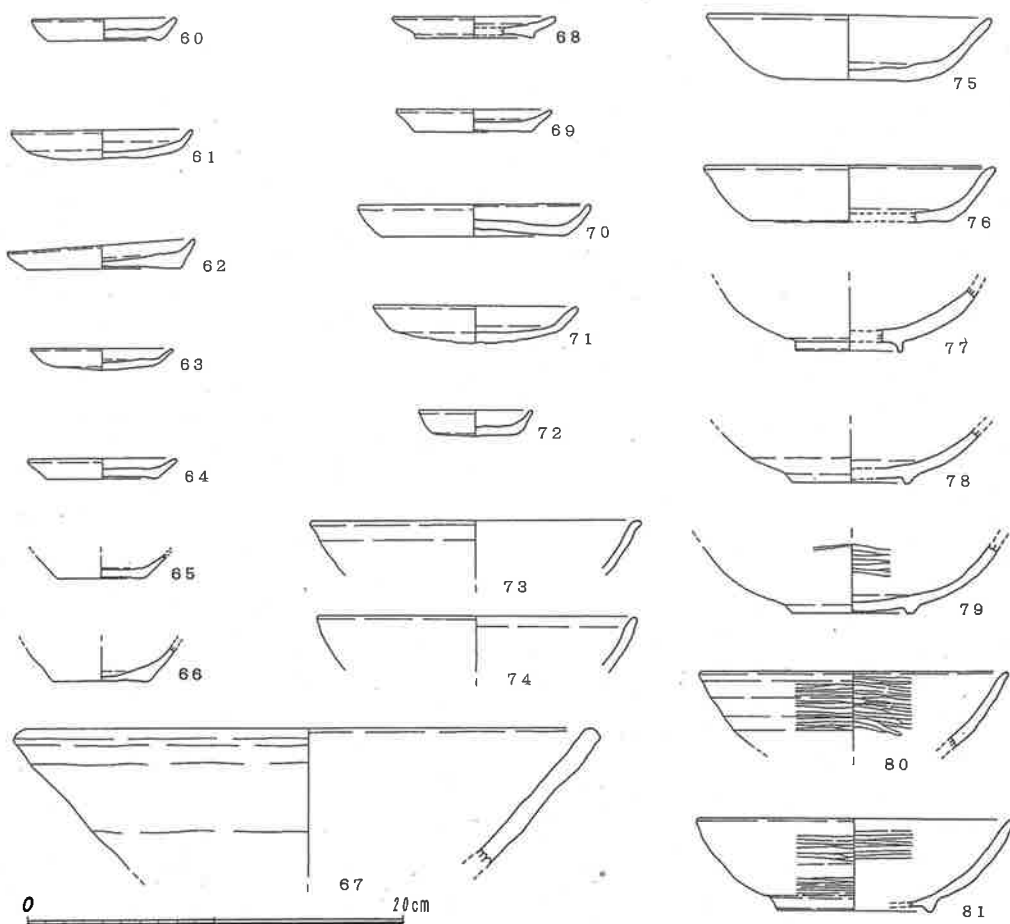
① SD-150 (Fig. 63)

SD-150は、C調査区で検出した溝跡である。C-I~II調査区にかけて崖面の落ち際に掘られた溝であり、溝の西側には平坦面が作られている。こうした状況から、このSD-150が大規模な土木事業に付随した施設であることが推測される。

C-I調査区ではその東側は崖面となり、上部には整地層が検出されている。一段上にも平坦面が形成されているのが確認された。

SD-150の遺存状態は良好ではなく、底部付近だけが残っていたに過ぎない。溝幅は250~400cmで、深さは20~50cmを測る。

このSD-150はC区でのみ検出しているが、B調査区においても段落ちが続く西側斜面でSX-37等溝状遺構を検出している。SD-150と比較して1m以上のレベル差があり、直接的な関連は確認できな

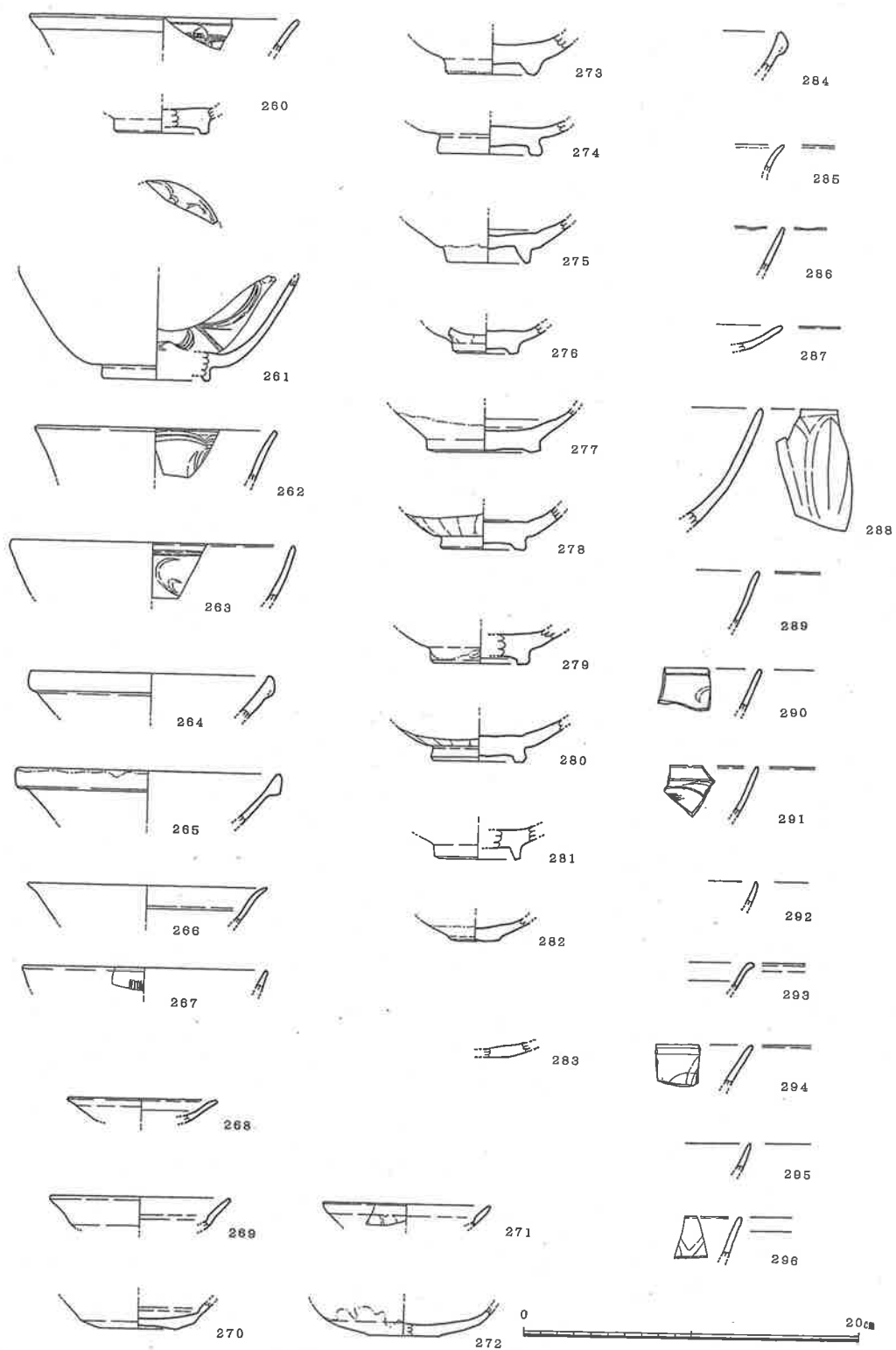


■ Fig. 66 S D-150出土土器実測図(1/4)

いが、B調査区の方へ延びていく可能性がある。

このSD-150より出土した遺物のなかで図化し得たのは、土師器及び瓦器60~81 (Fig. 66) と輸入陶磁器260~296 (Fig. 67) である。

60~66は、土師器皿である。60は、肥厚した体部を有し上げ底となる。61は、完形品で底部と体部の境が明瞭ではなく、なだらかに口縁部が立ち上がる。糸切り底で粗いナデ調整を行う。内面底部及び外面体部は粗いミガキを施している。胎土は精良で淡灰色を呈する。63は、器高差がある糸切り底を呈する皿で、底部と体部の境は明瞭。63は、丸味を帯びた底部で体部はやや外反して開く。器壁は薄く糸切り底。64は、糸切りの底部はやや上げ底となり、体部はやや外反して短く開く。65及び66は、口縁部を欠失する。65の底部はやや上げ底。67は、底部を欠失しているが鉢とみられる。体部は直線的に開く。68~70は、土師器皿。68は、底部と体部の境が段を有し、上げ底となる。底部は糸切りで、体部は大きく開く。69は、やや外反して開く体部を有し、底部との境が明瞭。70は、内湾ぎみに立ち上がる体部を持ち、底部は上げ底となる。71は、瓦器皿。



■ Fig. 67 S D-150出土陶磁器实测图(1/4)

底部は、糸切り底で板目圧痕が残る。丸みを帯びた底部で、やや肥厚している体部は外反して開く。72は、土師器皿で復元口径6.0cmと小さい。

73、74は、瓦器碗で共に体部下半を欠失している。73は、口縁端部は横に摘み出す。74は、体部がやや肥厚して内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は上方へ摘み上げる。75、76は土師器の坏。75は1/2ほど遺存しており、体部はやや外反しながら開く。76は、底部を欠失するが、体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は外方へ摘み出す。77～81は瓦器碗。77～79は体部上半部を欠失する。それぞれ高台は低く、体部は内湾しながら大きく開く。77、78は共に内外面をナデ調整している。79は内外面共に粗いヘラミガキを施す。80は、底部を欠失する。内外面共にヘラミガキを行う。81は、底部を欠失する。高台は低く断面三角を呈する。肥厚した体部は内湾ぎみに開く。内外面共に粗いヘラミガキ調整を行う。

SD-150出土の輸入陶磁器は細破片であるが、数多く出土している。その大部分が青磁、白磁の高台付碗あるいは皿類である。

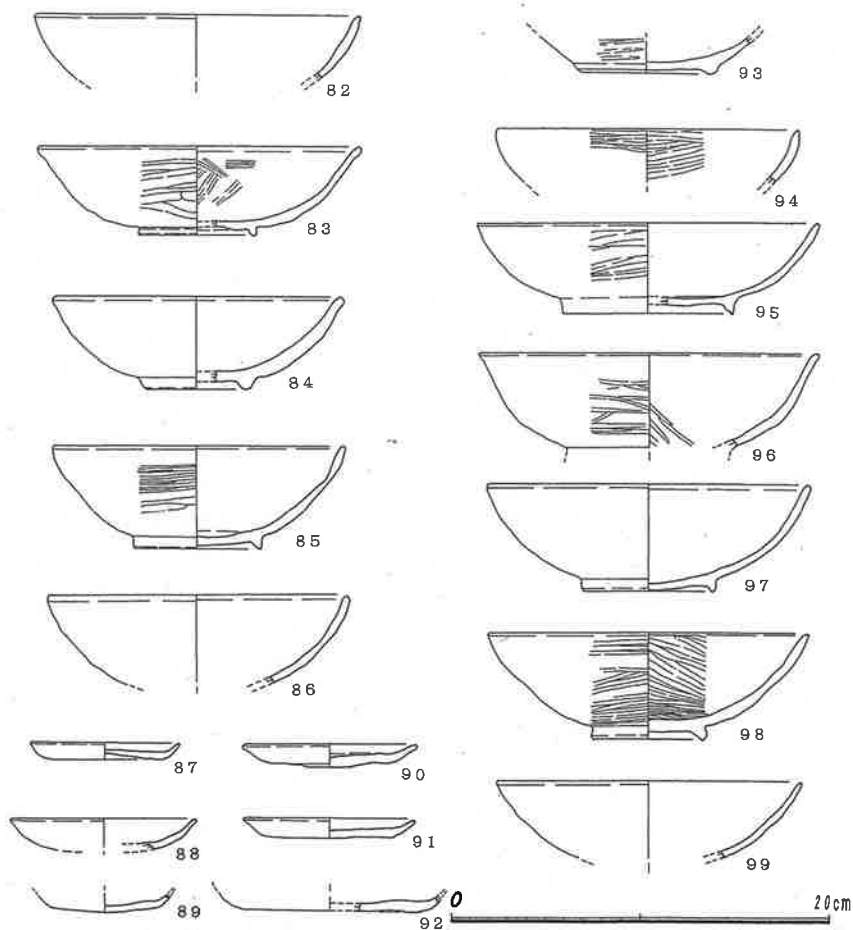
260～263は、青磁の高台付碗。260は、復元口径16.4cm。高台見込み部分は無釉。内面には片切彫の文様と楯描文を施す。口縁端部がわずかに外へ開き、体部との境に稜ができる。261は、内面に草花文が陰刻された青磁碗で、釉色は短淡黄灰色を呈する。262は、復元口径14.8cmで口縁端部が外反ぎみに立ち上がる。内面には片切彫の草花文が描かれる。263は、復元口径17.2cmを測る。内湾ぎみに立ち上がる体部を有し、内面に片切彫の文様を施す。

264、265は白磁碗で玉縁状の口縁部を有する。復元口径はそれぞれ14.8cm、16.2cm。266は、白磁碗の口縁部破片で、復元口径14.6cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外方へ引き出す。267は、青磁碗の口縁端部破片で、復元口径14.9cm。268は、白磁皿の破片で底部を欠失する。復元口径9.2cm。ゆるやかに開く体部で口縁端部は外反する。269～271は青磁皿の破片で、269は、復元口径11.0cmを測る。底部は欠失し、体部は底部より立ち上がり、すぐに外反しながら開く。270は、底部のみ現存している。体部下から底部にかけては露胎。271は、復元口径10.2cmで、口縁部はやや肥厚する。272は、白磁皿の体部下～底部破片で、底部は釉を掻き取る。

273～281は、青磁及び白磁の高台付碗の底部破片である。273は、高台畳付部分の釉を掻き取る青磁。274は、高台見込み及び畳付部分の釉を掻き取る青磁。275は、青磁碗で高台畳付の幅が小さく断面三角に近い高台を有し、施釉は体部下までで底部は露胎。276は、青磁碗で高台が小さい。断面四角形の高台の畳付の釉を掻き取る。外面の蓮弁文を施す。277は、白磁碗で高台見込みはあまり削り取らず、平高台に近い。施釉は体部下半部までで、底部は露胎となる。278は、高台畳付の釉を掻き取る。外面には蓮弁文が施される。279は、高台畳付の釉を掻き取る。280は外面に蓮弁文を施し、高台は露胎。281は、高台畳付が小さく露胎の青磁碗破片。

282は、白磁皿破片。わずかな平高台を作り出す。体部下半は露胎。283は青磁皿の底部破片。284は、白磁碗の口縁部破片で玉縁状を呈する。285～287は、白磁皿の破片。285は、口縁部は外反し、端部は「口ハゲ」となる。286は、口縁部はやや内湾して立ち上がり、輪花状を呈する。287は、体部が内湾ぎみで大きく開く。内面見込み部分は、輪状に釉が掻き取られるとみられる。

288~292は、青磁碗の体部破片である。288は内湾して立ち上がり、口縁部は上方に摘み上げる。外面は鎬蓮弁を陰刻する。289は、ほぼ直線的に立ち上がる体部で口縁部はやや膨らみを持って丸くおさめる。290は、内面に片切彫の文様を施す。291は、内面に片切彫と櫛描文様が施される。292は口縁端部が上方に摘み上げる。293は、白磁碗の口縁部破片で、端部を横に摘み出す。294は、



■ Fig. 68 C-I 調査区出土土器実測図(1/4)

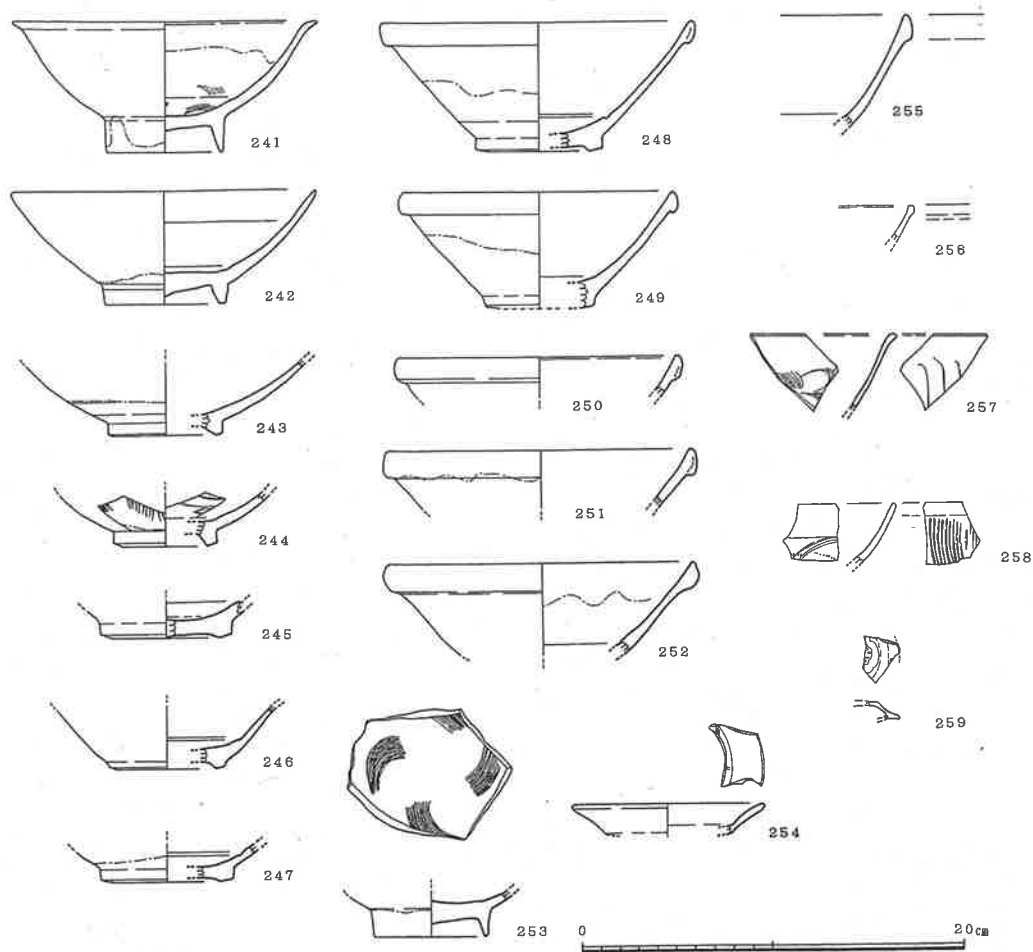
青磁碗破片で、内面には片切彫の文様が施される。295は、白磁碗の口縁破片。296は、青磁碗の口縁破片で、内面には文様が施される。

### (5) その他の遺構と遺物

#### ①遺物包含層 (整地層)

今回の調査のなかで、その取り扱いについて特に迷ったのが整地層である。当初はとにかく遺物包含層としての認識しかなかった。しかし、調査を進めていくに従い、中世の山城施設存在の可能性が浮上してきた。それに伴い、土木事業による整地層の存在も明らかになってきた。整地層を取り除かない時点での遺構の把握が中世山城施設の解明に不可欠であったが、それがうまくできなかったのは残念である。

中世期の遺物を包含する整地層とみられる遺構はB-II調査区及びC-I調査区で検出した。ひとつはSX-35である。この整地層はB-II調査区西側の段落ち部で確認したもので、その範

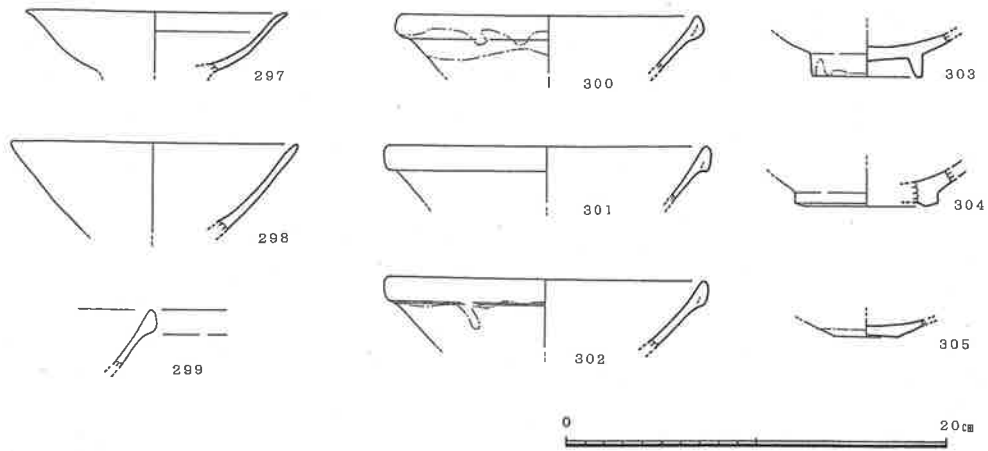


■ Fig. 69 B-Ⅱ調査区出土陶磁器実測図(1/4)

圃は40m×5mである。B-Ⅱ調査区の平坦面を広げる目的で行った整地であると考えられるが、この整地層を取り除くと、柵列や小溝の遺構を検出した。このことから、整地以前には一段掘り下げた平坦面があった可能性がある。

この整地層からは中世期の所産である遺物を中心に出土した。

図化し得た土師器及び瓦器は、54～59(Fig.59)である。54は、瓦器皿。底部はやや丸味を帯びている。糸切り放しで板目圧痕がある。55は、土師器皿で、底部はやや上げ底となる。56は完形の瓦器碗である。高台は断面三角形に近い。体部は丸味を持つて開き、口縁部下でいったん器壁が薄くなる。口縁部はやや厚く作り、端部は丸くおさめる。調整は全体的にナデで、その後粗くヘラミガキを施す。57～59も瓦器碗。57は、断面三角形の高台で、体部は内湾して立ち上がる。内外面共に粗いヘラミガキを施す。58は、底部を欠失する。体部は内湾して立ち上がり、中位からやや外反して口縁部へと続く。59は、低い断面三角形の高台を有し、体部は大きく開く。口縁部下から外反して開き、端部は丸くおさめる。調整は、内外面共に粗いヘラミガキが施される。

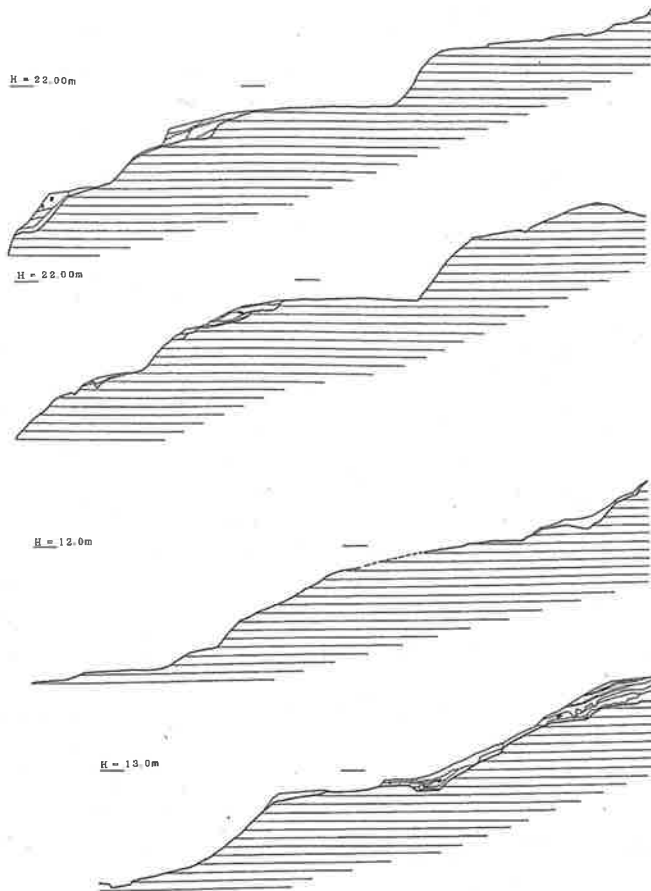


■ Fig. 70 C-I 調査区陶磁器実測図(1/4)

SX-35から出土した輸入陶磁器で、実測し得たのは241～250、253、255、256 (Fig.69)である。241～243は、白磁碗の破片である。241は高い高台を有し、体部は内湾して開く。口縁端部は横に摘み出す。高台端部から見込み部分は露胎で、内面見込みから体部中位にかけて櫛描文を施す。復元口径16.4、器高6.9、復元高台径6.3cmを測る。242は、断面台形の高台を有する。体部はやや内湾ぎみで直線的に立ち上がり、口縁端部はそのまま上方に摘み上げて丸くおさめる。高台部分は露胎。復元口径16.3、器高6.0、高台径6.4cm。243は、口縁部及び底部見込み部分を欠失する。やや低い高台で、体部は大きく開くとみられる。244は、青磁碗の底部破片。やや内傾する断面台形の高台を有し、外面は櫛描文、内面には片切彫りの文様が施される。復元高台径5.5cm。245は、白磁碗の底部破片。高台見込みの削り出しは小さく、復元高台径7.0cmを測る。246は、青磁碗破片で体部上位を欠失する。高台は低く、畳付きは釉を剥ぎ取る。内面見込みには、胎土目跡が輪状に不着する。247～249は白磁碗で、247は高台破片。248は、玉縁状の口縁を有し、体部はやや内湾ぎみで直線的に立ち上がる、体部中位から高台部分は露胎で、内面見込み部分と胎土の境部分には沈線が巡る。復元口径16.8、器高6.8、復元高台径6.8cm。249は、高台見込み部分を欠失する破片で、口縁部は玉縁状で、体部は内湾ぎみで直線的に立ち上がる。復元口径14.6、器高6.2、復元高台径5.8cmを測る。250は、白磁碗の玉縁状の口縁部破片で復元口径15.2cmを測る。253は白磁碗の底部破片で高い断面三角形の高台を有し、内面見込み部分には櫛描文を施す。高台径6.0cm。255及び256は白磁碗の口縁部破片で、255は玉縁状の口縁部を有する。256は、口縁端部を丸くおさめる。

この他、整地層として確認できたのはC-I 調査区で検出した遺物包含層である。この調査区の平坦面の東側には南北方向にSD-150が走り、そこから東側は崖面になっている。その上の平坦面部分が一部検出されている。この包含層の土層観察を行った結果、黒褐色粘質土と赤褐色バイラン土がそれぞれ2～5cmの互層となって堆積していることが分かった。この整地層の黒褐色粘質土より土師器、瓦器及び輸入陶磁器破片が出土している。





■ Fig. 71 地形断面図(1/450)

他は土師器皿。87は、上げ底の底部で糸切り放し。板目圧痕がある。体部は短く摘み上げる。88は、底部を欠失するが、やや丸くなり体部との境が明瞭ではないとみられる。89は、口縁部を欠失する。90は、糸切り放しで板目圧痕を持つ底部を有し、体部は横へ開く。91は、ほぼ完形の皿で底部は糸切り放しで板目圧痕がある。92は、口縁部が欠失している。底部は糸切り放し。

93~96は瓦器碗。93は口縁部が欠失している。低い断面台形の高台を有しており、内外面共に粗いヘラミガキを施す。94は底部を欠失し、肥厚した口縁部を呈する。95は、断面三角径の高台を持ち、体部は開きながら内湾して立ち上がる。口縁部はやや肥厚し端部を丸くおさめる。調整は内外面共に粗いヘラミガキを施す。96は、底部を欠失している。横に開く体部は中位でやや立ち上がり、口縁部は緩やかに外反して端部を横に摘み出す。

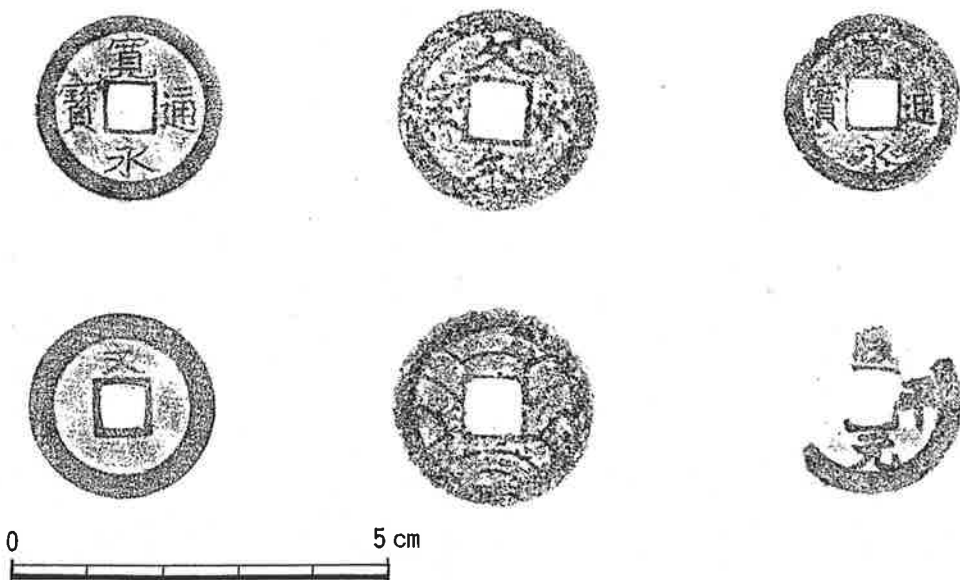
97は、土師器碗で内面を燻したいわゆる「黒色土器A類」である。低い高台を有し体部は内湾しながら大きく開く。98は、瓦器碗。外傾した高台を有し、器壁が厚い体部は中位でやや薄くなり肥厚した口縁へ続く。99は、瓦器碗で底部が欠失している。体部は内湾して開き、器壁は薄い。

C-I調査区で検出した整地層より出土した輸入陶磁器で図化し得たのは、297~305(Fig.70)である。305を除いて他はすべて白磁碗の破片である。297は、底部を欠失している。体部は内湾し

図化し得た土師器、瓦器は82~99(Fig.68)である。

82~86は瓦器碗である。82は、底部を欠失し、体部上位はやや肥厚する。83は、低く断面四角の高台を有し、体部は高台より横に開き緩やかに立ち上がる。口縁端部は外方に摘み出して丸くおさめる。内面はナデ、外面は粗いヘラミガキを施す。84は、器壁が厚い瓦器碗で、高台は断面台形を呈し、体部は内湾して開く。85は、断面三角形の高台を有し、体部上位でやや器壁が薄くなり、やや肥厚した口縁部へと続く。器面の調整はナデ後粗いヘラミガキを行う。86は、底部を欠失している。体部は内湾して立ち上がり、口縁部が若干肥厚し、端部は丸くおさめる。

87~92は皿。88が瓦器皿で、



■ Fig.72 古銭拓本(1/1)

ながら開き、口縁端部は外反して横に摘み出す。復元口径14.0cmを測る。298も底部を欠失している。体部は直線的に開き、口縁部はやや肥厚し端部は丸くおさめる。復元口径は15.4cmを測る。

299～302は玉縁状口縁を有する碗の破片。300は、復元口径16.2cmを測る。301は、やや口縁部外面が平坦な作りとなる玉縁状を呈し、復元口径17.5cmを測る。302は、復元口径17.3cmを測る。

303～305は底部破片。303は、断面台形の高台を有する。304は、低い高台破片。305は、皿の底部破片である。

### ②SX-37, SX-38

SX-35の下方やや北側部分からは、溝状の遺構になるとみられるが西側部分が削平を受けており全体像が不明のSX-37を検出したが、この部分の覆土からも中世期の所産とみられる遺物が出土している。そのなかで図化し得たのは、251、254、257、258 (Fig.69)である。251は、玉縁状の口縁部を有する白磁碗の破片。復元口径16.2cmを測る。254は、青磁皿の破片。体部は外反して開き、端部は丸くおさめる。257は白磁碗の口縁～体部破片で、口縁部は横に摘み出す。内外面に櫛描文を施す。258は、青磁碗の口縁破片で、口縁端部は丸くおさめる。内外面に櫛描文様を施している。その他、SX-37の南側で検出した半円形を呈するSX-38から出土した玉縁状の口縁部を有する白磁碗の破片252がある。

### ③遺構検出時

その他、遺構検出時に出土した遺物がある。

B-II調査区のSK-41全面周辺では柱穴を多く検出しているが、その遺構検出時にも輸入陶磁器が出土した。そのなかで図化し得たものに230～240 (Fig.65)がある。

# 佐賀県牛津町八幡山遺跡出土の弥生時代人骨

分部 哲秋\*、佐伯 和信\*、長島 聖司\*

## はじめに

佐賀県小城郡牛津町大字下砥川に所在する八幡山遺跡は、1992年（平成4年）の4月から12月にかけて国道34号の拡幅事業に伴い牛津町教育委員会によって発掘調査され、その際甕棺1基より人骨が検出された。

佐賀平野の甕棺墓から出土する弥生人骨は、1954年に東脊振村三津遺跡出土人骨の報告<sup>1)</sup>がされて以降、近年では九州横断道建設等に伴い大規模な埋葬遺跡の発掘調査が相次ぎ、人骨資料も相当数追加されている。三津遺跡出土弥生人骨は山口県土井ヶ浜遺跡出土弥生人骨<sup>2,3)</sup>と共に故金関丈夫博士によるいわゆる『弥生人渡來說』<sup>4,5)</sup>の基礎資料となった人骨であるが、その後追加された資料も概ね高顔、高身長の特徴を認めることから、近年になってようやく甕棺から出土した人骨を渡来系の弥生人とする位置付けが定着してきた。しかしながら、甕棺出土人骨の大部分は神埼郡内の遺跡に集中しており、境界地域の甕棺埋葬遺跡から出土した人骨の形質については分析されていないのが現状である。

八幡山遺跡は、佐賀平野における甕棺出土遺跡の中では最も東<sup>6)</sup>に位置しており、これまでに甕棺から出土している弥生人骨や西北九州地域から出土する縄文系弥生人骨<sup>9)</sup>と比べてどのような特徴が見られるのか興味もたれ、また、今後の研究上貴重な資料の一つになると考えられるので報告しておきたい。

## 資料・方法

本遺跡は、図1に示しているように沖積平野に張出した低位丘陵の南端に位置し、この丘陵の東には有明海に注いでいる牛津川が流れている。発掘調査では弥生、古墳、中世期の各遺構及び遺物の他に合計36基の甕棺が検出されたが、そのうちS J-25号甕棺のみに人骨が残存していた。この人骨は別稿の考古学所見に述べられているように、甕棺の型式から弥生時代後期前葉に属している。

計測はMartin-Saller(1957)<sup>7)</sup>の方法で行ったが、脛骨の横径については森本にならい、オリビエの方法を用いた。また、比較資料としては、佐賀平野の甕棺から出土した人骨例として朝日北<sup>8)</sup>、二塚山弥生人<sup>9)</sup>、西北九州弥生人の例として佐賀県呼子町出土の大友弥生人<sup>10)</sup>、縄文時代の例としては津雲縄文人を用いた。<sup>11)</sup>

## 所 見

本人骨の残存部は、顔面頭蓋の一部、左側大腿骨および右・左側脛骨である。計測値が得られた項目は少なく、大腿骨と脛骨の計測結果は、表1、2の比較表に掲げている値がすべてである。

\*長崎大学医学部解剖学第二教室

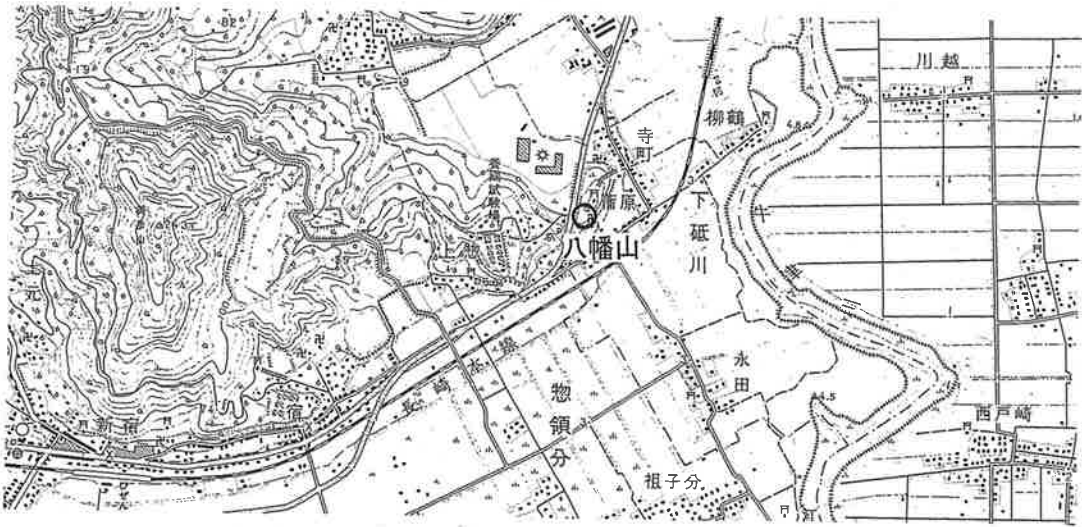


Fig. 1 遺跡の位置

S J-25号人骨 (男性、熟年)

性別については、大腿骨と脛骨の骨幹の太さ、大腿骨下端の大きさおよび筋付着部の形状から男性と判断した。年齢は通常恥骨結合面の形態、胸椎および腰椎前縁の骨増殖の程度、頭蓋の縫合の閉鎖状態などから総合的に判断されるが、本人骨の場合はそれらが残存していないので、歯の咬耗の程度から推定して熟年(40~60歳未満)とした。

2. 頭蓋

頭蓋の骨で残存しているのは、右上顎骨の歯槽突起の一部と歯のみである。残存した歯のうち形を留めているのは歯式で示している4歯で、上顎のものは釘植している。咬耗の程度はBrocaの2度で、各咬頭は平坦である。

// // // P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> // // //		// // // // // // // // //	( // : 不明 )
// M <sub>2</sub> // // // // // // //		// // // // // // // // //	

3. 四肢骨

大腿骨は上部が腐朽しており、この部の形態は不明であるが、骨幹後面で筋が付着する粗線の発達は悪く、柱状形成の像は全く認められない。

計測値について表1で比較を行ってみると、先ず、これまでに報告されている甕棺出土の弥生人(朝日北、二塚山)は、縄文人(津雲)や西北九州出土弥生人(大友)に比べて、骨幹の周径がひとまわり大きい。また、骨幹の矢状径(前後径)と横径の比から求められる断面示数は、両者に比べて小さい値を示し、横断面形は円形に近い形状を呈する。本人骨の計測値は骨体中央周が86mmで、大友弥生人および津雲縄文人同様に骨幹は細い。中央矢状径は比較群よりは小さく、中央横径は特に大友弥生人および津雲縄文人よりも大きい。したがって、中央断面示数は93.1と比較群の中では最小で、特に大友弥生人および津雲縄文人との差は大きく、骨幹の横断面形は現代的である。

Table 1 大腿骨計測値 (男性、右、mm)

	八幡山		朝日北		二塚山		大友		津雲	
	SJ-25									
	(左)	n	M	n	M	n	M	n	M	
6. 骨体中央矢状径	27	12	29.3	25	30.4	41	28.9	19	29.3	
7. 骨体中央横径	29	14	27.5	26	28.1	41	26.1	19	25.5	
8. 骨体中央周	86	12	90.0	25	91.8	41	87.2	19	86.8	
6/7 骨体中央断面示数	93.1	12	105.6	25	108.7	41	111.7	19	114.6	

Table 2 脛骨計測値 (男性、右、mm)

	八幡山		朝日北		二塚山		大友		津雲	
	SJ-25									
	(左)	n	M	n	M	n	M	n	M	
8. 中央最大径	28	12	30.8	20	31.0	35	31.3	19	32.1*	
8a. 栄養孔位最大径	34	12	34.8	17	35.4	30	34.6	18	35.4*	
9. 中央横径	22	12	21.9	20	22.5	38	21.3	19	19.6	
9a. 栄養孔位横径	26	12	23.7	16	25.0	32	23.3	18	21.9	
10. 骨体周	77	12	83.1	20	84.2	34	82.9	19	83.8	
10a. 栄養孔位周	93	12	93.0	16	95.8	30	92.0	18	92.2	
9/8 中央断面示数	78.6	12	71.1	20	72.7	34	68.0	19	61.5	
9a/8a 栄養孔位断面示数	76.5	12	68.2	16	70.9	30	67.2	18	62.2	

\*：中央・栄養孔位矢状径

脛骨の計測値は表2に示しているが、これまでの甕棺出土の弥生人と縄文人、西北九州出土弥生人間の比較では、栄養孔位での骨幹の周径において甕棺出土の弥生人の方がやや大きいもの大差はない。骨幹の横径と最大径（前後径）の比から求められる断面示数は、縄文人は非常に小さい値を示して、強い扁平性が認められることが特徴である。

本人骨の骨幹の周径については、中央最大径が全比較群よりも小さいために、中央位の周径は77mmとかなり小さく、骨幹は細い。また、中央および栄養孔位断面示数はそれぞれ78.6、76.5となり、津雲縄文人の示数値はもとより朝日北、二塚山両弥生人よりもかなり大きい値を示し、骨幹に扁平性は全く認められない。

## 要 約

佐賀県小城郡牛津町大字下砥川に所在する八幡山遺跡が、1992年（平成4年）牛津町教育委員会によって発掘調査され、その際甕棺1基より人骨が検出された。この遺跡は現在までのところ佐賀平野において甕棺人骨を出土している遺跡の中では最も東に位置しており、出土人骨の形質

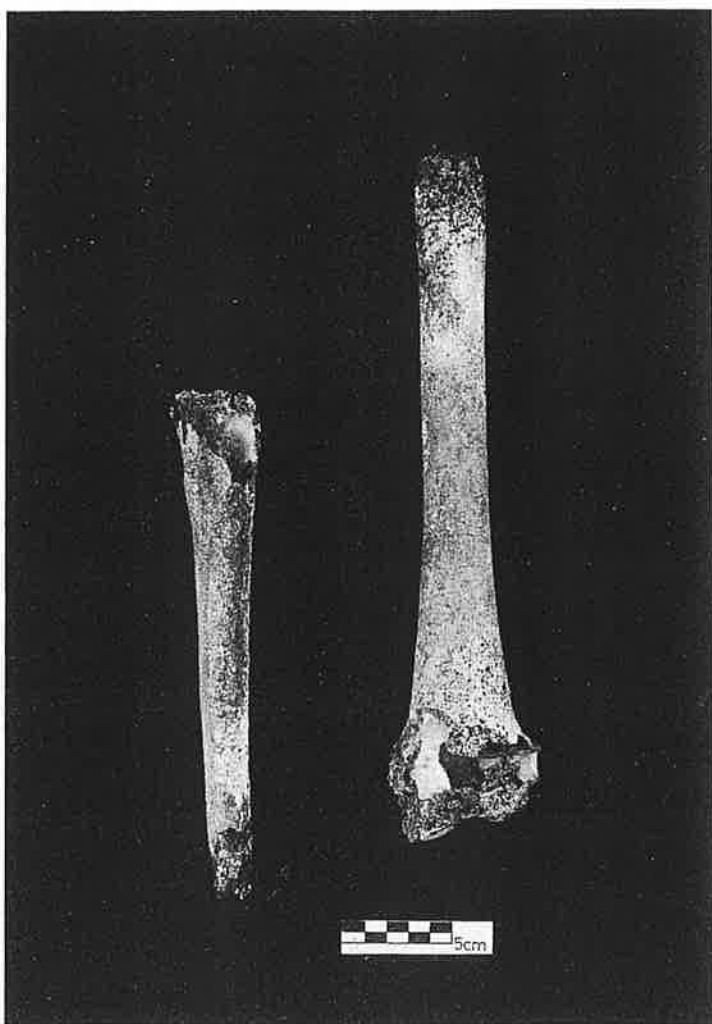
が従来の甕棺出土弥生人や西北九州地域出土の弥生人とどのような関係にあるのかに興味をもたれた。人骨についての人類学的観察と計測の結果を要約すると次のとおりである。

1. 人骨はS J-25号甕棺から検出され、右側上顎骨の一部、歯、左側大腿骨および右・左側脛骨が残存する。年齢および性別は熟年男性と推定される。
2. 大腿骨および脛骨の骨幹は、従来の甕棺出土弥生人骨よりも細い。
3. 大腿骨の粗線の発達が悪く、柱状形成の像は認められない。
4. 脛骨の中央および栄養孔位断面示数はそれぞれ78.6 (左)、76.5 (左) と大きい値を示し、骨幹に扁平性は認められない。

以上のように、本人骨の大腿骨および脛骨骨幹の形態は、縄文人および西北九州弥生人と対照をなすもので、これまでに佐賀平野の甕棺から出土している弥生人骨に似た特徴を示している。<稿を終えるにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた佐賀県牛津町教育委員会の諸先生方に深謝いたします>

## 参考文献

1. 牛島陽一, 1954: 佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究、人類学研究, 1, 320-303
2. 金関丈夫, 永井昌文, 佐野一, 1960: 山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の弥生式時代人頭骨について、人類学研究, 1 [附録], 1-30
3. 財津博之, 1956: 山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生前期人骨の四肢長骨に就いて、人類学研究, 3, 320-349
4. 金関丈夫, 1955: 弥生人種の問題, 日本考古学講座, 4, 河出書房, 238-252.
5. 金関丈夫, 1959: 弥生時代の日本人, 日本の医学—第15回日本医学会総会学術集会記録—, 1, 167-174.
6. 内藤芳篤, 1971: 西北九州出土の弥生時代人骨, 人類学雑誌79, 236-248.
7. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart, 429-597.
8. 松下孝幸, 分部哲秋, 佐伯和信, 山下さゆり, 小山田常一, 1992: 佐賀県神埼町朝日北遺跡出土の人骨、佐賀県文化財調査報告書, 110, 418-504.
9. 松下孝幸, 1979: 二塚山遺跡出土の弥生時代人骨、佐賀県文化財調査報告書, 46, 242-255.
10. 松下孝幸, 1981: 大友遺跡出土の弥生時代人骨、佐賀県呼子町文化財調査報告書, 1, 223-253.
11. 清野謙次, 平井隆, 1928: 津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第4部 下肢骨の研究, 人類学雑誌, 43 (4 附, 5 附),



S J-25号人骨(男性)下肢骨前面

## VI. おわりに

牛津町西部、江北町境に所在する低丘陵上には、「八幡山遺跡」を始め「丸石塚遺跡」あるいは「赤佐古墳群」が点在する。また、隣接する江北町側には「宿浦遺跡」が確認されている。これらの遺跡は、それぞれが関連性を持ちながら存在していることが、最近のいくつかの発掘調査によって明らかにされつつあるといえる。

今回報告してきた「八幡山遺跡」の発掘調査の成果は、そうした周辺遺跡との関連性を考える上で特に重要な資料を提供したことは明らかである。ここでもう一度、検出した各時代の遺構・遺物について特徴をまとめていきたい。

### 1. 弥生時代の墓地について

八幡山遺跡A-Ⅱ～B-Ⅱ調査区では弥生時代の墓地を確認した。その構成は甕棺墓36、土壙墓37、箱式石棺墓15である。この墓群は丘陵の南側斜面に造営されているといえるが、特にA-Ⅱ調査区のわずか15m×20mの範囲内に甕棺墓29+土壙墓29+箱式石棺墓11が埋葬されている。

これらの墓群のなかで、甕棺墓の切り合い関係を明確に把握してこの遺跡内の編年的な検討作業を行うことはできなかった。また、埋葬形態の違いによる埋葬時期の違いについても墓域の切り合い関係を明確にできない以上、言及できないが、調査時の観察をベースにしていえば甕棺墓が他の土壙墓や石棺墓から切られることはあっても、それらを切るケースはなかったと言える。また、土壙墓と石棺の関連性についてもあまり切り合い関係を持たないため、結論づけられないが、たとえばSC-75とSK-94、SC-82とSK-81の関係からいうと石棺墓が土壙墓を切っていることが分かり、土壙墓が石棺墓より先行して造営された可能性を指摘することができる。

これらのことから、埋葬形態としては原則的に「甕棺墓→土壙墓→石棺墓」という移行が想定できる。

#### ①甕棺墓について

この調査で検出した甕棺墓のなかで、成人棺とみられる大型棺は主に標高的に高いB-Ⅱ調査区で検出し、B-Ⅱ調査区で検出された甕棺29基の中ではSJ-52、54、61、89の4基だけである。また、一方小型あるいは中型棺はA-Ⅱ調査区に多く分布することになる。

出土した甕棺の形式から検討すると、これらの甕棺墓は弥生時代中期中葉及び後期前葉に造営されたと考えられる。図化し得た甕棺は、時期的には次のように2期に区分される。<sup>(注1)</sup>

I期（中期中葉）	成人棺……………SJ-22、SJ-24、SJ-27、SJ-28、SJ-52、SJ-54、SJ-61、SJ-89
	中形棺……………SJ-23、SJ-62、SJ-110、SJ-111
	小形棺……………SJ-56、SJ-59、SJ-70、SJ-101、SJ-113、SJ-114、SJ-118
II期（後期前葉）	成人棺……………SJ-25、SJ-34
	小形棺……………SJ-33

この間の中期後葉の甕棺は確認していない。このことは、中期後葉の時期にこの墓群を管理し



た集落が何らかの理由で途絶えたか、あるいは拠点を移動したことを意味しているといえる。また、Ⅱ期の甕棺はⅠ期に比較して極端に少なくなっている。甕棺という埋葬形態を捨てて土壙墓へと移行する段階であることを意味しているのだろうか。

## ②土壙墓について

土壙墓は、石蓋土壙墓を含めて37基検出した。その大部分の36基がA～B調査区で出土している。その中でB-Ⅱ調査区は5基のみで、残りの31基はA-Ⅱ調査区で確認された。しかもそのうちの29基は、戦国時代に築かれた山城的戦略拠点の施設である縦濠、横濠とみられるSX-49によって分断された調査区の西側に集中している。

これらの土壙墓の造営時期については、副葬品もなく覆土中に混じる遺物も少ないものがほとんどであり、言及できない。しかし、土壙墓と甕棺の切り合い関係からいうと、切り合い関係を有する甕棺は中期中葉の所産である。このことから、少なくとも中期後葉以降に造営されたものであるといえる。ただ、この墓地では甕棺が埋葬される最終段階が後期前葉と想定されることから、土壙墓という埋葬形態へ移行するのは後期前葉以降（～後期中葉）であろうと考える。

土壙墓のなかで副葬品を出土したのは2基だけである。共にA-Ⅱ調査区の土壙墓で、鉄斧を副葬していたSK-81と鉄剣を副葬したK-86である。

## ③箱式石棺墓について

箱式石棺墓はA-Ⅱ調査区で11基と集中的に検出している。そのなかで、SC-75、78、79、89の4基については蓋石がそのまま遺存しており、棺内を攪乱されていなかった。そのなかで、副葬品を出土したのはSC-75とSC-78である。SC-75には管玉2個と鉄製鍬1本が副葬されていた。鍬はほぼ完形に近く、遺存長が24.6cmある。これまで出土した鍬のなかで最長クラスのものであろう。SC-78からは管玉1個が出土している。

これらの石棺群は前述したように、他の遺構と切り合い関係があるものは、そのほとんどが他の遺構（甕棺、土壙墓）を切っており、この墓地における埋葬形態の最終段階であることを物語っている。従って、造営の開始時期の上限は後期中葉を上がらないといえる。

また、この墓地の廃絶時期について考えてみると、この墓地を所有する集落についての検討が不可欠である。その集落はこの遺跡の西側に広がる丘陵上に所在していたと考えられる。そのことは最近の丸石塚遺跡や宿浦遺跡の発掘調査でも住居跡や建物跡等を確認している<sup>(注2)</sup>。集落の存在時期については、まだ整理の段階であるが、弥生中期中葉～後期終末期の幅で断続的に営まれていたと考えられ、墓地廃絶の時期も終末期を想定できるだろう。

## 2. 中世期の山城的施設跡について

今回の発掘調査は、牛津町における初めての弥生時代の墓地の検出という重要な成果を挙げたが、もうひとつ大きな成果は大規模な土木事業を伴う中世期の山城的施設の存在の可能性が浮き掘りにされたことである。

従来より、この島状になる丘陵陵突端部はその頂部に八幡神社下宮が鎮座し、いくつかの伝聞

が残っている。たとえば、牛津町史は内砥川に所在する八幡神社（上官）の由来について、「太宰管内誌」から引用して「建武元年（1334年）、下総より小城へ下向、牛頭城を築いて居住した千葉胤貞が鎌倉八幡宮の分霊を勧請奉祀した」と伝える。また、下宮が所在するこの島状の丘陵突端部を「八幡山」と呼び、戦国時代には千葉、龍造寺軍の有馬・大村軍に対する防衛拠点（砦あるいは出城）であったと記載している。その真偽については不明であるが、今回の調査はこうした文献資料にある初見の時期から古くは約1世紀も逆登って施設が存在した可能性を裏付けることになった。

八幡山遺跡全体が戦国時代に戦略拠点として存在していたことは、現状からも推察することができるようである。発掘調査においてもA-II調査区で検出したSX-49について、戦国時代特有の縦濠と横濠である可能性が指摘されている<sup>(注3)</sup>。この遺跡の西側斜面が国道拡幅事業により削平される前に縄張り調査等を実施してこの施設の全貌を把握しておく必要があったと今改めて反省している。現在遺存している部分の現況測量調査等、今後の課題として取り組みたい。

しかし、この調査では16世紀以降の遺物の出土をみていないのは疑問である。近世以降の削平等によって消失した可能性も考えられる。しかし、山城的施設とみられる土壇や掘立柱建物等の遺構、あるいはC-I～II調査区で検出したSD-150、及びB～C調査区で確認した整地層から出土する遺物は13世紀前後～14世紀の様相を示している。

特に重要な点は、白磁碗を中心とする輸入陶磁器が破片ではあるがかなりの点数出土していることであろう。このことは、この地に輸入陶磁器を手に入れるだけの有力な人物が存在していたことを表しているのであるが、そうした可能性を探る文献資料はない。少なくとも、こうした状況から推理するならば、鎌倉幕府成立に係る有力武士の台頭に伴う居館的施設が考えられる。

たとえば、鎌倉幕府の権力が確立していくなかで、在郷の土豪は御家人として組み込まれていくが、そうした有力土豪で砥川を本拠とする「田中氏」の存在が伝えられている。そうした在郷の土豪による戦略拠点的性格を有する館跡の可能性も秘めているといえる。また一方では、寺院の存在の可能性も指摘されるだろう。しかし、これまでに寺院的性格を示す遺物は確認できていない。B-II調査区の平坦面で検出した掘立柱建物跡や石組遺構SK-41がそうした施設の性格を示すものであるかどうか、今のところは判断し難い。

この遺跡の性格付けについては、その他の中世山城等の発掘例や文献資料との突き合わせが必要である。今後の研究課題であろう。

注1) 佐賀平野における甕棺の編年については、出土資料の総合的な検討作業が進んでいない。そのため、この区分は「二塚山」(佐賀県東部中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、佐賀県教育委員会1979)、橋口達也「甕棺の編年の研究」(九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書31、福岡県教育委員会1979)及び「晴田小学校裏遺跡」(木下巧 佐賀県立博物館・美術館調査研究書第18集 1993)の編年を参考とした。また、蒲原宏行氏(佐賀県立博物館)、古庄秀樹氏(小城町教育委員会)の教示を得た。

注2) この2つの遺跡については平成5年度～6年度にかけて3次の調査を行い、現在整理作業中。弥生中期の大型掘立柱建物、後期の竪穴住居等及び甕棺等が検出されている。

注3) 宮武正登氏(佐賀県立名護屋城博物館)の御教示を得た。

土器観察表 (1)

( ) は、復元推計または現存部計

No.	出土遺構	器種	種別	残存状況	法 量 (cm)				色 調	胎 土	焼成	調 整	その他の特徴
					口 径	器 高	底 径	胴 径					
1	S K-209	甕	弥生	口縁部破片	(24.2)	(4.2)	---	---	赤褐色	粗・3の砂混	良好	摩耗のため不明	
2	S K-209	甕	弥生	口縁部破片	(28.0)	4.9	---	---	暗黄灰色	粗・5の砂混多	良好	不明	
3	S K-209	甕	弥生	口縁部破片	(31.0)	(2.8)	---	---	淡赤褐色	良・1の砂粒混	良好		黒斑あり
4	S X-200	甕	弥生	口縁部破片	(27.0)	(6.0)	---	---	淡赤褐・淡黄灰	粗・2の砂粒多混	良好	摩耗のため不明	外面黒色顔料塗布
5	S X-200	甕	弥生	口縁部破片	(33.0)	(6.2)	---	---	淡赤褐色	粗・2の砂粒多混	良好	摩耗のため不明	
6	S X-200	甕	弥生	口縁部破片	(33.6)	(3.3)	---	---	淡赤褐色	粗・2の砂粒多混	良好	摩耗のため不明	
7	P-01	甕	弥生	口縁部破片	(28.0)	(5.1)	---	---	淡灰白・淡赤褐	粗・3の砂粒混	良好	摩耗のため不明	
8	P-01	甕	弥生	口縁部破片	(26.6)	(3.7)	---	---	暗赤褐色	良・3の砂粒混	良好	横ナデ・縦方向のハケ目	
9	S K-209	甕	弥生	口縁部破片	19.6	4.3	---	---	赤褐色	粗・2の砂粒混	良好	摩耗のため不明	
10	S K-209	袋状口縁甕	弥生	口縁部破片	(16.4)	(3.7)	---	---	淡灰白色	良・4の砂混	良好	ナデ	
11	S K-209	壺	弥生	底部破片	---	(4.1)	(11.0)	---	赤褐色～灰白色	良・2の砂粒混	良好	摩耗のため不明	
12	S X-200	甕	弥生	口縁部破片	(13.2)	(3.7)	---	---	淡赤褐色	良・微砂少量混	良好	摩耗のため不明	
13	S X-123	器台	弥生	口縁部破片	(14.8)	---	---	(22.4)	淡赤褐色	良・1の砂粒混	良好	摩耗のため不明	丹塗りのこる
14	S K-02	坏身	須恵器	1/8	(12.0)	(3.9)	---	(14.4)	淡灰色	良・1の砂混	堅緻	回転ナデ・回転ヘラケズリ	頸部径
15	P-84	甕	須恵器	1/2	(13.2)	5.4	---	---	淡紫灰・淡青灰	良・1の砂粒混	堅緻	回転ナデ・回転ヘラケズリ	ボタン状つまみ
16	P-84	甕	土師器	口縁部破片	(20.4)	(5.9)	---	---	淡桃褐色	良・1の砂粒混	良好		
17	S K-151	甕	土師器	口縁部破片	(16.4)	(5.0)	---	---	赤褐色	良・1の砂粒混	良好	不明	
18	S K-151	甕	土師器	口縁部破片	(17.9)	3.8	---	---	暗赤褐色	粗・3の砂混	良好	摩耗のため不明	
19	S K-151	甕	土師器	口縁～胴部	(16.2)	(10.9)	---	---	暗赤～暗褐色	粗・4の砂混	良好		
20	S K-151	甕	土師器	口縁部破片	(21.0)	(7.7)	---	---	暗赤褐～明赤褐	粗・3の砂粒混	良好	摩耗のため不明	
21	S K-01	煎	須恵器	口縁～体部上半1/2	(11.5)	9.5	---	---	灰色～暗灰色		悪い	内ナデ・外回転ナデ	ロクロ回転方向右
22	S E-04	甕	土師器	口縁～胴部	(19.4)	(7.0)	---	---	暗赤褐色	粗・5の砂混	良好	摩耗のため不明	
23	S K-153	甕	土師器	口縁～胴部	(22.4)	(8.5)	---	---	淡赤褐色	良・4の砂粒少混	良好	摩耗のため不明	
24	S K-151	坏	土師器	1/3	(13.0)	4.8	---	---	赤褐色～青灰色	良・2の砂粒混	良好	摩耗のため不明	
25	a-1	皿	瓦器	1/8	(10.0)	(1.7)	---	---	淡灰色	精良	良好	ナデ後粗いミガキ	
26	S K-151	高坏	土師器	坏部破片	(12.8)	(4.4)	---	---	赤褐色	精良・微砂混	良好	摩耗のため不明(ナデ)	
27	S K-151	台付甕	土師器	1/2	---	(10.6)	(7.6)	---	暗黄灰・暗赤褐	粗・2の砂混	軟質	内ナデ・外ハケ目・摩耗	
28	S K-151	高坏	土師器	1/2	(10.8)	(8.5)	---	---	赤褐色	良・7の砂粒混	良好	摩耗のため不明	
29	S K-151	支・脚	土師器	1/2	---	(16.5)	---	---	淡赤褐色	精良・微砂混	良好		
30	a-1	甕	土師器	口縁部破片	(15.6)	(5.7)	---	---	淡灰褐色	良・1の砂粒混	良好	摩耗のため不明	
31	a～b-1	甕	土師器	口縁部破片	(17.0)	(8.9)	---	(17.8)	赤褐色	粗・4の砂粒混	良好		
32	a-1	甕	土師器	口縁部破片	(19.2)	(7.0)	---	---	淡褐色	良・5の砂粒混	良好	摩耗のため不明・ケズリ痕	
33	b-1	坏	土師器	1/4	(15.4)	3.7	---	---	黒褐色・明赤褐	精良・微粒砂混	軟質	摩耗のため不明(ナデ)	
34	b-2	坏	土師器	1/4	(14.4)	(5.2)	---	---	赤褐色	良・1の砂粒混	良好	摩耗のため不明(ナデ)	
35	a～b-1	甕	須恵器	口縁部破片	(31.0)	(3.6)	---	---	淡青灰色	精良	軟質	回転ナデ	
36	a-1	甕	土師器	口縁～胴部	(18.2)	(10.9)	---	---	淡黄灰色	良・5の砂粒混	良好	摩耗のため不明	
37	a-1	甕	土師器	口縁～胴部	(18.6)	(7.8)	---	---	赤褐色	良・3の砂粒混	良好	外摩耗・内ケズリ痕	
38	S X-35	坏身	須恵器	1/2	(11.4)	4.4	---	(13.4)	淡赤褐色	良・2の砂粒混	良好	回転ナデ・回転ケズリ	
39	S C-122	甕	土師器	口縁部破片	(16.8)	(6.5)	---	---	淡灰白色	良・1の砂粒多混	良好	横ナデ内ケズリ・外ハケ	
40	S C-122	甕	土師器	口縁部破片	(18.0)	(7.3)	---	---	淡赤褐～灰白色	良・1の砂粒多混	良好	内ケズリ・横ナデハケ目	
41	S X-123	壺	土師器	口縁～胴部	(22.8)	(13.4)	---	---	赤褐色	良・3の砂粒混	良好	内摩耗(ハケ目)外ハケ目	
42	S X-123	高坏	土師器	坏部破片	(29.8)	(6.5)	---	---	淡赤褐色	良・3の砂粒混	良好	摩耗のため不明	
43	S C-122	鉢	土師器	口縁～体部	(23.2)	(7.1)	---	---	淡赤褐～淡黄灰	良・4の砂粒混	良好	摩耗のため不明	
44	S C-122	高坏	土師器	2/3	---	7.7	(9.2)	---	淡黄白色	良・4の砂粒混	良好	粗いミガキ・ナデ	坏径(14.6)
45	S K-03	皿	土師器	1/5	(15.0)	1.8	(11.8)	---	淡赤褐色	精良	良好	ナデ・糸切り底	
46	S E-04	坏	土師器	1/3	(13.8)	4.0	7.4	---	淡黄白色	精良	良好	ナデ・糸切り底	
47	ピット群東	皿	土師器	内1/1	(6.2)	1.1	5.9	---	淡赤褐色	良・1の砂粒混	良好	摩耗・糸り切板目瓦痕	
48	ピット群東	皿	土師器	1/2	(9.0)	11.5	(6.2)	---	淡赤褐色	精良	良好	摩耗(ナデ)・糸切板目瓦痕	
49	ピット群東	皿	土師器	1/2	8.4	1.4	7.5	---	赤褐色	精良・1の砂粒混	良好	摩耗のため不明	
50	ピット群東	皿	土師器	1/4	(15.6)	2.7	(10.0)	---	淡赤褐色	精良・微砂粒混	良好	回転ナデ(糸切り)	

土器観察表 (2)

( ) は、復元推計または現存部計

No.	出土遺構	器種	種別	残存状況	法 量 (cm)				色 調	胎 土	焼成	調 整	その他の特徴
					口 径	器 高	底 径	胴 径					
51	SK-4.1	瓦頭	瓦器	破片	---	---	---	---					
52	P-19	皿	瓦器	1/3	(9.8)	1.6	(6.5)	---	淡黒灰～淡灰白	精良	良好	内ナデ・外ヘラ状工具ナデ	糸切り痕
53	P-27	皿	土師器	3/4	(8.6)	0.9	(6.0)	---	赤褐色	良・1の砂粒混	良好	摩耗(ナデ)・糸切り	
54	SX-35	皿	瓦器	2/3	9.8	2.0	7.6	---	淡黒灰色	精良	良好	ナデ・部分的に粗いミガキ	
55	SX-35	皿	土師器	4/5	7.8	8.0	6.1	---	淡赤褐色	良・微砂混	良好	摩耗・糸切り	
56	SX-35	碗	瓦器	完形	15.1	6.1	(6.0)	---	黒灰色～灰色	良・1の砂粒少混	良好	ナデ後ヘラミガキ	高台付
57	SX-35	高台付碗	瓦器		(15.0)	5.6	(6.0)	---	淡灰白色	精良	良好	粗いミガキ・ナデ	
58	SX-35	高台付碗	瓦器	1/4	(17.2)	(4.1)	---	---	淡灰白色	精良	軟質	摩耗のため不明、	
59	SX-35	高台付碗	瓦器	1/6	(17.2)	5.1	---	---	淡黒灰～淡灰白	精良・微砂混	良好	粗いミガキ・摩耗	
60	SD-150	小皿	土師器	1/5	(7.6)	1.2	(5.8)	---	淡赤褐色	精良	良好	不明(ナデ)	
61	SD-150	小皿	土師器	完形	9.8	1.5	---	---	灰褐色	良・白砂粒少混	良好		糸切り
62	SD-150	小皿	土師器	2/3	(10.0)	1.5	8.2	---	淡黒灰色	精良・微砂粒混	良好	ナデ(糸切り底)	
63	SD-150	小皿	土師器	2/3	(7.6)	1.1	(5.0)	---	淡赤褐色	精良・微砂粒混	良好	ナデ(糸切り底)	
64	SD-150	小皿	土師器	1/3	(7.8)	1.1	6.0	---	淡赤褐色	精良	良好	ナデ(糸切り底)	
65	SD-150	小皿	土師器	1/3	---	(1.4)	4.6	---	淡赤褐～淡黄白	精良	良好	内ナデ・外ナデ	
66	SD-150	小皿	土師器	1/2	---	(2.0)	(5.0)	---	淡赤褐色	精良	良好	内ナデ・外ナデ	
67	SD-150	鉢?	土師器	口縁部破片	(30.2)	(7.5)	---	---	淡黄灰色	粗・3の砂粒混	良好	摩耗のため不明	
68	SD-150	小皿	土師器	1/4	(8.6)	1.1	(6.4)	---	赤褐色	精良	良好	回転ナデ・糸切り	
69	SD-150	小皿	土師器	1/5	(8.2)	1.1	(6.2)	---	淡赤褐～淡灰白	精良・微砂粒混	良好	ナデ・糸切り	
70	SD-150	小皿	土師器	1/5	(12.2)	1.7	(9.6)	---	淡赤褐～淡黄白	精良	良好	ナデ・糸切り	
71	SD-150	小皿	瓦器		(12.8)	3.0	8.4	---		精良	良好	内ナデ・糸切り板目圧痕	
72	SD-150	小皿	土師器	1/4	(6.0)	1.4	(4.6)	---	赤褐色	精良	良好	ナデ・糸切り	
73	SD-150	高台付碗	瓦器	口縁部破片	(17.4)	(2.9)	---	---	黒灰色	精良	良好	ナデ	
74	SD-150	高台付碗	瓦器	口縁部破片	(16.8)	(2.9)	---	---	淡黒灰～灰白色	良・微砂粒混	良好		
75	SD-150	坏	土師器	1/2	(14.8)	3.4	6.6	---	淡赤褐色	精良	良好	摩耗のため不明・底は糸切	
76	SD-150	坏	土師器	1/10	(15.0)	3.0	(10.4)	---	淡赤褐色	精良	良好	ナデ(糸切り底)	
77	SD-150	高台付碗	瓦器		---	(3.5)	(5.6)	---	淡灰色	精良・微砂混	軟質	内ナデ・外ナデ	
78	SD-150	高台付碗	瓦器	1/4	---	(2.9)	(6.2)	---	淡灰白色	精良	良好	ナデ	
79	SD-150	高台付碗	瓦器	底部～体部	---	(3.7)	6.4	---	淡灰白・灰白色	精良	良好	内ナデ後ミガキ・外ナデ	粗いヘラミガキ
80	SD-150	高台付碗	瓦器	口縁部破片	(16.0)	(4.1)	---	---	淡灰白色	精良	良好	ナデ後ヘラミガキ	
81	SD-150	高台付碗	瓦器	1/10	(16.4)	4.9	8.0	---	灰白色	良・2の砂粒混	軟質	ナデ後粗いヘラミガキ	
82	a-1	高台付碗?	瓦器	口縁部破片	(17.2)	(3.4)	---	---	黒灰色・白灰色	精良	良好	摩耗のため不明	
83	a-1	高台付碗	瓦器	1/4	(17.2)	4.7	(6.2)	---	淡黒灰色	精良	良好	内ナデ・ナデ後粗いミガキ	
84	a-1	高台付碗	瓦器		(15.0)	4.9	5.2	---	淡灰～淡灰白色	精良	良好	摩耗のため不明	
85	a-1	高台付碗	瓦器	1/4	(15.6)	5.5	(6.6)	---	淡灰白～淡黒灰	精良	良好	ナデ後粗いミガキ	
86	a-2	高台付碗	瓦器	口縁部破片	(15.8)	(4.8)	---	---	淡灰～淡黒灰色	精良	良好	横方向のミガキ・摩耗	
87	a-1	皿	土師器	1/2	(8.0)	0.9	5.6	---	赤褐色	精良・微砂混	良好	ナデ・板目圧痕あり	
88	a-1	皿	瓦器	1/8	(10.0)	(1.7)	---	---	淡灰色	精良	良好	ナデ後粗いミガキ	
89	a-1	皿	土師器	口縁部欠失	---	(0.8)	(5.8)	---	淡黄白色	精良	良好	内ナデ・外ナデ・糸切り	
90	a-1	皿	土師器	1/3	(9.2)	1.2	(6.2)	---	赤褐色	精良・微砂混	良好	ナデ・糸切り板目圧痕あり	
91	a-1	皿	土師器	約1/1	9.0	1.0	6.3	---	淡赤褐色	精良・微砂混	良好	回転ナデ・糸切り板目圧痕	
92	a-1	皿	土師器	1/4	---	(1.0)	(9.4)	---	灰褐色～暗赤灰	精良・微砂粒混	良好	内ナデ・外ナデ・糸切り	
93	b-1	高台付碗	瓦器	底部破片	(2.1)	---	(6.6)	---	淡黒灰～淡灰白	精良	良好	内ミガキ・外ナデ後ミガキ	
94	b-1	坏	瓦器	口縁部破片	(15.8)	(2.9)	---	---	淡黒灰色	精良・微砂混	良好	横方向のミガキ・ナデ	
95	b-1	高台付碗	瓦器	1/4	(18.0)	4.8	(9.0)	---	淡黒灰～淡灰白	精良	良好	粗いミガキ・ナデ	
96	b-1	高台付碗	瓦器		(18.0)	6.1	---	---	淡黒灰・淡灰白	精良	良好	ナデ後粗いミガキ	
97	b-1	高台付碗	土師器	1/3	(17.0)	5.8	(7.0)	---	淡黒灰・乳灰白	精良	良好	ナデ	内黒煙
98	b-1	高台付碗	瓦器	1/3	(17.0)	5.7	(6.0)	---	淡灰色	精良・2の砂粒混	良好	粗いミガキ・回転ナデ	
99	b-1	高台付碗	土師器	口縁～体部	(16.0)	(4.1)	---	---	淡黒灰・乳灰白	精良	軟質	摩耗のため不明	

焼棺観察表

( )は復元推計,あるいは現存法量

遺構	掲載図	主軸方向	埋置角度	接合部	形態	口径	器高	底径	最大口径	備考
S J - 22	Fig.5 Fig.8	S-86°-W	-3°	覆口	(上)甕 (下)甕	80.0 69.5	(50.0) (95.5)	12.0 65.0	----	黒斑あり
S J - 23	Fig.6 Fig.8	N-37.5°-W	----	----	甕	(36.0)	(75.0)	(11.5)	(60.0)	上位部に黒斑あり
S J - 24	Fig.7 Fig.8	S-61°-E	ほぼ水平	単棺	甕	(79.0)	(109.0)	(11.0)	----	下位部に黒斑あり
S J - 25	Fig.9 Fig.11	S-60°-W	37°	石蓋	甕	(64.2)	106.6	11.5	83.6	胴部左右対象部に黒斑あり
S J - 27	Fig.10 Fig.12	S-36°-E	4.5°	呑口	(上)甕 (下)甕	---- (70.0)	---- (100.0)	10.0 11.6	----	胴部中位から打ち欠いて利用 内面から開けた穿孔あり
S J - 28	Fig.9 Fig.11	S-27°-E	7°	----	甕	(83.2)	(114.9)	12.0	----	単棺の可能性あり
S J - 33	Fig.16 Fig.22	S-70.5°-E	43°	覆口	(上)甕 (下)甕	---- ----	(24.2) (37.9)	9.8 9.4	33.5 32.2	上下棺共に口縁部を打ち欠いて利用
S J - 34	Fig.9 Fig.12	S-53°-E	54°	----	甕	----	(100.0)	9.0	----	胴部下位に黒斑あり
S J - 52	Fig.13 Fig.15	S-17.5°-E	----	覆口	(上)甕 (下)甕	(77.4) (66.0)	(15.7) (55.5)	----	----	上下棺共に底部を欠失している
S J - 54	Fig.13 Fig.15	N-77.5°-E	ほぼ水平	接口	(上)鉢 (下)甕	(74.4) (72.3)	(40.2) 103.5	(12.4) (13.6)	----	
S J - 55	Fig.16 Fig.22	S-74°-W	----	接口	(上)甕 (下)甕	(31.6) (34.8)	(3.7) (4.8)	8.0	----	
S J - 56	Fig.19	S-86°-W	----	----	甕	----	----	(15.6)	(10.8)	
S J - 58	Fig.19	S-31°-W	----	----	甕	----	----	----	----	胴部に黒斑あり
S J - 59	Fig.16	S-47°-W	----	----	甕	(39.8)	(18.1)	10.2	----	
S J - 60	Fig.16	S-72.5°-E	----	呑口?	(上)甕 (下)甕	---- ----	(13.4) (25.6)	9.5	----	底部に黒斑あり
S J - 61	Fig.14 Fig.15	S-63°-W	----	接口	(上)甕 (下)甕	71.4 (73.8)	40.1 (50.2)	10.6	----	胴部に黒斑あり
S J - 62	Fig.14 Fig.17	S-74.5°-W	----	----	甕	(33.6)	68.5	12.4	(57.5)	
S J - 63	Fig.16	----	----	----	甕	----	----	----	----	実測不可
S J - 64	Fig.16	S-45°-E	----	----	甕	----	----	----	----	実測不可
S J - 65	Fig.16 Fig.17	N-32°-W	----	----	甕	8.9	(29.4)	----	----	
S J - 70	Fig.17	----	----	----	(上)甕 (下)甕	(33.4) (31.0)	(4.0) (17.3)	----	----	胴部に黒斑あり
S J - 71	----	----	----	----	----	----	----	----	----	実測不可
S J - 76	Fig.14	N-78°-W	15.5°	接口	(上)甕 (下)甕	----	----	----	----	実測不可
S J - 88	Fig.19	S-85°-W	----	----	甕	----	----	----	----	実測不可
S J - 89	Fig.19 Fig.20	S-71°-W	ほぼ水平	----	(上)甕 (下)甕	(44.0) (68.0)	(6.5) (29.6)	11.0	----	底部に黒斑あり
S J - 90	----	----	----	----	甕	----	----	----	----	部分的に赤彩が残る
S J - 93	Fig.16	S-78°-E	----	----	甕	(77.8)	(19.9)	----	----	
S J - 101	Fig.18 Fig.20	N-70°-E	----	----	甕	----	----	----	----	
S J - 102	Fig.18	S-62°-W	----	----	甕	----	(16.4)	13.2	----	底部に黒斑あり
S J - 110	Fig.19 Fig.21	S-86.5°-W	ほぼ水平	----	甕	31.0	63.4	11.8	----	胴部に黒斑あり
S J - 111	Fig.19 Fig.21	S-76°-W	ほぼ水平	----	甕	40.2	(73.8)	12.7	----	胴部に黒斑あり
S J - 112	Fig.19 Fig.21	S-76°-W	ほぼ水平	接口	(上)甕 (下)甕	(29.1) (30.3)	(4.3) (7.1)	----	----	口縁部に黒斑あり
S J - 113	Fig.19 Fig.21	S-69°-W	3°	接口	(上)甕 (下)甕	33.9 39.0	(16.4) (14.6)	7.7	----	部分的に赤彩が残る
S J - 114	Fig.19 Fig.21	S-64°-W	ほぼ水平	接口	(上)甕 (下)甕	(28.0) (29.8)	(8.8)	(4.1)	----	上部に黒斑あり
S J - 118	Fig.20	----	----	接口	(上)甕 (下)甕	(30.0) (30.0)	(2.0)	9.9	----	上部に黒斑あり
S J - 119	Fig.20	----	----	----	甕	----	----	----	----	実測不可

---

圖 版

---





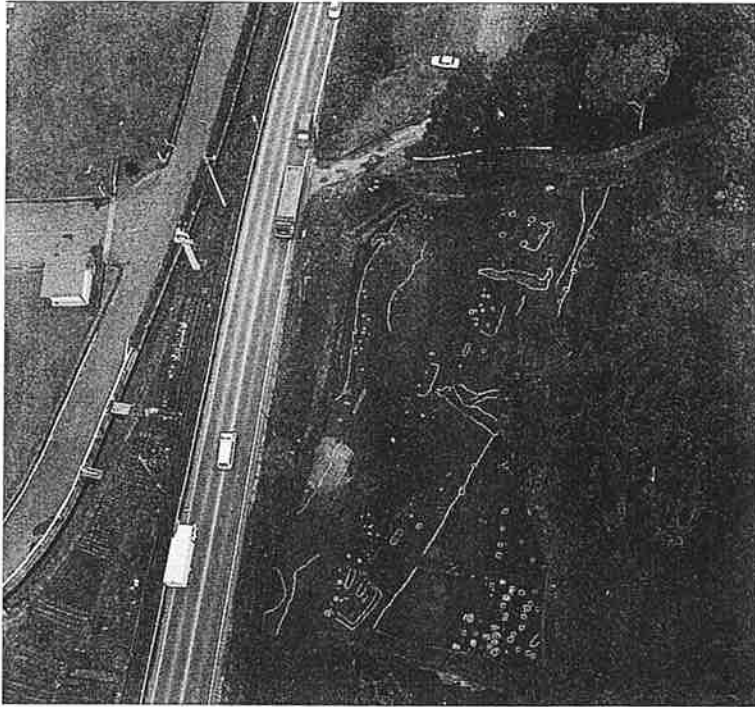
●Photo. 6 A・B調査区遺構完掘状況



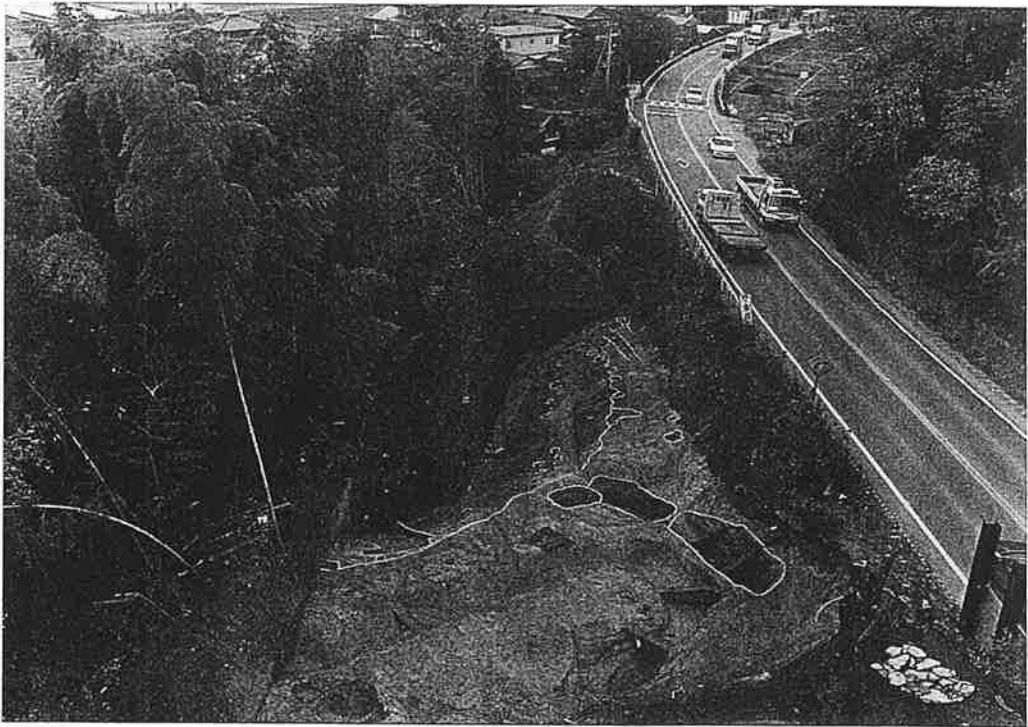
●Photo. 7 B-Ⅱ調査区遺構完掘状況



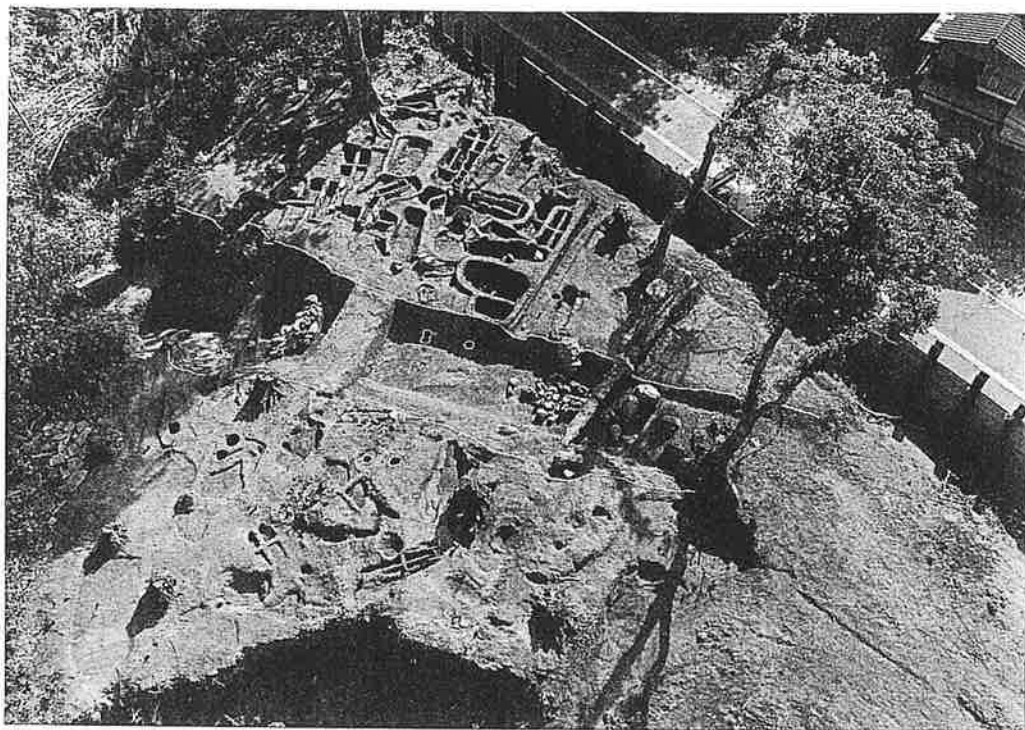
図版 2



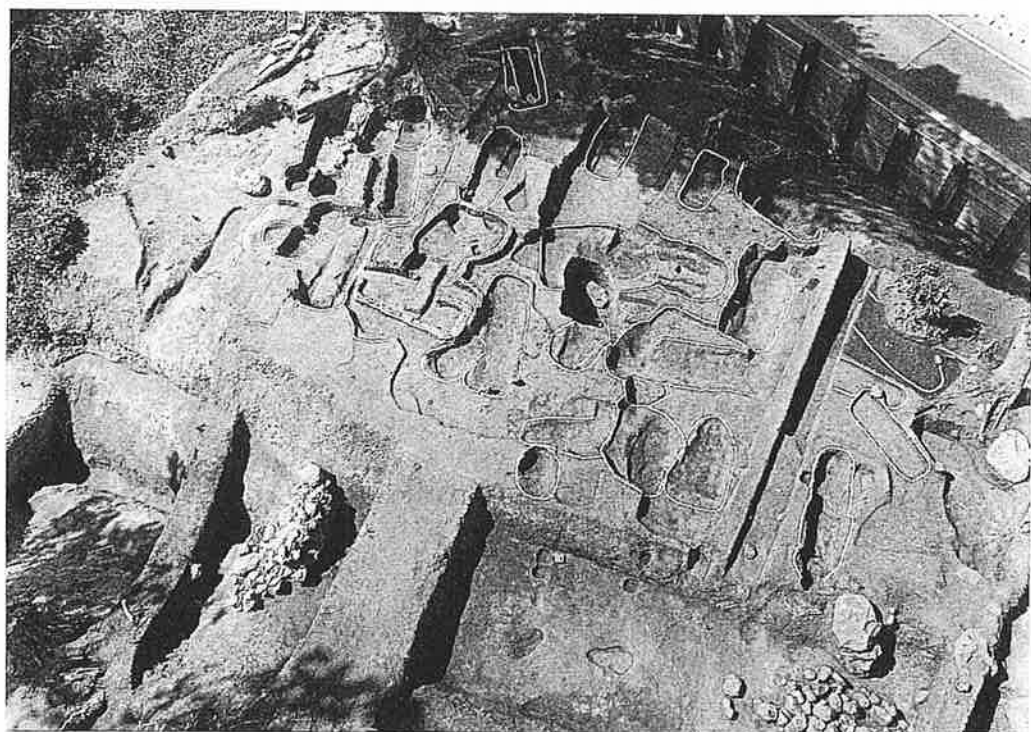
●Photo. 8 C調査区遺構完掘状況



●Photo. 9 A-I調査区遺構完掘状況



●Photo.10 A-Ⅱ調査区遺構完掘状況



●Photo.11 A-Ⅱ S X-49西側遺構完掘状況

图版 4

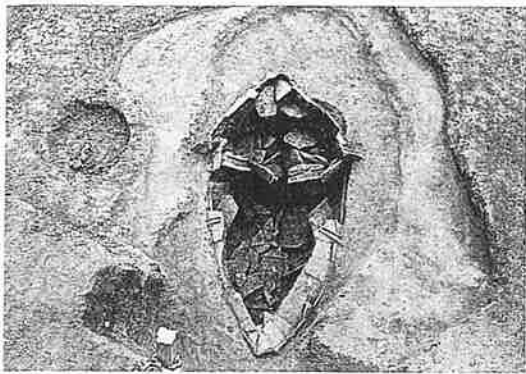


Photo.12 S J-22 檢出状況



Photo.16 S J-25 人骨出土状況



Photo.13 S J-23・24 檢出状況



Photo.17 S J-27 檢出状況

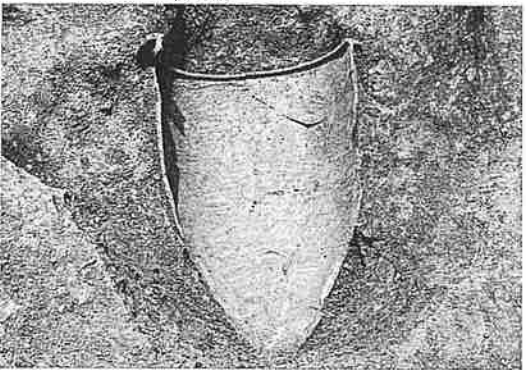


Photo.14 S J-24 檢出状況

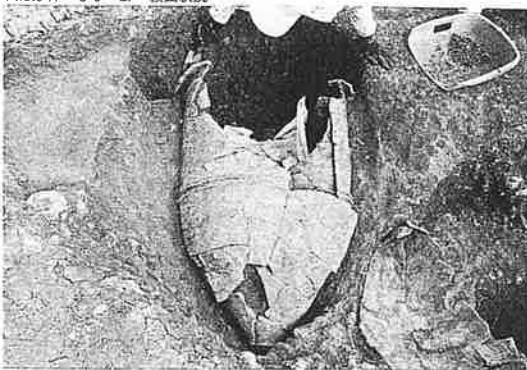


Photo.18 S J-28 檢出状況



Photo.15 S J-25 檢出状況



Photo.19 S J-33 檢出状況



Photo.20 S J-34 檢出狀況



Photo 24 S J-59. 60 檢出狀況



Photo.21 S J-52 檢出狀況



Photo 25 S J-61 檢出狀況

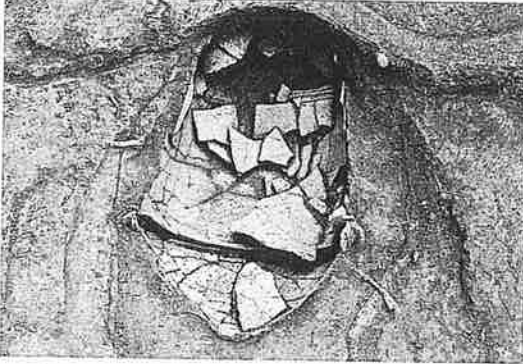


Photo.22 S J-54 檢出狀況

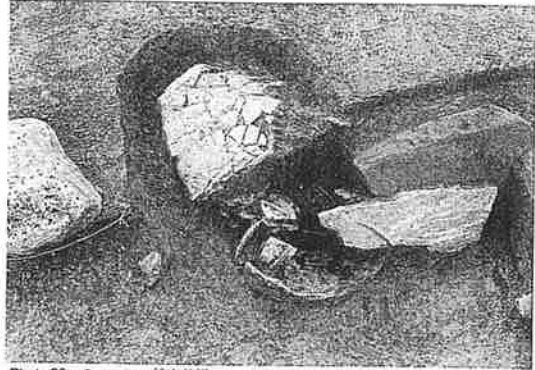


Photo.26 S J-76 檢出狀況

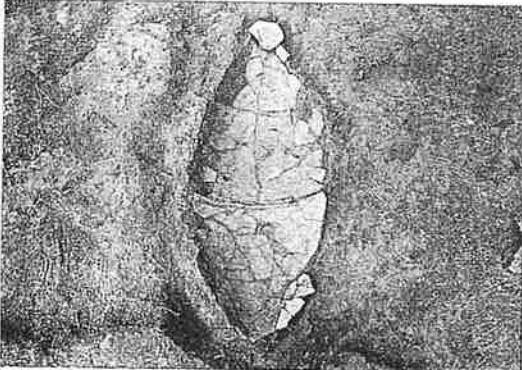


Photo.23 S J-55 檢出狀況



Photo.27 S J-88 檢出狀況

図版 6

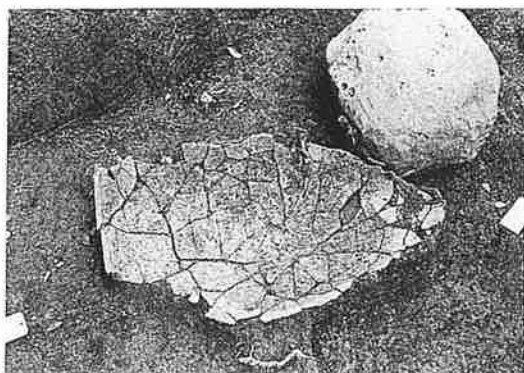


Photo.28 S J-89 検出状況



Photo.29 S J-111 検出状況



Photo.30 S J-111, 113 検出状況

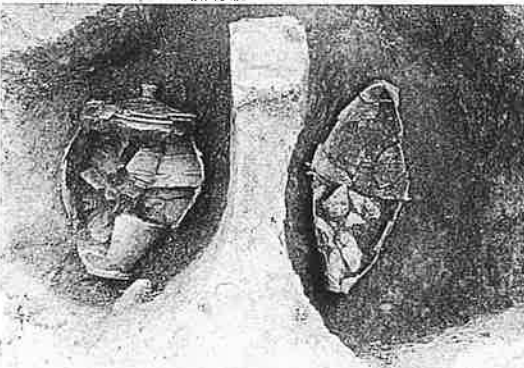


Photo.31 S J-112, 114 検出状況



Photo.32 S J-110 検出状況



Photo.33 S C-26 検出状況



Photo.34 S C-26 棺内状況



Photo.35 S C-51 検出状況

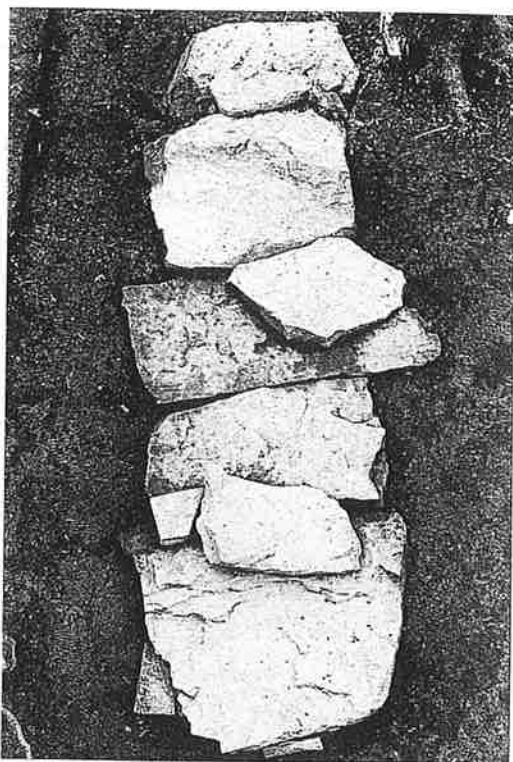


Photo.38 S C-75 検出状況

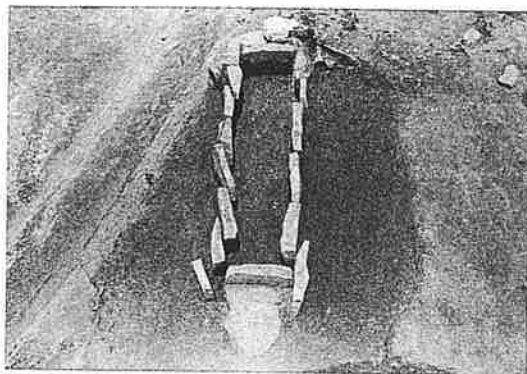


Photo.36 S C-51 棺内状況



Photo.37 S C-53 検出状況

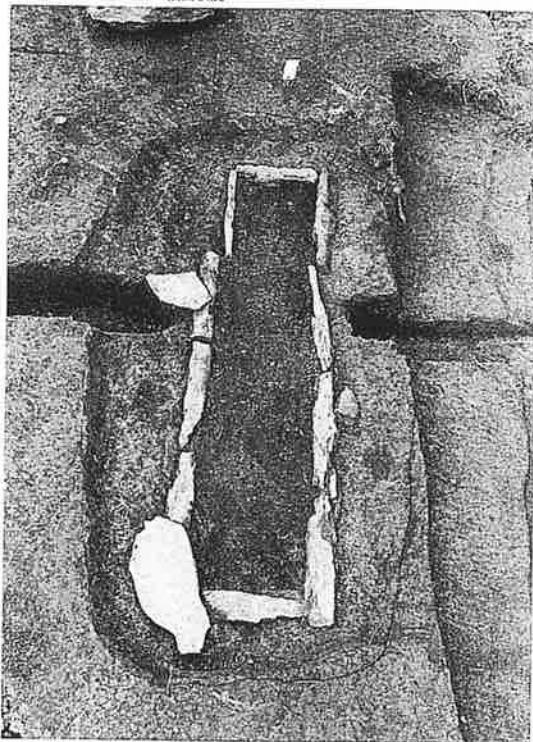


Photo.39 S C-75 蓋石除去後

図版 8



Photo 40 SC-75 棺内状況



Photo 41 SC-75 掘り方状況



Photo 42 SC-75 掘出土状況

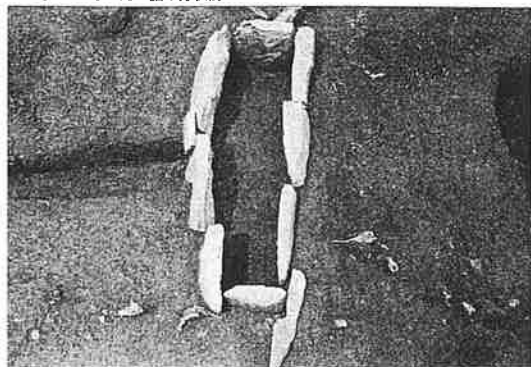


Photo 44 SC-78 棺内状況



Photo 43 SC-78, 79 検出状況

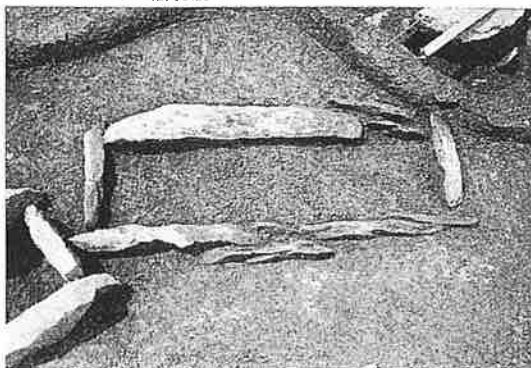


Photo 45 SC-79 蓋石除去後



Photo.46 S C-82 検出状況

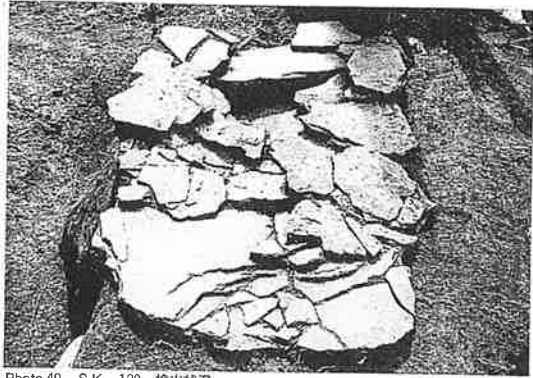


Photo.49 S K-120 検出状況



Photo.47 S C-83 検出状況



Photo.50 S C-122 検出状況

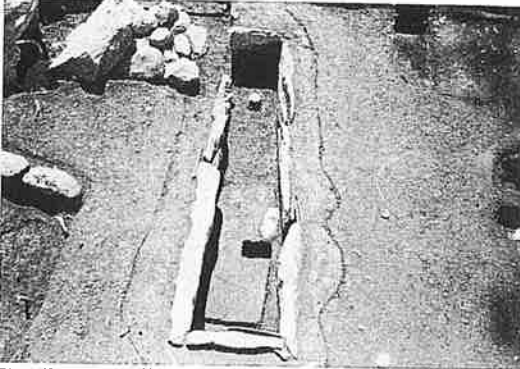


Photo.48 S C-83 棺内状況



Photo.51 S C-122 墓石除去後



Photo.52 S K-21 検出状況



Photo.53 S K-29 検出状況





Photo.54 S K-68, 69 掘出状況



Photo.57 S K-86 鉄剣出土状況

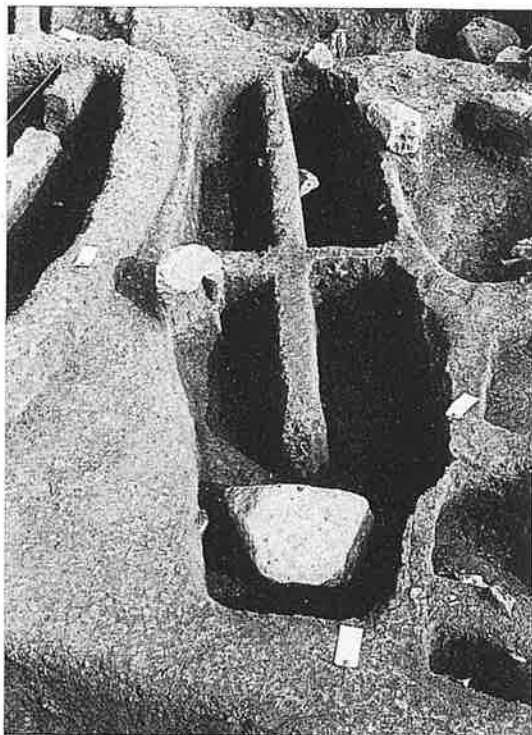


Photo.55 S K-86 検出状況



Photo.56 S K-86 完掘状況

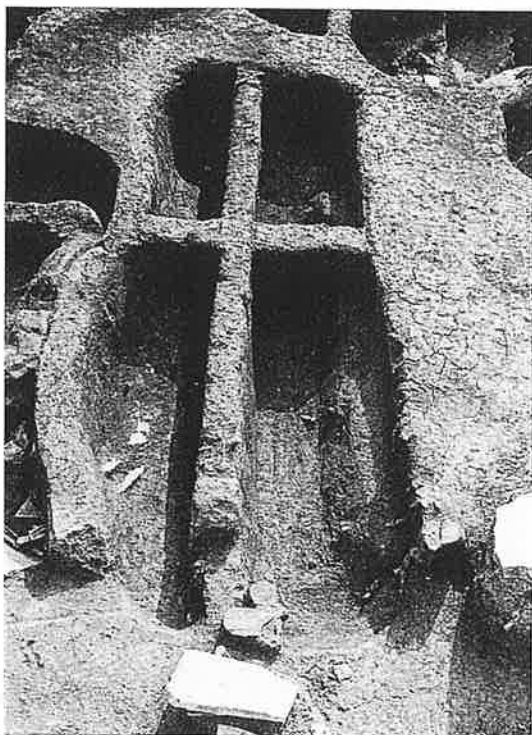


Photo.58 S K-87 検出状況



Photo.59 S K-87 完掘状況



Photo.61 S K-92 検出状況

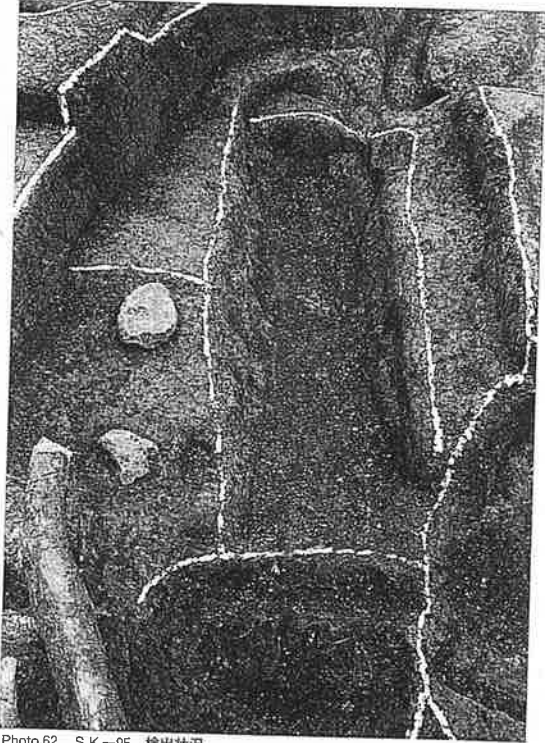


Photo.62 S K-95 検出状況

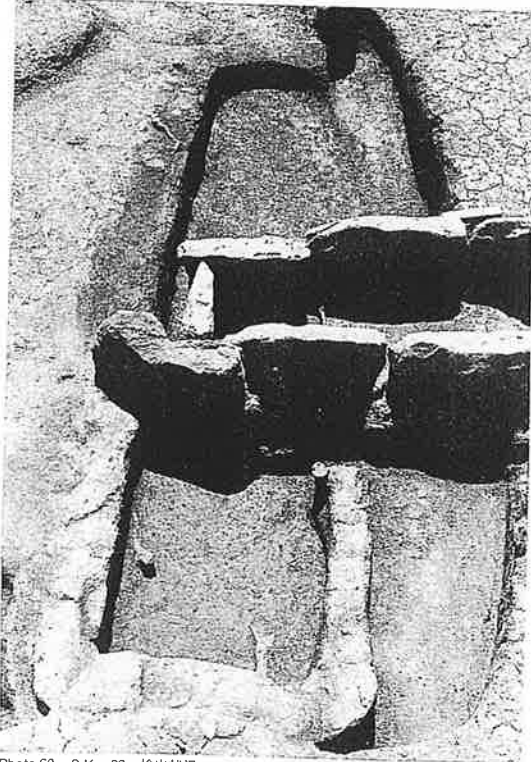


Photo.60 S K-92 検出状況



Photo.63 S K-115 検出状況

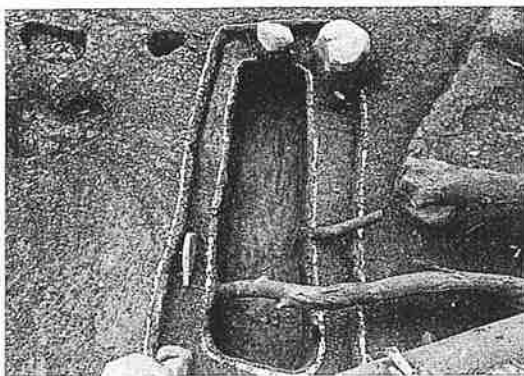


Photo.64 S K-116 検出状況

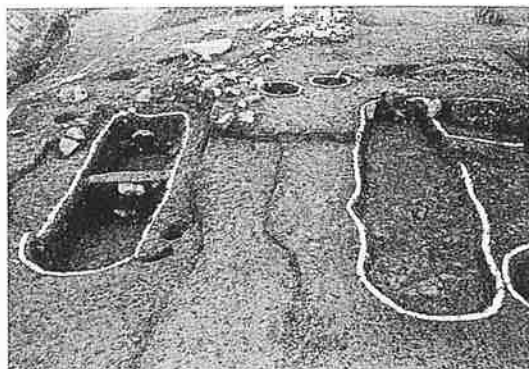


Photo.66 S K-156, 157 検出状況



Photo.65 S K-156 検出状況

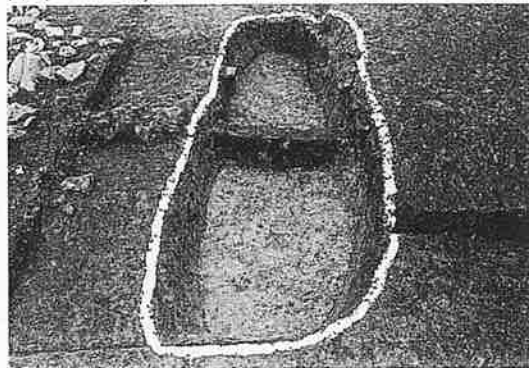


Photo.67 S K-153 検出状況



Photo.68 S K-151 検出状況



Photo.69 S K-152 検出状況

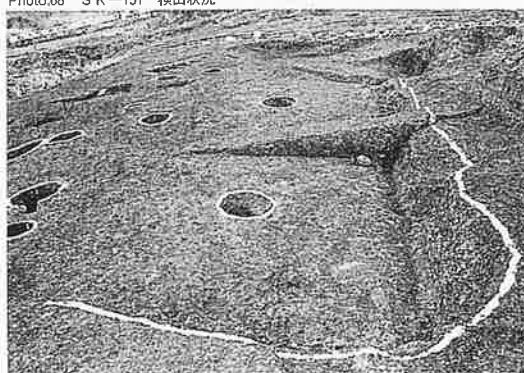


Photo.70 S K-153 検出状況



Photo.71 S E-04 土層



Photo.80 B-II 調査区 S X-35

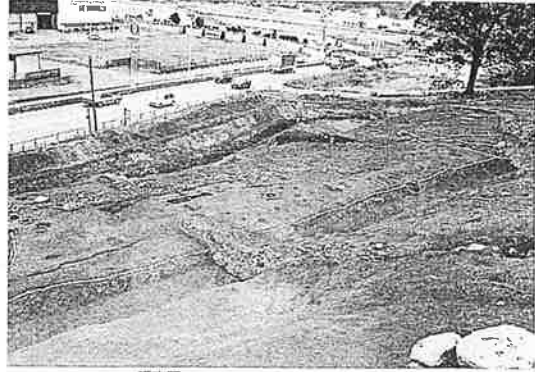


Photo.81 C-II 調査区 S D-150



Photo.82 C-III 調査区北側ピット群



Photo.83 C-I 調査区整地層除去後



Photo.85 C-I 調査区 S D-150土層



Photo.84 A-II 調査区 S X-49土層



Photo.86 C-II 調査区 S D-150

图版16

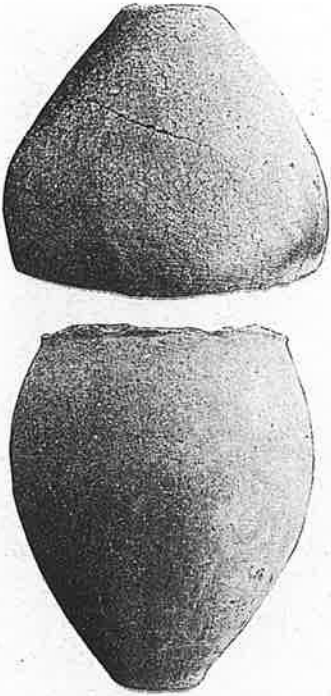


Photo.87 S J—33



Photo.88 S J—25

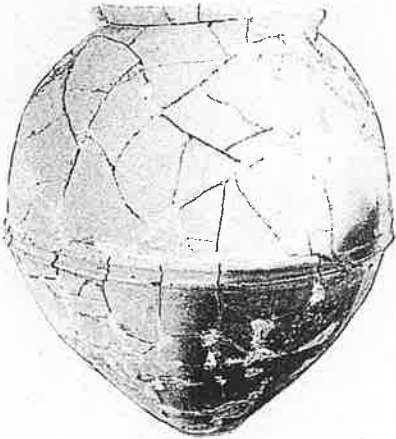


Photo.89 S J—62

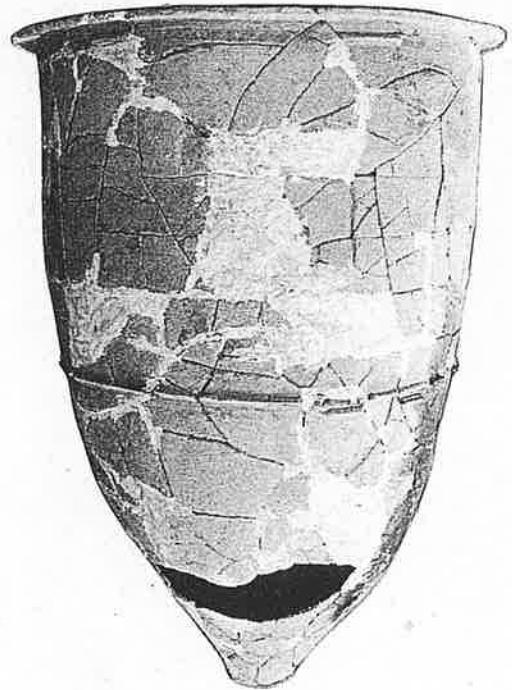


Photo.90 S J—24

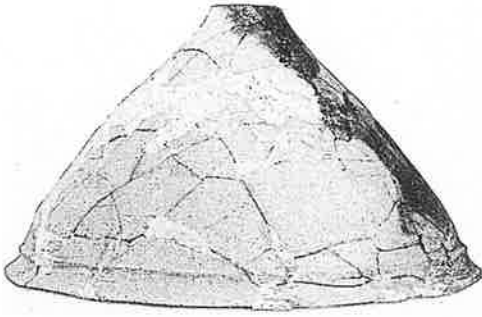


Photo.91 S J-22(上)

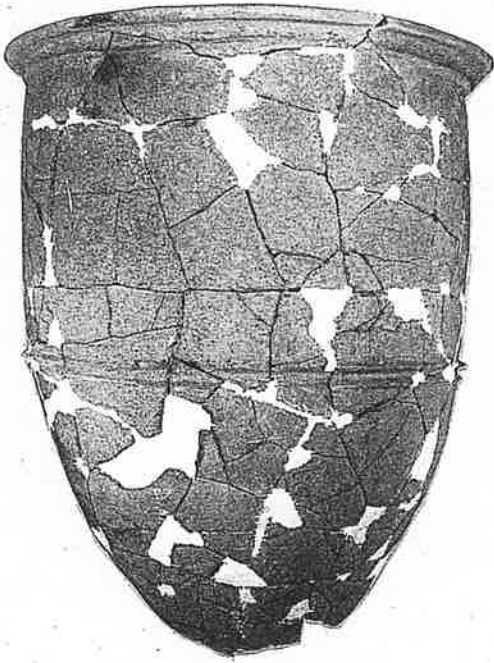


Photo.92 S J-22(下)



Photo.93  
S K-86出土鉄剣



Photo.94 S C-75  
出土鏃



Photo.95 S K-81  
出土鉄斧



Photo.96 滑石製品

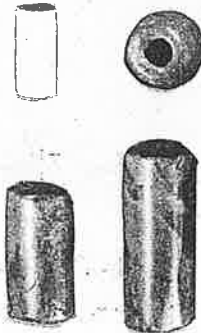


Photo.97 S C-75、S C-78  
出土管玉

牛津町文化財調査報告書第6集

## 八幡山遺跡Ⅰ

平成7年3月31日

発行 佐賀県牛津町教育委員会  
佐賀県小城郡牛津町大字柿樋瀬1100-1

印刷 株式会社音成印刷  
佐賀県小城郡小城町253-4

